

又上席人ハ自己ノ職務ヲ以テ之ヲ言渡スヲ得可シ

第三百二十七條 上席人ハ証人ノ申述ヲ聽シ前後又ハ之ヲ聽シ問ニ
被告人中一人又ハ數人ヲ吟味ノ席ヨリ退カシメ罪犯ノ模様ニ付キ
別席ニテ之ヲ吟味スルヲ得可シ然レトモ各被告人ニ其席ニ居ラ
サル間爲シタル所ノ諸件ヲ詳カニ告知シタル上ニ非サレハ更ニ總
體ノ吟味ニ取掛ル可カラズ

第三百二十八條 証人吟味ノ間陪審檢事長裁判役ハ証人ノ申述又ハ
被告人ノ答辨ノ中ニテ入用ナリト思料スル諸件ヲ書取ルヲ得可
シ但シ之ヲ爲メ辨論ノ妨ヲ爲ス可カラズ

第三百二十九條 証人ノ証ヲ申述フル時間又ハ之ヲ申述ヘタル後上
席人ヨリ罪犯ノ憑據タル可キ諸物件ヲ被告人ニ示シ被告人ヲシテ
之ヲ認ルヤ否ヲ自カラ答ヘシム可シ又上席人ハ別段ノ道理アル時

全上ノ物件ヲ証人ニモ示ス可シ

第三百三十條 若シ吟味ノ上證人ノ述フル所全ク詐偽タル可シト思
ハルハ時ハ上席人檢事長ノ求メニ因リ又ハ民事ノ原告人或ハ被告
人ノ求メニ因リ又ハ自己ノ職務ヲ以テ直チニ其証人ヲ召捕ヘシム
ルヲ得可シ○此場合ニ於テハ檢事長司法警察官吏ノ職ヲ行ヒ上
席人又ハ上席人ヨリ別段任シタル裁判役下吟味掛リ裁判役ノ職ヲ
行フ可シ

下吟味ヲ爲シ終リタル上ニテ總テノ書類ヲ控訴院ノ重罪取調局ニ
送り其局ニ於テ其証人ノ重罪犯ヲ告シ可キヤ否ヲ裁決ス可シ

第三百三十一條 前條ノ場合ニ於テハ檢事長又ハ民事ノ原告人又ハ
被告人ヨリ重罪裁判所ノ次ノ會議ノ日ニ吟味ヲ延ス可キヲ直チ
求ムルヲ得可シ又裁判所ヨリ公務ヲ以テ之ヲ言渡スヲ得可シ

第三百三十二條 若シ被告人ト証人ト互ニ其言語ヲ相通セザル時ハ
 主席人其職務ヲ以テ二十一年以上ノ通辨人ヲ任シ且其通辨人ヲシ
 テ互ニ異ナリタル言語ヲ用フル者ノ述フ所ヲ正實ニ譯解ス可キ
 シ若シ爲サシム可シ若シ此等ノ規則ニ背ク時ハ其通辨シタル諸事
 ノ効ナカレ可シ
 被告人及ヒ檢事長ハ通辨人ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ但シ其
 故障ヲ申述書ニハ其旨趣ヲ記ス可シ
 其故障ノ申述ハ裁判所ニテ裁決ス可シ
 証人裁判役陪審ニ縱令檢事長及ヒ被告人ノ承諾アリト雖モ通辨人
 トナル可カラズ若シ此等ノ者通辨ヲ爲ス時ハ其通辨シタル諸事ノ
 効ナカレ可シ
 第三百三十三條 若シ被告人聾啞ニシテ且文字ヲ書スルヲ知ラザ

ル時ハ主席人平生被告人ト應接スルニ慣熟セシ者ヲ撰ミ言語ヲ通
 セシム可シ
 証人聾啞ニシ時モ亦之ニ等シトス
 此他此條ニ記スル所ニ付キ前條ノ規則ヲ通シ用フ可シ
 聾啞者文字ヲ書スルヲ知ル時ハ其者ヘノ問札及ヒ上席人ヨリ注
 意セシムル諸件ヲ書記官書面ニ記シテ之ヲ示シ聾啞者亦其返答ヲ
 書面ニ記シテ差出ス可シ○書記官ハ總テ此等ノ書面ヲ讀上ク可シ
 第三百三十四條 被告人數人アル時ハ主席人最初吟味ヲ受ク可キ者
 ヲ定ム可シ但其數人中罪犯ノ主者アル時ハ最初ニ之ヲ吟味ス可シ
 他ノ被告人ハ各自次第ニ吟味ヲ受ク可シ
 第三百三十五條 証人等証ヲ述ヘ終リ且其申述ニ付キ辨論アリシ後
 民事ノ原告人又ハ其代言人及ヒ檢事長罪犯告訴ノ憑據ヲ辨ス可シ

被告人又は其代理人之ニ答フ可シ
民事ノ原告人及ヒ檢事長ハ更ニ之ニ答フルヲ得可シ然レニ辨論
ノ終ニハ被告人又は其代理人必ス詞ヲ發ス可シ

然ル上ヨテ上席人吟味ノ畢ル旨ヲ言渡ス可シ

第三百三十六條 上席人ハ吟味ニ付テノ諸件ヲ約縮ス可シ

上席人ハ有罪ノ重立メル証又ハ無罪ノ重立メル証ヲ陪審ニ告シ可
シ

其後上席人ハ陪審ヲシテ其職務ニ注意セシム可シ

上席人ハ後ノ數條ニ記スル如ク陪審ニ問フ可シ

第三百三十七條 重罪告訴狀ニ記スル罪犯ニ管シタル問ハ左ノ如シ

被告人ハ告訴狀 第二百四十ニ記シタル模様ニテ云々ノ殺害云々

ノ盜奪云々ノ重罪ヲ犯シタルヤ

第三百二十八條 吟味ニ因リ告訴狀ニ記シタル以外ノ罪ヲ重クス可
キ模様アルコトヲ知リタル時ハ上席人左ノ問ヲ加フ可シ

被告人ハ云々ノ模様ニテ重罪ヲ犯シタルヤ

第三百二十九條 被告人其罪犯ニ付キ法律上ニテ赦宥ヲ得可シト爲
メ事情アルコトヲ申述セタル時ハ上席人左ノ如ク陪審ニ問フ可シ若
シ此規則ニ背ク時ハ其問ノ効ナカル可シ 刑法第三百二

其事情相違ナキヤ

第三百四十條 若シ被告人ノ年齢十六歳以下ナル時ハ上席人左ノ如
ク陪審ニ問フ可シ若シ此規則ニ反ク時ハ其問ノ効ナカル可シ 刑法

十六條

見合

被告人ノ罪ヲ犯シタルハ故意ヲ以テ爲シタルヤ

第三百四十一條 (千八百五十三年六月九日左ノ如ク改メ)總テ重罪ニ

付テハ初犯ト再犯トヲ論セス上席人陪審ニ告訴狀ニ記スル所ノ問
ヲ爲シ又ハ吟味ニ因リ知リタル所ノ問ヲ爲シタル後陪審ノ全員中
其過半被告人ノ爲メ罪ヲ輕クス可キ模様アリト思ハ、左ノ如ク申
立ツ可キ旨ヲ陪審ニ告メ可シ若シ此規則ニ背ク時ハ其問ノ効ナカ
ル可シ

陪審全員ノ中過半ノ説ニテ被告人ノ爲メ罪ヲ輕クス可キ模様アリトス

此問ヲ爲シタル後上席人数箇ノ問ヲ記シタル書面ヲ陪審長ニ渡ス
可シ但シ重罪告訴狀罪犯ノ証ヲ立ル調書及ヒ其他証人ノ申述書ヲ
除ク外總テ訴訟ニ管シタル書類モ亦之ニ添ヘ渡ス可シ

上席人ハ陪審ニ秘密ノ投票ヲ以テ決斷ヲ爲ス可キコトヲ告ク可シ
百四十五
條見合

次ニ上席人ハ被告人ヲ吟味ノ席ヨリ退カシム可シ

第三百四十二條 上席人ヨリ陪審ニ問ヲ爲シ且其問ヲ記シタル書面

ヲ渡シタル上ニテ陪審其室ニ退キ商議ス可シ

陪審ノ姓名ヲ附引ニ爲シタル時最モ先ニ姓名票ノ出テタル者ヲ陪
審ノ長ト爲シ又ハ其者承諾ノ上ニテ陪審全員ノ別段指定メタル者
ヲ以テ其長ト爲ス可シ

陪審商議ヲ爲シ始ル前ニ其長左ノ心得書ヲ讀上ク可シ但シ其心得
書ハ大字ニ記シテ室内ノ最モ著シキ場所ニ張出シ置ク可シ其文左
ノ如シ

凡ソ法律ハ陪審ノ確的ト爲ス憑據ノ如何ヲ論スルコトナク又徵証
ノ完備シテ信據ス可キヤ否ヲ試ミ識ル可キ規則ヲ定ムルコトナシ
唯陪審ハ罪犯ノ証及ヒ被告人ノ答辨ニ付キ其是非曲直如何ヲ靜

黙沈思シテ自カラ之ヲ己ニ問ヒ且其本心ニ從テ決斷ス可シ○法律ハ陪審ニ對シ証人幾許ノ述フル所ヲ正實ト爲ス可シト定メ命フルコト非ス又云々ノ証書云々ノ証人云々ノ徵憑ニ據ラサル証ヲ正實ト爲ス可カラスト定メ命スルコト非ス唯其心中如何ニ思ヒ定ムルヤト云フヲ問フノミトス是レ則チ陪審ノ職務ノ要領ナリ

陪審ノ着意セサルヲ得可カラサル要件ハ其商議スル所固ト罪犯告訴狀ノ事ニ管スルニ因リ其職務告訴狀ニ記スル條件並ニ之ニ附帶シタル條件ノミヲ議ス可キニ在テ若シ其決斷ヲ爲シタル上被告人刑法ノ規則ニ循ヒ如何ナル處置ヲ受ク可キヤ豫メ之ヲ思慮スルカ如キハ即チ其最要ノ職務ニ背クモノトス夫レ陪審ノ職ハ罪犯ヲ告訴スルニ非ス又之ヲ罰スルニ非ス唯被告人ノ罪ノ有

無テ決斷スルニ過キサルノミ

第三百四十三條 陪審ハ其決斷ヲ爲シタル後ニ非サレハ其室ヲ出ル

コトヲ得ス

又如何ナル原由アリト雖モ上席人ヨリ允許ノ書面ヲ得タル上ニ非サレハ陪審ノ商議中其室ニ入ル可カラズ

上席人ハ裁判所ニ屬シタル備警兵ノ長ニ陪審ノ室ニ人ノ出入スルヲ制ス可キ命令書ヲ渡ス可シ但シ其備警兵長ノ姓名官位ハ其命令書ニ附記ス可シ

此命ニ背キタル陪審ハ五百フランクヨリ多カラサル罰金ヲ裁判所ヨリ言渡サル可シ

陪審ヲ除クノ外總テ此命ニ背キタル者又ハ此命ノ如ク執行ハシメサル者ハ二十四時間禁錮ノ刑ニ處セラル可シ

六六九

第三百四十四條 陪審ハ先ツ主タル事件ヲ商議シ次ニ之ニ附帶シタル數箇ノ模様ヲ次第ニ商議ス可シ

第三百四十五條 (千八百三十五年九月九日左ノ如ク改ム)陪審ノ長第三百三十六條ニ記シタル如ク上席人ノ爲シタル問ノ書面數通ヲ次第ニ讀上ケタル後陪審等犯罪告訴ノ主タル箇條並ニ罪ヲ輕クス可キ模様及ヒ罪ヲ重クス可キ模様ニ付キ秘密ノ投票ヲ以テ決斷ヲ爲ス可シ

第三百四十六條 (千八百三十五年九月九日左ノ如ク改ム)又第三百三十九條及ヒ第三百四十條ニ記シタル場合ニ於テ上席人ノ爲シタル問ニ付テモ亦前條ニ記スル如ク處置ヲ爲シ且秘密ノ投票ヲ以テ決斷ス可シ

第三百四十七條 (千八百五十三年六月九日左ノ如ク改ム)陪審被告人ヲ有罪ナリト爲ス決斷又ハ罪ヲ輕クス可キ模様ノ有無ニ付テノ決斷ハ全員中其半以上ノ投票ニ因リ之ヲ爲ス可シ○其決斷書ニハ之ヲ可トセシ者ノ數ヲ記スルコトヲ唯全員ノ半以上之ヲ可トスル旨ヲ記ス可シ但シ此條ニ記スル所ノ規則ニ背キタル時ハ其決斷ノ効ナカル可シ

第三百四十八條 次ニ陪審再ヒ吟味ノ席ニ來リ其座ニ就ク可シ然ル時上席人ヨリ其決斷ノ如何ヲ問フ可シ陪審ノ長立上リ其心臓ノ上ニ手ヲ置テ左件ヲ述フ可シ

我面目及ヒ本心ニ從フテ天ト人トニ誓ヒ陪審ノ決斷ハ然リ被告○人ニ云ク○罪有ル又ハ否被告○人ニ云ク○罪無キ

七六九

第三百四十九條 陪審ノ決斷書ハ陪審全員ノ而前ニテ其長之ニ姓名ヲ手署シ且之ヲ上席人ニ渡ス可シ

上席人ハ自カラ之ニ姓名ヲ手署シ且書記官ヲシテ姓名ヲ手署セシム可シ

第三百五十條 陪審ノ決斷ハ之ヲ取消サント訴フ可カラス

第三百五十一條 (千八百三十一年三月四日廢ス)

第三百五十二條 (千八百五十三年六月九日左ノ如ク改ム)陪審被告人

ヲ罪有リト決斷シタル時裁判所ニテ陪審法式ニ違フコトナシト雖モ

罪ノ本案ニ付キ錯誤シタルヲ確知シタルニ於テハ裁判言渡ヲ暫ク

止メ其事ヲ次ノ會議ノ日ニ延シテ其日ニ至リ更ニ陪審ヲシテ商議

セシム可シ但シ以前ノ陪審ハ再度ノ陪審ノ員中ニ參加ス可カラズ

此條ニ記スル事ハ願フ以テ爲ス可カラズ陪審ノ決斷ヲ公ケニ言渡

シタル後裁判所ノ公務ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

再度ノ陪審ノ決斷以前ノ陪審ノ決斷ト同シキ時ト雖モ裁判所ニテ

再度ノ陪審ノ決斷ヲ取消シ更ニ陪審ヲシテ商議セシム可カラズ

第三百五十三條 証人ノ吟味及ヒ雙方辨論ヲ爲シ始メタルヨリ陪審

ノ決斷ヲ爲スニ至ル迄ハ間斷ナク且外人ト談話スルコトナク其手續

ヲ繼續シテ行フ可シ○上席人ハ裁判役陪審証人被告人等ノ休息ノ

爲メ必要ナル時間ノミ其手續ヲ止ムルコトヲ得可シ

第三百五十四條 呼出ヲ受ケタル証人出席セサル時ハ裁判所ニテ檢

事長ノ求メニ從ヒ証人ノ姓名目錄中ノ最初ニ記シタル者証ヲ申述

セサル内ニ罪犯ノ吟味ヲ次ノ會議ノ日ニ延ハスコトヲ得可シ

第三百五十五條 若シ証人呼出ヲ受ケテ出席セサルニ付キ罪犯ノ吟

味ヲ次ノ會議ノ日ニ延ハス時ハ總テ証人等呼出ノ費用証書類ニ付

テノ費用証人等ノ旅費及ヒ其他其罪犯一件ヲ裁判スル爲メノ費用

皆其出席セサル証人之ヲ擔當ス可シ但シ其証人ハ檢事長ノ求メニ

因リ次ノ會議ノ日ハ吟味ヲ延ハス言渡ヲ以テ此等ノ費用ヲ償フ可
 キノ言渡ヲ受ケ若シ之ヲ償ハサルニ於テハ召捕ヘラル可シ
 又全上ノ言渡書ニハ其證人ヲシテ証ヲ述ヘシムル爲メ公ケノ兵力
 ナリテ之ヲ裁判所ニ引出ス可キ旨ヲ記ス可シ
 又如何ナル場合ニ於テモ呼出テ受ケテ出席セサル証人又ハ出席ス
 ト雖ヒ誓ヲ爲スコトヲ肯セヌ或ハ証ヲ述フルコトヲ肯セサル証人ハ第
 八十條ニ記スル所ノ罰ヲ言渡サル可シ
 第三百五十六條 其言渡ヲ受ケタル証人ハ其住所ニ其言渡書ノ送達
 ヲ得タルヨリ十日内ニ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルコトヲ得可シ又其
 住所隔リタル時ハ五ミリアメートル毎ニ一日ノ猶豫ヲ増ス可シ但
 シ其証人出席ヲ爲サ、ル正當ノ差支アリタル証ヲ立テ又ハ其罰金
 ヲ更ニ減ス可キ道理アル証ヲ立テタル時ハ其故障ノ申述ヲ聞届ク

可シ

〇第二款 裁判言渡ノ事及ヒ裁判言渡ノ如ク執行ノ事
 第三百五十七條 上席人ハ被告人ヲ出席セシメタル上書記官ヲシテ
 其面前ニ於テ陪審ノ決斷書ヲ讀上ケシム可シ
 第三百五十八條 陪審ノ決斷ニテ被告人ヲ無罪ナリトスル時ハ上席
 人ヨリ被告人罪犯ノ告訴ヲ免シタル旨ヲ言渡シテ之ヲ赦宥ス可キ
 コトヲ命ス可シ但シ他ノ原由ノ爲メ禁錮セラレシ時ハ格別ナリトス
 然ル後雙方互ニ損失ノ償ヲ得ント求メ且互ニ相手方ノ求ムル所ヲ
 拒ム憑據ヲ述ヘタル上ニテ裁判所ニ於テ檢事長ノ申立ヲ聽キ其償
 ノ事ヲ裁判ス可シ
 然レモ裁判所ニ於テ相當ナリト思料スル時ハ其裁判役中ノ一員ヲシ
 テ雙方ノ申述ヲ聽キ証書類ヲ檢視セシメ且裁判所吟味ノ日ニ至リ

其申立ヲ爲サシム可シ但シ其吟味ノ日ニ至リ雙方更ニ其申述ヲ爲
 ストキ得可シ裁判所ニテハ更ニ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上之ヲ裁
 判ス可シ
 又被告人無罪ノ言渡ヲ得タル時ハ其罪ヲ申立タル者ニ對シ枉訴ニ
 付テノ損害ノ償ヲ得ント求ムルヲ得可シ然レモ官吏ハ其職務ヲ
 行フニ當リ知り得タルト思料セシ罪犯ヲ申立テタルニ因リ枉訴ニ
 付テノ損害ノ償ヲ爲ス可キ訴ヲ受ルルヲナカル可シ但シ別段ノ道
 理アル時官吏故意ヲ以テ人ヲ枉ハ格別ナリトス
 檢事長ハ被告人ノ求メニ因リ其罪犯ノ申立人ハ何人タルヤヲ知ラ
 シム可シ
 第三百五十九條 被告人ヨリ其罪犯申立人又ハ民事ノ原告人ニ對シ
 損失ノ償ヲ求ムル訴又ハ民事ノ原告人ヨリ被告人又ハ既ニ刑ヲ言

渡サレシ者ニ對シ損失ノ償ヲ求ムル訴ハ重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可
 シ
 民事ノ原告人ハ裁判言渡ノ前ニ損失ノ償ヲ得ントスル訴ヲ爲ス可
 シ其裁判言渡ノ後ニ至リテハ其訴ヲ許サス
 又被告人其犯罪申立人ヲ知リタル時ハ前項ニ記スル所ニ等シトス
 又被告人裁判言渡ノ後ニ至リ其犯罪申立人ヲ知リタル時ト雖モ猶
 重罪裁判所ノ會議中タルニ於テハ其被告人重罪裁判所ニ損失ノ償
 ヲ得ントスル訴ヲ爲ス可シ若シ之ヲ爲サ、ル時ハ其訴ヲ爲ス可キ
 ノ權ヲ失フ可シ○又被告人重罪裁判所ノ會議ノ終リシ後ニ其犯罪
 申立人ヲ知リタル時ハ民法裁判所初告裁ニ同上ノ訴ヲ爲ス可シ
 又罪犯ノ吟味ニ參加セザリシ者ハ民法裁判所ニ損失ノ償ヲ得ント
 訴フ可シ

第三百六十條 法律ニ循ヒ無罪ナリトノ言渡ヲ得タル者ハ同一ノ事ニ付キ再ヒ其罪ヲ訴ヘラルヽコトナカル可シ

第三百六十一條 辨論ノ時間証書ニ因リ又ハ証人ノ申述ニ因リ被告人更ニ他ノ罪犯アリト思ハルヽ時ハ上席人其被告人ニ無罪ノ言渡ヲ爲シタル後其被告人他ノ罪犯ノ事ニ付キ更ニ訴ヲ受ク可キ旨ヲ言渡シテ且其被告人ニ對シ第九十一條ニ記スル差別ニ從ヒ呼出狀又ハ引出狀ヲ出シ又別段ノ道理アル時ハ收監狀ヲ出シテ重罪裁判所所在ノ地ノ下吟味掛リ裁判役ノ面前ニ至ラシメ更ニ下吟味ヲ受ケシム可シ
然レモ此事ニ付テハ若シ爲シタル吟味ノ未ダ終ラサル前ニ檢察官後ニ他ノ罪ヲ訴フ可キ旨ヲ取極メ置キタルニ非サレハ前項ノ規則ノ如ク執行フ可カラズ

第三百六十二條 陪審被告人ヲ有罪ナリト決斷スル時ハ檢事長刑法

ニ循ヒ之ヲ罰ス可キコトヲ裁判所ニ求ム可シ
民事ノ原告人ハ取戻ノ求メ及ヒ損失ノ償ヲ得ントスル求メヲ爲ス可シ

第三百六十三條 上席人ハ被告人ニ辨論セント欲スル事ナキヤ否ヲ問フ可シ

被告人及ヒ其代言人ハ其申立ラレタル所爲ノ偽リタルヲ述フルコトヲ得ズ唯其所爲ヲ法律上ニテ禁セサル事又ハ法律上ニテ罪犯ト爲サレタル事又ハ檢事長ノ求メタル如キ刑ニ當ラサル事又ハ民事ノ原告人ニ損失ノ償ヲ爲スニ及ハサル事又ハ民事ノ原告人ノ求ムル所ノ償高過分ナル事ヲ申述フルヲ得可シ

第三百六十四條 陪審被告人ヲ有罪ナリト決斷シタルト雖モ刑法上

ニテ其所爲ヲ禁スルナキ時ハ裁判所ヨリ其赦罪ヲ言渡ス可シ
百五十八條ニ當ルナリテ被告ハ罪ヲ犯シタルニ相違ナシト雖モ刑法
中ニ其犯罪ニ當ル可キ箇條ナキヲ以テ其罪ヲ赦スヲ云フ第三百五
十八條ニテハ上席人無罪ヲ言渡シ此條ニ
テハ裁判役全員ニテ赦罪ヲ言渡スナリ

第三百六十五條 若シ其所爲刑法上ニテ禁止シタル事ナル時ハ吟味
シ上重罪裁判所ニ管轄ス可キ所ニ非サルコト即チ輕罪註誤分明タル
ニ至ルト雖モ重罪裁判所ニテ法律上ニ定メタル刑ヲ言渡ス可シ第
九十二
條見合

若シ被告人ニ數箇ノ重罪及ヒ輕罪アル時ハ其中ノ最重ナル罪ニ因
テ其刑ヲ定ム可シ

第三百六十六條 被告人ノ赦罪ヲ言渡シタル時ハ 第三百六十之ヲ無
罪ナリト言渡シ或ハ刑ニ處ス可キコトヲ言渡シタル時ト同シク重罪
裁判所ニテ民事ノ原告人又ハ被告人ノ求ムル所ノ損失ノ償ヲ裁判

シテ其高ヲ定メ又第三百五十八條ニ記スル如ク裁判役中ノ一員ヲ
シテ雙方ノ申述ヲ聽キタル上書類ヲ檢視セシメ且此等ノ諸事ヲ裁
判所ニ申立テシム可シ
又重罪裁判所ニテ被告人ノ枉奪セシ物件ヲ其所有者 民事ノニ還ス
可キコトヲ言渡ス可シ
然レモ被告人刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ全上ノ物件ノ所有者被告人
定期内ニ覆審院ニ上告スルコトヲ又ハ上告スト雖モ覆審院ニテ重
罪裁判所ノ言渡ヲ確定シタルノ證ヲ立テタルニ非ザレバ其物件ヲ
取戻ス可カラズ

第三百六十七條 陪審被告人ニ赦宥ス可キノ事情 第三百三十九條刑
法第三百二十一條
以下
見合
アリト決斷シタル時ハ裁判所ニテ刑法ニ記スル如ク言渡ス可
シ

第三百六十八條 被告人刑ヲ言渡サレ又ハ民事ノ原告人負訴訟トナ
ル時ハ官ト相手方トニ對シ裁判所ノ費用ヲ償フ可シ
重罪ニ付キ民事ノ原告人負訴訟トナラサル時ハ裁判所ノ費用ヲ擔
當スルコト及ハス

又民事ノ原告人千八百十一年六月十八日ノ命令書ニ循ヒ裁判所ノ
費用高キ官ニ預ケ置キタル時ハ之ヲ其原告人ニ還ス可シ

第三百六十九條 裁判役ハ低聲ニテ評議ヲ爲ス可シ又別席ニ退テ評
議ヲ爲スコトヲ得可シ然レモ裁判言渡ハ衆庶並ニ被告人ノ面前ニテ
上席人高聲ニ之ヲ爲ス可シ
上席人其言渡ヲ爲ス前ニ其罪犯ニ管スル刑法ノ箇條ヲ讀上シ可シ
書記官ハ其裁判言渡ヲ書面ニ記シ且其刑法ノ箇條ヲ記入ス可シ若
シ此規則ニ背ク時ハ百フランノ罰金ヲ言渡サル可シ

第三百七十條 裁判言渡書ノ正本ハ之ニ管シタル裁判役皆姓名ヲ手

署ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ書記官百フランノ罰金ヲ言渡サ
レ又別段ノ道理アル時ハ書記官並ニ裁判役損害ノ償ヲ爲ス可キノ
訴ヲ受シ可シ

裁判言渡書ノ正本ハ其言渡ノ時ヨリ二十四時間ニ裁判役姓名ヲ手
署ス可シ

第三百七十一條 上席人ハ裁判言渡ヲ爲シタル後其時ノ模様ニ從ヒ
被告人ニ固志耐忍ス可キコトヲ論シ又ハ後日其行狀ヲ改ム可キコトヲ
論ス可シ

又上席人ハ被告人ニ覆審院ニ上告スルヲ得可キ權ヲルコト其權ヲ
行ヒ得可キ期限トヲ告シ可シ
九七九 第三百七十二條 書記官ハ法律上ニ定ムル所ノ法式ヲ盡シ行フタル

ヲ証メルヲ爲シ重罪裁判所會議ノ調書ヲ記ス可シ
其調書ニハ被告人ノ答詞及ヒ証人ノ申述ヲ記ス可カラズ但シ第三
百十八條ニ循ヒ証人申述ノ變更及ヒ齟齬シタル事ヲ記スルハ格別
ナリトス

其調書ハ上席人ト書記官ト姓名ヲ手署ス可シ但シ其調書ハ預メ之
ヲ刊行シ置ク可カラズ

若シ此條ノ規則ニ循ハサル時ハ調書ノ効ナカル可シ

若シ書記官調書ヲ記スルヲ怠リ又ハ此條第三項ノ規則ニ背シ時ハ
五百ノラシクシテ罰金ヲ言渡サル可シ

第三百七十三條 刑ヲ言渡サシメシ者ハ其言渡ヲ受ケタルヨリ覆審院
ニ上告セントスルコト書記局ニ届出ツルニ至ル迄三日ノ猶豫ヲ得
可シ

又檢事長ハ全上ノ猶豫ノ期限内ニ覆審院ニ上告セントスルコト書
記局ニ届出スルヲ得可シ

民事ノ原告人モ亦全上ノ期限内ニ覆審院ニ上告セントスルコト書
記局ニ届出ツルヲ得可シ但シ民事ノ原告人ハ其民事ノ權利ノミ
付キ其上告ヲ爲スヲ得可シ

全上ノ期限間ハ重罪裁判所ノ言渡ノ執行ヲ暫ク延ハス可シ又覆審
院ニ上告シタル時ハ覆審院ノ言渡書ヲ受取ルニ至ル迄其執行ヲ暫
ク延ハス可シ

第三百七十四條 第四百九條及ヒ第四百十二條ノ場合ニ於テハ檢事
長又ハ民事ノ原告人二十四時内ニ覆審院ニ上告ス可シ

九
第三百七十五條 第三百七十三條ニ記シタル猶豫ノ期限内ニ覆審院
ニ上告セザル時ハ其期限ノ終リニヨリ二十四時間ニ犯人ヲ刑ニ處

ス可シ又覆審院ニ上告シタル時ハ覆審院ニテ其上告ヲ棄却スル言
渡書ヲ受取リシヨリ二十四時間ニ刑ニ處ス可シ
第三百七十六條 犯人ヲ刑ニ處スルニ付テハ檢事長其指揮ヲ爲ス可
シ但シ檢事長ハ此事ニ付キ直ニ公ケノ兵力ノ助ヲ借ラント求
ルコト得可シ

第三百七十七條 刑ヲ言渡サレタル者刑ニ處セラレ、前ニ申述ノ
欲スル事アル時ハ之ヲ刑ニ可キ地ノ裁判役一員書記官ノ立會ニ
之ヲ聽ク可シ

第三百七十八條 書記官ハ犯人ヲ刑ニ處シタル調書ヲ記シ二十四時
間ニ之ヲ重罪裁判所ノ裁判官言渡書ノ末ニ登記ス可シ若シ此規則
背シ時ハ百フランニシテ罰金ヲ言渡サル可シ○又書記官ハ其登記ヲ
爲シタル部分ニ姓名ヲ手署シ且此等ノ諸事ヲ調書ノ端ニ附記ス可

シ若シ此規則ニ背シ時ハ百フランノ罰金ヲ言渡サル可シ○又書
記官ハ其附記シタル部分ニモ亦姓名ヲ手署ス可シ但シ調書ヲ裁判
官言渡書ノ末ニ登記シタル時ハ其登記ヲ調書ノ正本ニ等シク証ト爲
ス可シ
第三百七十九條 犯人ヲ刑ニ處ス可キ裁判官言渡書ヲ爲ス以前其吟味中
ニ證書ヲ據リ又ハ証人ノ申述ニ據リ其犯人更ニ他罪アルコト知リ
其罪是迄申立ラレタル罪ヨリ更ニ重キ模様ナル時又ハ其犯人ト共
ニ罪ヲ犯セシ者召捕ヘラレタル時ハ重罪裁判所ニテ其更ニ發覺シ
タル罪ニ付テ治罪法ノ規則ニ循ヒ再ヒ犯人ノ罪ヲ告訴ス可キコト
言渡ス可シ
此等ノ場合ニ於テハ檢事長再度ノ訴ニ付キ裁判官言渡アル迄ハ初度
ニ如ク執行ノ旨ヲ暫ク延ハス可シ

第三百八十一條 重罪裁判所ノ裁判言渡書ノ正本ハ之ヲ集メテ州ノ首府ノ初告裁判所ノ書記局ニ納ム可シ然レモ控訴院所在ノ地ニアル重罪裁判所ノ裁判言渡書ノ正本ハ其控訴院ノ書記局ニ納ム可シ

○第五章 陪審ノ事及ヒ陪審ヲ撰ム方法
○第一款 陪審ノ事

第三百八十一條 (千八百五十三年六月四日左ノ如ク改ム) 滿三十歳ノ齡ニシテ政權民權族權人ナルノ權ノ如キチ云フ條ニ記シタル差支ナキ者ニ非サレハ陪審トナル可カラズ若シ此規則ニ背ク時ハ其決斷ノ効ナカル可シ

第三百八十二條 (千八百五十三年六月四日左ノ如ク改ム) 左ノ數人ハ陪審トナル可カラズ

第一 施體ト加辱トノ刑ヲ言渡サレシ者又ハ加辱ノミノ刑ヲ言渡サレシ者

第二 重罪ニ付キ懲治ノ刑ヲ言渡サレシ者

第三 徒刑又ハ戕球ノ刑ヲ言渡サレタル士卒

第四 三月以上禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者

第五 盜竊詐僞破信ノ罪公ケノ監守人其監守スル物件ヲ奪フタル罪刑法第三百三十條及ヒ第三百三十四條ニ記シタル風俗ヲ破ル罪人倫ノ道或ハ法教ノ道ヲ害スル罪物件所有ノ權或ハ親族ノ權ヲ犯スノ罪職業ナシ且生計ノ道ナシ寄遊スル罪乞食ノ罪ヲ犯シタルニ付キ期限ノ長短ヲ問ハズ禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者及ヒ募兵ノ事ニ付キ千八百三十二年三月二十一日ノ法律ノ第三十八條第四十一條第四十三條第四十五條ノ規則ニ背

キ又ハ刑法第三百十八條及ヒ第四百二十三條ノ規則ニ背キ或
ハ千八百五十一年三月廿七日ノ法律ノ第一條ノ規則ニ背キタ
ルコ付キ期限ノ長短ニ問ハス禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者

第六 高利貸ノ罪ノ爲メ刑ヲ言渡サレタル者

第七 重罪ヲ告訴セラレタル者又ハ重罪ヲ告訴セラレタル抗傳
者

第八 職ヲ退ケラレタル公証人書記官及ヒ裁判所官員

第九 復讐ヲ得サル分散人

第十 治産ノ禁ヲ受ケシ者及ヒ其他裁判所ヨリ任シタル補佐人
ノ世話ヲ受ケタル者

第十一 治罪法第三百九十六條及ヒ刑法第四十二條ニ循ヒ陪審
タルノ禁ヲ受ケシ者

第十二 收監狀又ハ禁錮狀ニ因テ召捕ハレタル者

第十三 一月以上禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル者其刑期ノ終リシヨ
リ五年ノ時間

第三百八十三條 (千八百五十三年六月四日左ノ如ク改ム)左ノ職ニ在
ル者ハ陪審ノ職務ヲ兼テ行フ可カラズ

宰相

元老院ノ長

議事院ノ長

參議官員

宰相局ノ書記長

州長及ヒ郡長

州會ノ議員

裁判役

裁判所ノ檢察官

巡卒長

官許アル法教ノ僧徒

現ニ奉職スル海陸軍ノ士卒

租税官署官ノ森林電信機官署ニテ現ニ奉職スル官員

邑ノ小學校ノ授業師

又左ノ諸人ハ陪審トナル可カラズ

雇ノ僕婢

佛蘭西ノ文字ヲ讀ミ佛蘭西ノ文字ヲ書クヲ知ラサル者

千八百三十八年六月三十日ノ法律ニ循ヒ狂病院ニ入リタル者

又左ノ諸人ハ陪審タルヲ免ル、トシテ得可シ

第一 七十歳以上ノ者

第二 毎日ノ所作ニ因リ生計ヲ營ム者

第三百八十四條 (廢ス)

第三百八十五條 何人ニ限ラズ別段裁判所ノ言渡アルニ非サノハ千

八百五十三年六月四日ノ法律第十一條以前ノ治罪法第三百八十二

條ニ記スル陪審姓名目錄ノ中ヨリ除去セラル、トナカル可シ但シ

其言渡ヲ控訴シ又ハ其言渡ノ取消ヲ覆審院ニ上告シタル間ハ其言

渡ノ執行ヲ暫ク止ム可シ

第三百八十六條 (廢ス)

第三百八十七條 (廢ス)

第三百八十八條 (廢ス)

第三百八十九條 陪審ト爲ス可キ各人ニハ其全員ノ姓名目錄ヲ送ル

及ハス但シ其姓名ノ加ハリタル証トシテ州長ヨリ唯其目錄ノ拔書ヲ送ル可シ○其拔書ハ姓名目錄ヲ現ニ用ニ供スルヨリ少クトモ八日前ニ之ヲ送ル可シ

其姓名目錄ヲ現ニ用ニ供ス可キ期日ハ其拔書ニ之ヲ附記シ且其日ニ出席ス可キ呼出ヲ附記ス可シ若シ其日ニ出席セサル者ハ此法ニ記スル所ノ罰ヲ受ク可シ第三百九十條見合

若シ其拔書ヲ送達スル時本人其住所ニアラサル時ハ其住所ト邑長又ハ其補佐トニ之ヲ届ケ後ニ邑長又ハ其補佐ヨリ本人ニ其旨ヲ告知ス可シ

第三百九十條 關引ニテ選ミタル陪審四十名中ニ當テ千八百五十三年六月四日ノ法律第十一條以前ノ治罪法第三百八十七條ニ循ヒ姓名目錄ヲ記シタル後死去スル者アリ又ハ陪審ノ職務ヲ行フ不能ハ

サルニ至リシ者アリ又ハ陪審ノ職務ヲ兼テ行フ可カラサル職ヲ授リタル者アル時ハ重罪裁判所會議ノ席ニテ檢事長ノ申立ヲ聽キタル上其代員ヲ撰ム可シ

其代員ヲ撰ム方法ハ千八百五十三年六月四日ノ法律第十八條以前ノ治罪法第三百八十八條ニ記シタル所ニ循フ可シ

第三百九十一條 陪審其職務ヲ爲シ終リタル上ハ其姓名目錄即チ四

姓名ノ効ナカル可シ○臨時ニ重罪裁判所ノ會議ヲ開ク時ノ外第三百

百八十九條ニ記スル呼出ニ應シタル陪審ハ一年内ニ二度姓名目錄

千八百五十三年六月四日ノ法律第十一條ニ記スル陪審全員ノ目錄

シ○又臨時ニ重罪裁判所ノ會議ヲ開ク時ト雖モ一年ニ二度以上姓名目錄中ニ書加ヘラル、イナカル可シ○重罪裁判所ノ會議ヲ開ク前ニ其裁判所ニテ暫時閉ノ事ト思料セシ差支ニ因リ出席セサル陪

審ハ第三百八十九條ノ呼出ニ應シタルモノト爲ス可カラス○其陪
審ノ姓名及ヒ一度罰金ヲ言渡サレ又ハ再度罰金ヲ言渡サレタル陪
審第三百九十ノ姓名書ハ重罪裁判所ノ會議終リタル後直チニ之ヲ
控訴院ノ上席人ニ送り其上席人其旨ヲ陪審ノ全員姓名目録千八百
一年六月四日ノ法律第十ノ中ニ記入ス可シ但シ本年内ニ圖引ニ爲ス
ナキ時ハ此等ノ陪審ノ姓名ヲ翌年ノ姓名目録中ニ加フ可シ
第三百九十二條 司法警察ノ職ヲ行フ者証人通辨人鑑定人又ハ原告
或ハ被告ナル者ハ其同一ノ事件ニ付キ陪審トナル可カラズ若シ此
規則ニ背シ時ハ其陪審ノ爲シタル決斷ノ効ナカル可シ
○第二款 陪審ヲ撰ム事及ヒ之ヲ呼集ムル事
第三百九十三條 (千八百五十三年六月四日左ノ如ク改ム) 陪審員
選出ノ爲メ定メ置キタル期日ニ至リ不在又ハ其他ノ原由ニテ陪審ノ

數三十員以下ニ至ル時ハ陪審補員中ヨリ其姓名ヲ記入シタル順序
ニ從ヒ其數ヲ補フテ之ヲ三十員ニ充ツシム可シ若シ又其補員ニテ
猶三十員ニ充ツシムルニ足ラサル時ハ裁判所吟味ノ席ニテ別段ノ
姓名目録中ヨリ圖引ニテ陪審ヲ撰ミ其陪審ヲ以テ三十員ニ充ツシ
ム可シ猶未ダ足ラサル時ハ一年分ノ陪審全員目録中ヨリ之ヲ撰ミ
其數ニ充ツシム可シ
千八百十年七月五日ノ命令書第九十條ニ記スル場合ニ於テハ裁判
所吟味ノ席ニテ一年分ノ陪審全員目録中ヨリ圖引ニ爲シ其三十員
ノ數ニ充ツシム可シ
第三百九十四條 決斷ヲ爲ス可キ陪審ハ必ス十二員ニ下ル可カラス
罪犯ノ吟味速ニ終ル可カラサル模様ナル時ハ重罪裁判所ニテ陪審
ノ姓名ヲ圖引ニ爲ス前ニ十二員ノ陪審定員ノ外別ニ一二名ヲ撰ミ

四九九

之ヲシテ吟味ニ立會ハシムルヲ言渡ヌヲ得可シ
其十二名ノ中ニテ決斷ヲ爲スニ至ル迄引續キ吟味ノ席ニ出ツル
能ハサル者アル時ハ其補員別ニ撰ミ之ニ代ル可シ

其代ル可キ順序ハ當テ圖引ヲ爲シタル時ノ順序ニ從フ可シ

第三百九十五條 陪審ノ姓名目錄ハ十二名ノ定員ヲ撰ム前日ニ之ヲ

各被告人ニ送ル可シ若シ更ニ早ク之ヲ送り又ハ更ニ遅ク之ヲ送ル

時ハ其送達ノ効ナシ並ニ其後ノ諸件ノ効ナカル可シ

第三百九十六條 陪審呼出ヲ受ケテ出席セサル時ハ重罪裁判所ヨリ

罰金ヲ言渡サル可シ但シ其罰金ハ

初犯ニ付テハ五百フランク

再犯ニ付テハ千フランク

三犯ニ付テハ千五百フランク

三犯ノ時ハ其者向後陪審タル可カラサルノ言渡ヲ受ケ其者ノ費用

ニテ其言渡書ヲ刊刷シ之ヲ貼附ス可シ

第三百九十七條 當テ定メ置キタル期日ニ出席スルヲ能ハサルノ證

ヲ立テタル陪審ハ前條ノ例外ナリトス

其辨解スル所ノ正當ナルヤ否ハ裁判所ニテ之ヲ裁判ス可シ

第三百九十八條 陪審出席ヲ爲スト雖モ其職ヲ爲シ終ラサル中ニ正

當ノ原由ナクシテ其席ヲ退ク時ハ第三百九十六條ニ記スル所ノ罰

ヲ受ク可シ但シ其原由ノ正當ナルト否トハ裁判所ニテ之ヲ裁判ス

可シ

第三百九十九條 各罪犯ノ訴ニ付キ預定シタル日ニ至リ吟味ノ席ヲ

開ク前ニ陪審數員並ニ被告人及ヒ檢事長ノ面前ニ於テ各陪審ノ姓

五九九

名ヲ呼上ク可シ但シ正當ノ原由アリテ出席セサル陪審又ハ出席ス

ルヲ免シタル陪審 第三百八十三ノ姓名ハ之ヲ除ク可シ
 其呼上ニ答フル各陪審ノ姓名票ヲ壺中ヨリ入ル可シ
 陪審ノ姓名票ヲ次第ニ壺中ヨリ取出スニ從ヒ最初ニ被告人又ハ其
 代言人ヨリ其陪審ヲ除去ス可キヲ述ヘ次ニ檢事長ヨリ其旨ヲ述
 フ可シ但シ後ニ記スル定員十二員ニ至リテ其除去ノ申述ヲ止ム可
 シ
 被告人又ハ其代言人及ヒ檢事長ハ陪審ヲ除去スルニ付テノ旨趣ヲ
 述フ可カラズ
 斯ノ如ク除去ノ申立ヲ爲サシメタル上ニテ其申立ヲ受ケサル陪審
 十二員ノ姓名票壺中ヨリ出テタル時之ヲ決斷ヲ爲ス陪審ト定ム可
 シ
 第四百條 被告人並ニ檢事長ハ陪審十二員ノ姓名ノ殘ルニ至ル迄陪

審ノ除去ヲ申立ルヲ得可シ

第四百一條 被告人ト檢事長トハ陪審ノ同一ノ員數ヲ除去スルヲ得
 得可シ若シ陪審ノ全員奇數ナル時ハ被告人ノ陪審ヲ除去シ得可キ
 員數檢事長ヨリモ更ニ一員多シトス

第四百二條 被告人數人アル時ハ互ニ協議シテ陪審ヲ除去シ又ハ各
 自ニ之ヲ除去スルヲ自由ナリトス

此場合ニ於テハ前數條ニ循ヒ被告人一人ニテ除去シ得可キヨリ更
 ニ多數ヲ除去ス可カラズ

第四百三條 被告人數人其除去スルヲ協議セサル時ハ各自之ヲ爲
 スニ付キ其順序ヲ圖引ニテ定ム可シ○此場合ニ於テハ其順序ニ從
 ヒ一人ノ除去シタル陪審ハ即チ數人ノ除去シタルモノトシ各其順
 序ニ從テ陪審ノ定員ニ至ル迄ヲ除去スルヲ得可シ

第四百四條 又被告人數人ニテ陪審定員ノ中一部ヲ協議シテ除去シ
他ノ一部ヲ各自ニ其援引ノ順序ニ循ヒ除去スルヲ得可シ
第四百五條 十二員ノ陪審定マリタル後直チニ被告人ノ吟味ニ取掛
ル可シ

第四百六條 何事ニ因ラヌ事故アリテ告訴狀ニ記スル罪犯ニ付キ被
告人ノ吟味ヲ爲スルヲ裁判所ノ次ノ會議ノ日迄延ハシタル時ハ更
ニ改メテ陪審ノ姓名書ヲ造リ且前數條ニ記スル如ク更ニ其除去ヲ
爲シ十二員ノ陪審ヲ定ム可シ若シ此手續ヲ爲ササル時ハ其決斷ノ
効ナカル可シ

○第三卷 裁判言渡ヲ取消サント願フ方法(千八百八年十二月十日)

決定同月二十日(布告)

○第一章 吟味ノ手續及ヒ裁判言渡ヲ取消ス事
第四百七條 重罪、輕罪、註誤ニ付キ爲シタル終審ノ裁判言渡及ヒ其言
渡ヲ爲ス前ノ吟味ノ手續ハ後ノ數條ニ記スル場合ト差別トニ循ヒ
其取消ヲ願フヲ得可シ

○第一款 重罪ニ付テノ裁判言渡ヲ取消ス事
第四百八條 重罪ノ被告人刑ヲ言渡サレタル時當テ控訴院ノ重罪取
調局ヨリ其被告人ヲ重罪裁判所ニ移シタル言渡又ハ重罪裁判所ニ
テ爲シタル吟味ノ手續又ハ重罪裁判所ノ處刑ノ言渡ニ缺ク可カラ
サル法式ニ背キ或ハ其法式ヲ缺キタル事アリテ治罪法中ニ其法式
ノ如ク行ハサル時ハ其言渡及ヒ吟味手續ノ効ナキヲ別段定メタ
ルニ於テハ刑ヲ言渡サレタル者又ハ檢察官ヨリノ求メニ因リ處刑

ノ言渡ヲ取消シ又ハ効ナキ吟味ノ手續ヨリ後ノ諸件ヲ取消ス可シ
又言渡ヲ爲シタル裁判所ノ管轄異ナリタル時又ハ裁判所ニテ被告
人又ハ檢察官ノ法律上ニ於テ授カリタル權利ニ因リ求ムル所ニ付
キ其言渡ヲ爲スヲ肯セス又ハ言渡ヲ爲スヲ怠リタル時ハ治罪法中
ニ裁判言渡又ハ吟味手續ノ効ナキヲ別段定メサル場合ト雖モ亦
前項ニ等シク之ヲ取消ス可シ

第四百九條 裁判所ヨリ重罪被告人ヲ無罪ナリト言渡シタル時ハ檢
察官ヨリ法律ヲ保護スル爲メノミニ付キ其無罪ノ言渡及ヒ其前ニ
爲シタル吟味ノ手續ヲ取消サント求ム可シ但シ是カ爲メ被告人ノ
害ヲ爲ス可カラズ

第四百十條 重罪裁判所ヨリ罪犯ニ付キ言渡シタル刑ト其罪犯ニ付
キ法律上ニ定メタル刑ト異ナルニ因テ其言渡ヲ取消ス可キ時ハ檢

察官又ハ刑ヲ言渡サレシ被告人ヨリ其取消ヲ求ムルヲ得可シ
又重罪裁判所ニテ刑法ノ箇條中ニ罪犯ニ管シタル刑ナキヲ以テ第
三百六十四條ニ記スル如ク被告人ヲ赦宥スル言渡ヲ爲シタル時檢
察官其罪犯ニ管シタル刑アリトスルニ於テハ檢察官ヨリ其赦宥ノ
言渡ヲ取消サント求ムルヲ得可シ

第四百十一條 裁判所ヨリ言渡シタル刑ト刑法上ニテ定ムル所ノ刑
ト相違スルヲナキ時ハ其言渡書ニ誤テ刑法中ノ他ノ箇條ヲ抄出シ
タルヲ以テ口實ト爲シ其言渡ヲ取消サント求ム可カラズ

第四百十二條 如何ナル場合ニ於テモ民事ノ原告人ハ重罪裁判所ヨ
リ被告人ヲ無罪ナリトスル言渡又ハ被告人ヲ赦宥スル言渡 第三百
條見 取消サント求ム可カラズ然レモ裁判所ニテ其言渡書ヲ以テ
被告人ノ求ムル所ヨリ更ニ過分ナル損失ノ償ヲ民事ノ原告人ニ言

附シルコトアル時ハ民事ノ原告人其言渡書ノ中ニテ其言附ニ管スル部分ヲ取消サント求ムルコトヲ得可シ

○第二款 輕罪又ハ註誤ニ付テノ裁判言渡ヲ取消ス事

第四百十三條 輕罪又ハ註誤ニ付テハ裁判所ヨリ被告人ニ刑ヲ言渡シタルト之ヲ赦宥シタルトテ問ハス檢察官又ハ被告人又ハ民事ノ原告人第四百八條ニ循ヒ終審ノ裁判言渡ヲ取消サント求ムルコトヲ得可シ

然レハ被告人赦宥ノ言渡ヲ得タル時ハ檢察官又ハ民事ノ原告人ヨリ被告人ノ權利ヲ保護スル爲メノ法式ニ違フタル事又ハ其法式ヲ缺キタル事ヲ申立テ其赦宥ノ言渡ヲ取消サント求ムルコトヲ得ス
第四百十四條 第四百十一條ノ規則ハ輕罪及ヒ註誤ニ付キ爲シタル終審ノ裁判言渡ニ通シ用フ可シ

○第三款 前二款ニ通シ用フ可キ規則

第四百十五條 覆審院又ハ控訴院ニテ吟味ノ手續ヲ取消ス時ハ其過失アル官吏又ハ下吟味掛リ裁判役ノ費用ヲ以テ其吟味ノ手續ヲ再ヒ行ハシム可キコトヲ言渡スヲ得可シ

然レハ此等ノ官吏ニ重キ過失アリテ且此治罪法ヲ布告シタルヨリ二年ノ後ニ非サレハ此條ノ規則ヲ通シ用フ可カラス

○第二章 覆審院ニ願出ス事
裁判言渡又ハ吟味手續ノ取消ヲ願フ事ニシテ此章ハ即チ前章ノ續キナリト看做ス可シ

第四百十六條 本案ニ管セサル預審ノ言渡 預審ニシテ且終審ノ言渡ニ管セサル言渡ヲ云フハ確定ノ裁判言渡ノ後ニ非サレハ之ヲ取消サント求ム可カラス但シ一方ノ者自己ノ隨意ニテ其預審ノ言渡ノ如ク執行フタリト雖モ後ニ其言渡ヲ取消サント求ムル時相手方ヨリ其取消ヲ拒ムノ憑據ト爲ス可

カヲス

裁判所ノ管轄ノ異ナリタルニ付キ其言渡ヲ取消サント求ムル時ハ此條ノ規則ヲ通シ用フ可カラス

第四百十七條 刑ヲ言渡サレシ被告人其言渡ノ取消ヲ願ハントスル時ハ其願書ヲ書記官ニ出シ其被告人ト書記官ト之ニ姓名ヲ手署ス可シ若シ被告人姓名ヲ手署スルコトヲ欲セス又ハ之ヲ知ラサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

又刑ヲ言渡サレシ被告人ノ代書師又ハ其名代人ヨリ其願書ヲ爲ス時モ其願書ヲ出スニ付テノ法式ハ亦前ニ記スル所ニ等シトス但シ名代人ヨリ其願書ヲ爲ス時ハ名代ノ証書ヲ其願書ニ添ヘ差出ス可シ其願書ハ別段設ケタル簿冊ニ之ヲ登記ス可シ但シ其簿冊ハ公ケニ衆庶ニ示ス可シ如何ナル人ト雖モ其拔書ヲ受取ルコトヲ得可シ

第四百十八條 民事ノ原告人又ハ檢察官ヨリ重罪、輕罪、註誤ニ付キ爲シタル終審ノ裁判言渡ヲ取消サント願フ時ハ前條ニ記スル如ク其願書ヲ簿冊ニ登記セシ外其願書ヲ三日内ニ相手方即チ被告ニ送達ス可シ

其相手方現ニ禁錮ヲ受クル時ハ書記官其願書ヲ讀聽カセ其相手方之ニ姓名ヲ手署ス可シ若シ姓名ヲ手署スルコトヲ欲セス又ハ之ヲ知ラサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

又其相手方禁錮ヲ受クヨルナキ時ハ取消ノ願人其願書ヲ使吏ニ託シテ之ヲ相手方又ハ其擇ミタル住所ニ送達セシム可シ但シ此場合ニ於テハ路程三ミリヤメートル毎ニ一日ノ猶豫ヲ加フ可シ

第四百十九條 民事ノ原告人裁判言渡ヲ取消サント願フ時ハ諸書類ニ添ヘテ其裁判言渡書ノ公正ノ寫ヲ差出ス可シ

其民事原告人ハ百五十「フラン」ノ金高罰金ニ供スルモノヲ官署ニ預ク可シ
若シ又抗傳シテ言渡ヲ受ケタル時ハ其半高ヲ官署ニ預ク可シ但シ
其金高ヲ預ケサル時ハ取消願ヲ爲スノ權ヲ失フ可シ

第四百二十條 左ノ數人ハ罰金ニ供スル金高ヲ預クルニ及ハス

第一 重罪ニ付キ刑ヲ言渡サレタル者

第二 行政ノ事務ニ付キ又ハ官ノ歳入或ハ官地ノ事務ニ付キ取
消願ヲ爲ス官吏

總テ其他ノ者ハ取消願ノ上負訴訟トナル時罰金ヲ言渡サル可シ然
レモ其取消ノ願書ニ添ヘ左ノ書類ヲ出ス者ハ其金高罰金ニ供スル
ヲ預クルニ及ハス

第一 六「フラン」以下ノ稅銀ヲ出ス旨ヲ証スル租稅目錄ノ拔書
又ハ全ク稅銀ヲ免レタル旨ヲ証スル邑ノ稅官ノ受合書

第二 住所ノ邑長又ハ其補佐ヨリ渡シ郡長檢印シテ州長ノ允許
シタル貧困ノ受合書

第四百二十一條 重罪ハ言ヲ持タス輕罪又ハ註誤ノ事ニ付キ禁錮ノ

刑ヲ言渡サレタル者ハ現ニ禁錮ヲ受ケタル時又ハ保証ヲ立テタル

上ニテ赦宥ヲ得タル時ニ非サレハ取消願ヲ爲ス可カラス

此場合ニ於テハ其取消ノ願書ニ添ヘ其禁錮ノ證書又ハ保証ヲ立テ

タル上ニテ赦宥ヲ得タル證書ヲ差出ス可シ

然レモ裁判所ノ管轄異ナリタルヲ以テ取消ヲ願ハントスル時ハ之

ヲ願フ者現ニ覆審院所在ノ地ノ裁判所附留置場ニ入りタルノ証ヲ

立ルノミニテ其願ヲ爲スヲ得可シ但シ其留置場ノ監守人ハ願人

ヨリ檢事長ニ差出シテ檢事長ノ檢印セシ願書ヲ檢視シタル上ニテ

其願人ヲ受取リ留置場ニ入ル、ヲ得可シ

第四百二十二條 刑ヲ言渡サレシ者又ハ民事ノ原告人ハ言渡ノ取消願ヲ爲シタル時又ハ其時ヨリ十日内ニ嘗テ其言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記局ニ其取消ヲ求ムル憑據書ヲ差出ス可シ○書記官ハ其受取證書ヲ渡シタル上直ニ其憑據書ヲ檢察官ニ送ル可シ

第四百二十三條 取消願ヲ爲シタルヨリ十日ノ後ニ檢察官ヨリ裁判事務宰相ニ吟味ニ管シタル諸書類ト願人ヨリ既ニ取消願ノ憑據書ヲ差出シタルニ於テハ其憑據書トヲ送呈ス可シ

願人ノ取消ヲ願フ裁判言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記官ハ諸書類ノ目錄ヲ無税ニテ記シ之ヲ其書類ニ添フ可シ若シ此規則ニ違フ時ハ書記官覆審院ヨリ百フランノ罰金ヲ言渡サル可シ

第四百二十四條 裁判事務宰相ハ諸書類ヲ受取リタルヨリ二十四時間ニ之ヲ覆審院ニ送り且之ヲ送呈セシ官吏ニ其旨ヲ告知ス可シ

又刑ヲ言渡サレシ者ハ其取消ノ願書並ニ裁判言渡書ノ寫及ヒ憑據書ヲ直ニ覆審院ノ書記局ニ出スヲ得可シ然レモ民事ノ原告人ハ覆審院ノ代言人ノ世話ヲ得ルニ非サレハ此條ニ記スル規則ノ利益ヲ受ク可カラズ

第四百二十五條 重罪輕罪註誤ノ別ナク總テ裁判言渡ノ取消ヲ願出シタル時ハ覆審院ニテ此章前二條ニ記スル期限ノ終リシ時直ニ其願ニ付キ裁判ヲ言渡シ又ハ其期限ノ終リシ時ヨリ遅クトモ一月内ニ其裁判ヲ言渡ス可シ

第四百二十六條 覆審院ニテハ預メ取消願ヲ取上クルコトヲ允許スルニ及ハスニテ其願ヲ棄却シ又ハ裁判言渡ヲ取消ス可シ

第四百三十七條 覆審院ニテ輕罪又ハ註誤ニ付テノ裁判言渡ヲ取消ス時ハ其言渡ヲ爲シタル裁判所ト同等ノ裁判所ニ其吟味ヲ移ス可シ

第四百二十八條 覆審院ニテ重罪ニ管シタル言渡ヲ取消ス時ハ次ノ七條ニ記スル如ク處置ス可シ

第四百二十九條 覆審院ニテ左ノ裁判所ニ吟味ヲ移スヘキ言渡ス可シ

第二百九十九條ニ記シタル原由中ノ一ニ付キ言渡ヲ取消ス時ハ

裁判所ノ管轄ヲ定メ即チ何地ノ重罪裁判所ニ被告人且重罪ヲ犯

シタリト告シ可キ旨ヲ言渡シタルヨリ以外ノ控訴院重罪取調局

重罪裁判所ノ言渡ヲ取消シ又ハ其裁判所ノ吟味ノ手續ヲ取消シ

タル時ハ其言渡ヲ爲シタルヨリ以外ノ重罪裁判所

又民事ノミニ管スル箇條ニ付キ裁判言渡又ハ吟味ノ手續ヲ取消

ス時ハ其下吟味掛リ裁判役ノ在ル裁判所ヨリ以外ノ初告裁判所

但シ此場合ニ於テハ預メ和解ノ式ヲ行フコトナク直チニ初告裁判所ニ吟味ノ手續ニ取掛ル可シ

若シ裁判所ノ管轄異ナリタルヲ以テ其裁判言渡又ハ吟味ノ手續

ヲ取消ス時ハ覆審院ヨリ管轄ノ裁判所ヲ指示シ其裁判所ニ吟味

ヲ移ス可シ若シ最初下吟味ヲ爲シタル裁判役ノ在ル初告裁判所

ニ其吟味ヲ移スヘキ相當ナル時ト雖モ其裁判所ニ移ス可カラズ其

他ノ初告裁判所ニ其吟味ヲ移ス可シ

又被告人刑ヲ言渡サレタルト雖モ法律上ニテ其申立ラレシ所爲

ヲ罪犯ナリト爲サ、ルニ因リ其刑ノ言渡ヲ取消ス時民事ノ原告

人アルニ於テハ最初下吟味ヲ爲シタル裁判役ノ在ル裁判所ヨリ

以外ノ初告裁判所ニ其吟味ヲ移ス可シ若シ又民事ノ原告人アラ

サル時ハ別段其吟味ヲ移スニ及ハス

第四百三十條 覆審院ヨリ吟味ヲ移ス可キ裁判所ヲ撰定ス可キ時ハ
取消ノ言渡ヲ爲シタル後直ニ裁判役會議ノ室ニテ其撰定ニ付キ
商議ヲ爲ス可シ但シ其商議ノ上決定シタル所ヲ取消ノ言渡書ニ附
記ス可シ

第四百三十一條 覆審院ヨリ吟味ヲ移ス言渡アリシニ因リ其吟味ヲ
爲ス可キ下吟味掛リ裁判役ハ言渡ノ取消トナリシ重罪裁判所又ハ
控訴院ノ管轄内ノ裁判役中ヨリ之ヲ撰ム可カラス

第四百三十二條 覆審院ヨリ控訴院ニ吟味ヲ移シタル時ハ其控訴院
ニテ當然爲ス可キ吟味ノ手續ヲ爲シ終リタル後其管轄地内ノ重罪
裁判所ヲ別段指定メテ其裁判ヲ移ス可シ

第四百三十三條 覆審院ヨリ重罪裁判所ニ吟味ヲ移シタル時未ダ罪
犯ノ告訴ヲ受ケサル同罪人アルニ於テハ重罪裁判所ヨリ下吟味掛

リ裁判役ヲ指定メ且檢事長ヨリ其代役ヲ指定メテ各其下吟味ノ手
續ヲ爲サンメ然ル上ニテ諸書類ヲ控訴院ノ重罪取調局ニ送り其局
ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キヤ否ヲ定ム可シ

第四百三十四條 法律上ニテ定ムル所ノ刑ト重罪裁判所ノ言渡シタ
ル刑ト相異ナルニ因リ其刑ノ言渡ヲ取消ス時ハ其吟味ヲ移シタル
重罪裁判所ニ於テ以前ノ裁判所ニテ嘗テ陪審ノ爲シタル決斷書ニ
循ヒ其言渡ヲ爲ス可シ

又更ニ他ノ原由ニ付キ刑ノ言渡ヲ取消ス時ハ其吟味ヲ移シタル重
罪裁判所ニテ更ニ辯論ヲ爲サシム可シ 証人ヲ呼出シ且更ニ陪審ヲ
集會セシメテ其決斷ヲ爲サ
シムル
シムル

重罪裁判所ノ言渡中ノ一部ノ法律ニ背キタル時ハ覆審院ニテ其
一部ノミヲ取消ス可シ

第四百三十五條 覆審院ニテ刑ノ言渡ノ取消ヲ得タル上更ニ重罪ノ
裁判ヲ受ク可キ者ハ之ヲ禁錮シタル儘ニテ控訴院又ハ重罪裁判所
ニ移シ或ハ召捕ノ言渡書ニ循ヒ之ヲ召捕ヘテ控訴院又ハ重罪裁判
所ニ移ス可シ

第四百三十六條 重罪、輕罪、註誤ノ別ナク民事ノ原告人取消願ヲ爲シ
負訴訟トナル時ハ赦宥ヲ得タル被告人ニ對シ百五十「フランク」ノ償

ヲ爲シ且其被告人ノ裁判所費用ヲ償ヒ並ニ百五十「フランク」ノ罰金
ヲ官ニ納ム可シ但シ以前抗傳シテ裁判言渡ヲ受ケタル時ハ其罰金

ノ高ク七十五「フランク」トス 第四百十
九條見合

官署又ハ官吏ハ取消願ノ上負訴訟トナリタル時相手方ヘノ償ヲ爲
シ且其裁判所費用ヲ償フ「ミトス」 第四百二
十條見合

第四百三十七條 取消願ヲ爲シ覆審院ニテ其願ノ如ク取消ヲ爲ス時

ハ其取消ノ言渡ノ文面如何ナルヲ問ハズ其願人ニ當テ官署ニ預ケ
置キタル金高ヲ直ニ「ミトス」還ス可シ但シ其取消ノ言渡ノ文面ニ其金高

ヲ還ス可キ「ミトス」別段記セサル時ト雖モ亦同一ナリトス

第四百三十八條 一度取消ノ願ヲ爲シ覆審院ニテ其願ヲ棄却シタル
上ハ其願人如何ナル憑據及ヒ口實アリト雖モ再ヒ其言渡ヲ取消サ

ント願フ可カラズ

第四百三十九條 取消願ヲ棄却スル覆審院ノ言渡ハ書記官之ヲ拔書
ニ記シ姓名ヲ手署シテ三日内ニ覆審院ノ檢事長ニ送リ檢事長ヨリ

之ヲ裁判事務宰相ニ送呈シ其宰相ヨリ其取消ノ願ヲ裁判言渡ヲ爲
セシ裁判所ノ檢察官ニ之ヲ送ル可シ 第三百七十

第四百四十條 一度覆審院ニ願出テ裁判言渡ノ取消ヲ得タル後更ニ
再度ノ裁判言渡ヲ取消サント覆審院ニ願出ル時ハ千八百七年九月

十六日ノ法律ヲ以テ定メタル規則ニ循ヒ處置ス可シ
 第四百四十一條 覆審院ノ檢事長裁判事務宰相ヨリ受取リタル命令書ヲ示シテ覆審院ノ刑事局ニ裁判所ノ書類又ハ裁判言渡書ノ法律ニ背キタル旨ヲ申立ル時ハ其書類又ハ裁判言渡書ヲ取消シ別段ノ道理アル時ハ司法警察官吏又ハ裁判役此篇第四卷第三章ニ記スル如ク犯罪ノ訴ヲ受シ可シ

第四百四十二條 控訴院又ハ重罪裁判所又ハ輕罪裁判所又ハ註誤裁判所ヨリ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其言渡ノ取消ヲ願出ルコトヲ得可キ場合ニ於テ定期内ニ其願ヲ爲ス者ナキ時ハ既ニ定期ヲ終リタルト否トテ問ハヌ覆審院ノ檢事長自己ノ職務ヲ以テ其取消ノ旨ヲ覆審院ニ申立テ其言渡ヲ取消サシムルコトヲ得可シ但シ其取消ヲ願ハザル者ハ其言渡ノ取消トナリシ旨ヲ申立テ其言渡ノ如ク執行フコトヲ

拒ム可カラズ

○第三章 裁判調直ノ事

第四百四十三條 (千八百六十七年六月廿九日左ノ如ク改メ)重罪ト輕罪トテ問ハヌ總テ裁判所ノ言渡ニ付キ左ノ場合ニ於テハ調直ヲ願フコトヲ得可シ

第一 人ヲ殺害シタル罪ニ付キ刑ヲ言渡サレタル後若ク死シタルト爲セシ人其實存命ナリト思料シ得可キ十分ナル憑據アル時

第二 輕罪又ハ重罪ニ付キ刑ヲ言渡サレタル後他人同一ノ事ニ付キ更ニ刑ヲ言渡サレ其二箇ノ言渡相觸ル、ニ因リ其中一方ノ者無罪ナルノ証ト爲ヌ可キ時

第三 吟味ノ席ニ出テ証ヲ申述ヘシ証人中ノ一人被告人刑ノ言

渡ヲ受ケシ後其被告人ニ對シテ偽証ヲ述ヘタル訴ヲ受テ刑ヲ
 言渡サレタル時〇斯ノ如ク刑ヲ言渡サレシ証人ハ後ノ吟味ノ
 時更ニ其申述ヲ聽ク可カラズ
 第四百四十四條 (千八百六十七年六月廿九日左ノ如ク改テ) 裁判言渡
 ノ調直ヲ願フ可キ權ハ左ノ數人ニアリトス

- 第一 裁判事務宰相
 - 第二 刑ヲ言渡サレタル者
 - 第三 刑ヲ言渡サレタル者ノ死シタル後ハ其配偶者其子血屬ノ
 親其財産全部ノ遺囑ノ贈遺ヲ受ケタル者又ハ其財産一部ノ遺
 囑ノ贈遺ヲ受ケタル者刑ヲ言渡サレタル者ヨリ別段名代ノ權
 ヲ授カリシ者
- 輕罪ニ付テハ禁錮ノ刑ヲ言渡サレ又ハ政權民權族權ノ全部又ハ一

部ヲ奪フ可キ刑ヲ言渡サレタル時ニ非サレハ裁判調直ヲ願フ可カ
 ラヌ〇裁判事務宰相ハ自己ノ公務ヲ以テ檢事長ニ命令書ヲ與ヘ又
 ハ願人ノ求メニ因リ其命令書ヲ與ヘ檢事長ヲシテ覆審院ノ刑事局
 ニ其調直ヲ求メシム可シ〇前條ノ第二及ヒ第三ノ場合ニ於テハ
 願人其相觸ルハ二箇ノ言渡中後ノ言渡アリシヨリ二年內又ハ偽証
 ヲ述ヘシ証人ノ刑ヲ言渡サレタルヨリ二年內ニ其調直ノ願書ヲ裁
 判事務宰相局ニ差出スニ非サレハ之ヲ取上ク可カラズ〇何レノ場
 合ニ於テモ覆審院ノ言渡アルニ至ル迄ハ裁判事務宰相ノ命令ニ因
 リ裁判言渡願ヲ言渡ルノ執行ヲ止メ又其後ハ覆審院ニテ調直ノ願
 ヲ取上ルルヲ允許スル言渡ニ因リ其裁判言渡ノ執行ヲ止ム可シ
 第四百四十五條 (千八百六十七年六月廿九日左ノ如ク改テ) 覆審院ニ
 テ裁判言渡調直ノ願ヲ取上ケタル時其事件取調ノ手續未ダ十分ニ

濟サルニ於テハ覆審院ニテ其事件本案ノ取調証人及ヒ其他ノ者ノ
 對理ノ吟味人違有無ノ取調及ヒ其他事實ヲ知り得キ間糺及ヒ法
 式ヲ爲シ又ハ他ノ裁判所ニ任シテ之ヲ爲サシム可シ○又其事件取
 調ノ手續既ニ十分濟タル時刑ヲ言渡サレタル者ト其証人及ヒ其他
 管係アル者トテ更ニ相對シテ辨論セシムルヲ得可キニ於テハ覆
 審院ニテ刑ノ言渡ヲ取消シ及ヒ其他調直ノ妨ケトナル可キ諸件ヲ
 取消シテ其間糺ス可キ箇條ヲ定メ其刑ヲ言渡サレタル者ヲ其刑ヲ
 言渡シタルヨリ以外ノ裁判所ニ移ス可シ○陪審ノ決斷ニ任カス可
 キ事件ニ重罪ヲニ付テハ覆審院ヨリ吟味ヲ移シタル控訴院ノ檢事長
 更ニ重罪告訴狀ヲ記ス可シ

第四百四十六條 (千八百六十七年六月二十九日左ノ如ク改ム) 刑ヲ言
 渡サレタル者ト証人及ヒ其他管係アル者トテ相對シテ辨論セシム

ルヲ得サル時殊ニ刑ヲ言渡サレタル者ノ死去シ又ハ抗傳シタル
 時又ハ刑ノ訴ノ期滿免除或ハ刑ノ期滿免除ノ期限ニ至リシ時ハ覆
 審院ニテ相對シテ辨論ヲ爲サシムルヲ得サル旨ヲ証セシ上ニテ
 預メ刑ノ言渡ヲ取消スニ及ハス又他ノ裁判所ニ吟味ヲ移スニ及ハ
 スシテ民事ノ原告人アル時ハ其原告人ト死者ノ爲メ覆審院ヨリ任
 シタルキニユラトール人^{世話}トノ面前ニテ其本案ノ裁判ヲ爲ス可シ○
 此場合ニ於テハ覆審院ニテ不當ナル刑ノ言渡ヲ取消シ又別段ノ道
 理アル時ハ死者ノ罪ヲ申雪スル言渡ヲ爲ス可シ

第四百四十七條 (千八百六十七年六月廿九日左ノ如ク改ム) 第四百四
 十三條ノ第一ノ場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ取消シタル上其犯人ニ重罪
 並ニ輕罪ノアラサル時ハ覆審院ヨリ他ノ裁判所ニ吟味ヲ移スニ及
 ハス

假リノ規則

此治罪法ヲ布告スル前ニ第四百四十三條ノ第二及ヒ第三ニ循ヒ調直ヲ願フコトヲ得可キ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ此法布告ノ時ヨリ第四百四十四條ニ記シタル調直ノ願書ヲ差出ス可キ期限ニ算フ可シ

○第四卷 別段ノ罪犯吟味手續ノ事第一章ヨリ第四章ニ至ル迄ハ

千八百八年十二月十二日決定全月廿二日布告第五章ヨリ第七

章ニ至ル迄ハ千八百八年第十二月十三日決定全月廿三日布告

○第一章 贗造ノ訴

第四百四十八條 總テ書類贗造ノ訴ノ時ハ其贗造ナリト述フル書類

ヲ差出シテ之ヲ書記局ニ納メ書記官其書類ノ毎葉ニ姓名ヲ手署シ

且横線ヲ畫シテ其書類ノ模様ヲ詳カニ調書ニ記シ又其書類ヲ差出

シタル者其毎葉ニ姓名ヲ手署シ且横線ヲ畫ス可シ若シ其者姓名ヲ

手署スルコトヲ知ラサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ○書記官此等ノ法式

ヲ行ハシメテ其書類ヲ受取タル時ハ五十フランノ罰金ヲ言渡サ

ル可シ

第四百四十九條 若シ贗造ナリト述フル書類ヲ公ケテ預リ役所ヨリ

取出シタル時ハ之ヲ渡シタル官吏亦前條ニ記スル如ク其書類ニ姓

名ヲ手署シ且横線ヲ畫シ可シ若シ此規則ニ背ク時ハ五十フランノ

罰金ヲ言渡サル可シ

第四百五十條 又贗造ナリト訴フル書類ハ司法警察ノ官吏之ニ姓名

ヲ手署シ又民事ノ原告人又ハ其代書師出席スル時ハ此等ノ者亦之

ニ姓名ヲ手署ス可シ

被告入モ亦出席シタル時其書類ニ姓名ヲ手署ス可シ
 若シ此等ノ者姓名ヲ手署スルコトヲ得ス又ハ手署スルコトヲ欲セサル
 時ハ其旨ヲ調書ニ附記ス可シ
 書記官此條ノ規則ニ背ク時ハ五十「フランク」ノ罰金ヲ言渡サル可シ
 第四百五十一條 書類ヲ以テ裁判ノ所爲又ハ民事ノ所爲ノ憑據ト爲
 シタル時ト雖モ其書類ノ贗造タルヲ訴フルコトヲ得可シ
 第四百五十二條 贗造ノ旨ヲ申立タル書類ノ公ケノ預リ人又ハ私
 ノ預リ人ハ檢察官ノ言渡書又ハ下吟味掛リ裁判役ノ言渡書ニ循ヒ
 其預ル所ノ書類ヲ差出ス可シ若シ之ヲ差出サ、ル時ハ召捕ヲ受ク
 可シ
 其言渡書及ヒ書類差出シノ証書アル時ハ其預リ人其書類ニ管係ア
 ル者ニ對シ既ニ之ヲ差出シタルノ証アリトス可シ

第四百五十三條 照徴ノ爲メ差出シタル書類モ亦第四百四十八條第
 四百四十九條第四百五十條ニ記スル如ク姓名ヲ手署シ及ヒ横線ヲ
 畫ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ此數條ニ記スル所ノ罰金ヲ言渡サ
 ル可シ
 第四百五十四條 總テ公ケノ預リ人ハ其預ル所ノ書類ヲ照徴ノ爲メ
 差出ス可シ若シ之ヲ出サ、ル時ハ召捕ヲ受ク可シ○之ヲ差出ス可
 キノ言渡書及ヒ差出シノ証書アル時ハ其預リ人其書類ニ管係アル
 者ニ對シ既ニ之ヲ差出シタルノ証アリトス可シ
 第四百五十五條 公正ノ証書類ノ正本ヲ差出ス可キ事ノ必要ナル時
 ハ其地ノ初告裁判所ノ上席人其証書ノ正本ト讀合セタル上眞正ノ
 モノナリト認メタル其寫ヲ其預リ人ノ方ニ遣シ置ク可シ但シ上席
 人ハ其旨ヲ調書ニ記ス可シ○其預リ人官更タル時ハ其正本ノ還リ

來ルニ至ル迄其寫ヲ正本ニ代用シ其寫ヨリ更ニ寫シタル副本ヲ渡
 ス事ヲ得可シ但シ其預リ人ハ其旨ヲ調書ニ記ス可シ 訴訟法第二
 百三條見合
 然レモ其公正ノ證書ヲ簿冊中ニ登記シタルニ因リ一時之ヲ引離シ
 テ差出スヲ得サル時ハ裁判所ヨリ其簿冊ヲ差出ス可キトテ言渡
 シ前ニ記スル手續ヲ行フ可キ義務ヲ釋放スルヲ得可シ
 第四百五十六條 私ノ證書ト雖モ照徴ノ爲メ之ヲ差出サシメ雙方之
 ヲ認ムル時ハ照徴ノ用ニ供スルヲ得可シ
 官吏ニ非サル者其證書ヲ預ル時ハ縱令自カラ之ヲ預リ居ル旨ヲ述
 タル時ト雖モ其證書ヲ差出サ、ルニ因リ直ニ之ヲ召捕フ可カラ
 ス然レモ證書ヲ出サ、ルニ付キ裁判所ニ呼出サレタル上之ヲ出サ
 、ルニ付テハ吟味ヲ受ケ終ニ負訴訟トナリタル時ハ其裁判言渡書
 ニ其者直ニ之ヲ其證書ヲ出ス可ク若シ出サ、ルニ於テハ召捕フ可キ

旨ヲ記スルヲ得可シ

第四百五十七條 証人証書類ノ價造タルヤ否ニ付キ証ヲ申述フル時
 ハ之ニ横線ヲ畫シ且姓名ヲ手署ス可シ若シ手署スルヲ得サル時
 ハ其旨ヲ調書ニ記ス可シ

第四百五十八條 訴訟吟味ノ手續ヲ爲ス間ニ差出シタル證書ヲ一方
 ヲ預造ナリト申立ル時ハ相手方ヲシテ其證書ヲ用ント欲スルヤ
 否ヲ答ヘシム可シ 訴訟法第二百
 十五條見合

第四百五十九條 相手方ニテ其證書ヲ用ヒスト答フル時又ハ相手方
 ハ八日內ニ其答ヲ爲サ、ル時ハ其證書ヲ棄却シ吟味ノ手續及ヒ裁判
 言渡ニ取掛ル可シ

若シ又相手方其證書ヲ用ヒント欲スル旨ヲ答フル時ハ主ナル訴訟
 ノ吟味ノ手續ヲ爲ス裁判所ニテ附帶ノ訴訟ト爲シ其價造ノ訴ヲ吟

味ス可シ 則ニ循ヒ吟味ヲ爲スヲ云フ

第四百六十條 若シ証書ノ贋造タルヲ申立ル者ヨリ其証書ヲ出シタル者即チ其贋造ノ主謀或ハ附從タルヲ述フル時又ハ吟味ノ手續ニ因リ贋造ノ主從タル者猶生存シ且未タ其罪ノ期滿免除ノ期限ニ至ラサルヲ知リ得タル時ハ此章ニ記スル如ク主タル訴訟トシテ其罪ヲ申立ツ可シ 即チ治罪法ノ規則ニ循ヒ贋造訴訟

此場合ニ於テ民事ノ訴訟アル時ハ贋造訴訟ノ裁判アルニ至ル迄民事ノ訴訟ノ裁判ヲ延ハス可シ

又重罪輕罪註誤ニ付テノ刑事ノ訴訟アル時ハ裁判所ニテ檢察官ノ申立ヲ聽キタル上贋造訴訟ノ裁判アルニ至ル迄其刑事ノ訴訟ノ裁判ヲ延ハス可キヤ否ヲ預メ決斷ス可シ 訴訟法第二百

第四百六十一條 被告人贋造訴訟ノ裁判所ニ其手記ノ書面ヲ差出シ及

ヒ文字ヲ手記ス可キノ求メテ受ク可シ若シ其求メテ肯セヌ又ハ黙シ居タル時ハ其旨ヲ調書ニ記ス可シ

第四百六十二條 若シ裁判所ニテ刑事又ハ民事ノ訴訟ヲ吟味スル時贋造ノ憑據ト贋造ヲ爲シタリト思料ス可キ人ニ付テノ憑據ト見出シタル時ハ檢察官又ハ裁判所ノ上席人ヨリ其贋造ヲ爲シタルト思料ス可キ地又ハ其疑ヲ受ケタル者ノ所在ノ地ノ下吟味掛リ役所ノ檢察長ノ代役ニ其書類ヲ送ル可シ但シ其檢察官又ハ裁判所ノ上席人ハ其疑ヲ受ケタル者ニ對シ引出狀ヲ出スヲ得可シ

第四百六十三條 若シ公正ノ証書ノ全部又ハ一部ノ贋造タルヲ言渡シタル時ハ其言渡ヲ爲シタル裁判所ヨリ其証書中故ラニ塗抹シタル所アラハ之ヲ書加ヘ又故ラニ書加ヘタル所アラハ之ヲ塗抹シ又ハ其證書ヲ改正ス可キヲ言渡シ此等ノ事ヲ調書ニ記ス可シ

照徴ノ書類ハ之ヲ持來リシ官署ニ返シ又ハ之ヲ出シタル者ニ返ス可シ但シ此事ハ裁判言渡ヨリ十五日内ニ之ヲ爲ス可シ若シ書記官此規則ニ背リ時ハ五十「フランク」ノ罰金ヲ言渡サル可シ

第四百六十四條 其他贖造訴訟ノ吟味手續ハ他ノ犯罪訴訟ト同一ナリトス但シ次項ニ記スル所ハ例外ナリトス

重罪裁判所ノ上席人檢事長又ハ其代役下吟味掛リ裁判役治安裁判役ハ其管轄地外ト雖モ國債ノ手形佛蘭西國立銀行ノ手形又ハ諸州ノ銀行ノ手形ヲ贖造シ又ハ輸入シ又ハ配分シタルノ疑アル者ノ住居ニ至リ穿鑿ヲ爲スコトヲ得可シ

貨幣贖造ノ罪又ハ國寶贖造ノ罪ニモ亦此條ノ規則ヲ通シ用フ可シ

〇第二章 重罪被告人抗侮ヲ爲ス事

第四百六十五條 重罪取調局ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告シ可キ

言渡ヲ爲シタル後被告人ヲ召捕フルコトヲ得サル時又ハ其住所ニ其言渡書ヲ送リタルヨリ十日内ニ裁判所ニ出テサル時又ハ一度裁判所ニ出テ又ハ召捕ヘラレタル後逃亡シタル時ハ重罪裁判所ノ上席人又其アラサル時ハ初告裁判所ノ上席人又其アラサル時ハ初告裁判所ノ裁判役中ニテ最モ先キニ職ニ任セラレタル裁判役ヨリ其被告人十日内ニ出席ス可シ若シ出席セサル時ハ法律違背ノ罪アルニ因リ其民權ヲ奪ヒ抗侮吟味ノ時間其財産ヲ官ニ預カリテ其時間總テ裁判所ニ訴出スルヲ禁シ且如何ナル人タルヲ問ハス其被告人ノ居所ヲ知ル者アラハ之ヲ申出ツ可キ旨ヲ言渡ス可シ

其言渡書ニハ被告人ノ申立テラレシ罪犯ト其召捕ヲ爲ス可キ旨トヲ記ス可シ

第四百六十六條 其言渡書ハ次ノ日曜日ニ喇叭ヲ吹キ又ハ太鼓ヲ鳴

ラシテ之ヲ公布シ且其言渡書ヲ被告人住所ノ門ト邑ノ官署ノ門ト

重罪裁判所ノ訟庭ノ入口トニ貼附ス可シ

檢事長又ハ其代役ハ其被告人住所ノ官地及ヒ記録稅官署ノ支配人

ニ其言渡書ヲ送ル可シ

第四百六十七條 十日ノ期限ノ後ニ至リ抗傳者ノ裁判言渡ヲ爲ス可

シ

第四百六十八條 代言人又ハ代書師ハ抗傳シタル被告人ノ權利ヲ保

護スル爲メニ出席スルヲ得ス

若シ被告人歐羅巴ニ在ル佛蘭西ノ領地外ニアル時又ハ被告人裁判

所ニ出ルヲ能ハサル時ハ其親族又ハ朋友ヨリ其被告人ノ爲メニ辨

解ヲ爲シ且其辨解スル所ノ正當ナル旨ヲ述フ可シ

第四百六十九條 重罪裁判所ニテ被告人ノ親族又ハ朋友ノ辨解スル

所ヲ正當ナリトスル時ハ其模様ト其居ル地ノ遠近トニ從ヒ別段定

メタル時間被告人ヲ抗傳ノ儘裁判スルヲ延ハシ其財産ヲ官ニ預

カルヲモ亦之ヲ延ハスヲ言渡ス可シ

第四百七十條 前ニ記スル場合ノ外ハ重罪取調局ヨリ被告人ヲ重罪

裁判所ニ移ス言渡書抗傳者ヲシテ出席セシメントスル言渡書第六百

十五條ニ記 其言渡書ヲ公布シ及ヒ貼附シタル旨ヲ証スル調書ヲ直

ニ讀上ル可シ

其讀上ヲ爲シタル後重罪裁判所ニテ檢事長又ハ其代役ノ申立ヲ聽

キタル上抗傳ノ儘言渡ヲ爲ス可シ

若シ吟味手續ノ中ニ法律ニ反キタル事アル時ハ重罪裁判所ニテ之

ヲ取消シ其取消ト爲シタル手續ヨリ後ノ總テノ手續ヲ更ニ改メテ

爲ス可キヲ言渡ス可シ

吟味ノ手續法律ニ反キタル事ナキ時ハ重罪裁判所ニテ重罪告訴狀ニ付キ裁判言渡ヲ爲シ且民事原告人ノ求ムル損失ノ償ヲ言渡ス可シ但シ此場合ニ於テハ陪審ヲシテ立會及ヒ決斷ヲ爲サシムルコトナカル可シ

第四百七十一條 抗傳者刑ヲ言渡サレシ時ハ其言渡ノ如ク執行罪案公示

フ云フタル時ヨリ其財産ヲ失踪者ノ財産ト同視シテ之ヲ支配シ被告入抗傳シテ受ケタル刑ノ言渡ヲ取消シ得可キ期限ノ終リタルニ因リ其刑ノ言渡ノ確的トナリタル後其相續人ニ其財産支配ノ算計ヲ爲ス可シ民法第二十八條見合

第四百七十二條 (千八百五十年一月二日左ノ如ク改ム)抗傳者ノ刑ノ言渡書ハ其言渡ヨリ八日內ニ檢事長又ハ其代役ノ申立ニテ抗傳者最終ノ住所ノ州内ノ新聞紙ニ記入ス可シ○又其言渡書ハ抗傳者最

終ノ住所ノ門及ヒ罪犯ヲ行フタル郡ノ首邑ノ官署ノ門並ニ重罪裁判所ノ訟庭ノ入口ニ貼附シテ公示ス可シ○又同上ノ期限内ニ其言渡書ノ寫ヲ抗傳者住所ノ官地及ヒ記録稅官署ノ支配人ニ送ル可シ

○法律上ニテ抗傳者ノ受ケシ刑ノ言渡書ヲ公示シタルヨリ生ス可キコトヲ定メタル諸件ハ此條ニ記スル公示ノ式ヲ行ヒ終リシ旨ヲ証スル最終ノ調査ヲ記シタル日ヨリ以來其効アリトス民法第二十六條見合

第四百七十三條 檢事長及ヒ民事ノ原告人ノ外ハ被告人抗傳シテ受ケタル言渡ヲ取消サント覆審院ニ願出ツ可カラズ但シ民事ノ原告人ハ其民事ニ管シタル條件ノミニ付キ其取消ヲ願フコトヲ得可シ

第四百七十四條 如何ナル場合ニ於テモ共ニ訴ヘラレタル被告人中ノ一人抗傳スルト雖モ出席シタル他ノ被告人ノ吟味ヲ當然遅延ス可カラズ

裁判所ニ於テハ出席シタル被告人ノ裁判言渡ヲ爲シタル後嘗テ犯罪ノ憑據トシテ書記局ニ納メタル諸物件ヲ其所有者又ハ其代權人ノ願ニ從ヒ還ス可キトテ言渡スヲ得可シ○又別段ノ道理アル時ハ裁判所ニ於テ其所有者又ハ其代權人ヲシテ入用次第早速其物件ヲ再ヒ裁判所ニ出ス可キノ盟約ヲ爲サシメタル上ニテ其物件ヲ還ス可キトテ言渡スヲ得可シ

其物件ヲ還ス前ニ書記官其物件ノ模様ヲ調書ニ記ス可シ若シ書記官其調書ヲ記セサル時ハ百「フラン」ノ罰金ヲ言渡サル可シ

第四百七十五條 抗傳者ノ妻子父母等貧困ナル時ハ其財産ヲ官ニ預カル時間其扶助料ヲ給スルヲ得可シ

其扶助料ノ高ハ行政官之ヲ定ム可シ

第四百七十六條 抗傳シテ刑ヲ言渡サレシ被告人其刑ノ期滿免除ノ

期限ニ至ラサル中ニ召捕ヘラレ又ハ自訴スル時ハ其刑ノ言渡並ニ之ヲ召捕フ可キトテ言渡シ又ハ其出席ヲ爲ス可キトテ言渡シタルヨリ以後ノ手續ヲ當然取消シテ通常ノ規則ニ循ヒ更ニ吟味ノ手續ヲ爲ス可シ

然レモ抗傳シテ受クタル刑ノ言渡ニ因リ准死ノ罰ヲ受ク可キ時其被告人言渡書ヲ公示シタル日ヨリ五年ノ後ニ至リ召捕ヘラレ又ハ自訴シタルニ於テハ其五年ノ期限ニ至リシ日ヨリ被告人ノ裁判所ニ出ル迄ノ時間准死ヨリ生ス可キ諸件ノ効アル「民法」第三十條ニ記スル所ノ如クナリトス

第四百七十七條 若シ前條ノ場合ニ於テ事故アリテ証人ヲ吟味ノ席ニ出テシムル「能ハサル時ハ其証人ノ申述書ト同罪ヲ犯セシ他ノ被告人ノ返答書トシ吟味ノ席ニテ讀上ク可シ又裁判所ノ上席人罪

犯ノ事並ニ被告人ノ事ニ付キ事實ヲ明瞭ナラシム可シト思料スル所ノ證書類モ亦之ヲ吟味ノ席ニテ讀上ク可シ

第四百七十八條 抗傳者後ニ裁判所ニ出テ重罪ノ告訴ヲ免レタル時即チ無罪トシト雖モ其抗傳ニ因リ生ジタル裁判所費用ヲ擔當言渡チ得ルヲ云フト雖モ其抗傳ニ因リ生ジタル裁判所費用ヲ擔當ス可キノ言渡チ受ク可シ

第三章 裁判役ノ其職務外ニテ犯シタル罪及ヒ其職務ヲ行フニ當リ犯シタル罪

第一款 裁判役ノ其職務外ニテ犯シタル罪ヲ告訴シ及ヒ吟味スル事

第四百七十九條 治安裁判役輕罪裁判所即チ初告ノ裁判所又ハ此等ノ裁判所ニテ檢察官ノ職ヲ行フ官吏其職務外ニテ懲治刑ニ處セラレ可キ輕罪ヲ犯セシノ申立チ受ケル時ハ控訴院ノ檢察長其被告人

ヲ控訴院ニ呼出シテ裁判言渡チ爲サシム可シ但シ其言渡ハ之ヲ控訴スルコトヲ許サズ

第四百八十條 若シ又前條ニ記スル官吏施設又ハ加辱ノ刑ニ處セラレ可キ重罪ヲ犯セシノ申立チ受ケル時ハ控訴院ノ檢察長司法警察ノ職ヲ行フ可キ官吏ヲ指定シテ控訴院ノ上席人下吟味掛リ裁判役ノ職ヲ行フ可キ官吏ヲ指定ス可シ

第四百八十一條 若シ控訴院ノ裁判役又ハ控訴院ニテ檢察官ノ職ヲ行フ官吏其職務外ニテ輕罪又ハ重罪ヲ犯シタルノ申立チ受ケル時ハ其申立チ聽キタル官吏前條ニ記シタル如ク遲延ナク其下吟味ヲ爲サシムル間ニ其中立書ノ寫ヲ裁判事務宰相ニ送呈シ並ニ其吟味ニ管シタル書類ノ寫ヲ其宰相ニ送呈ス可シ

第四百八十二條 裁判事務宰相ハ其書類ヲ覆審院ニ送り覆審院ニテ

被告人ニ罪アリト思フ時ハ其吟味ヲ輕罪裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ニ移ス可シ但シ其輕罪裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ハ被告人ノ在リシ控訴院ノ管轄地外ノ者タル可シ

又被告人重罪ヲ犯シタリト告シ可キ時ハ覆審院ヨリ其被告人ノ在リシ以外ノ控訴院ノ重罪取調局ニ其吟味ヲ移ス可シ

○第二款 覆審院控訴院重罪裁判所ノ裁判役ヲ除クノ外總テ

其他ノ裁判所ノ裁判役全員又ハ一員其職務ヲ行フニ付キ

職務冒瀆ノ罪及ヒ其他ノ輕罪又ハ重罪ヲ犯シタルヲ告訴

シ及ヒ吟味スル事

第四百八十三條 若シ治安裁判役即チ註誤商法裁判所ノ裁判役司法

警察ノ官吏輕罪裁判所ノ裁判役又ハ此等ノ裁判所ニテ檢察官ノ職

ヲ行フ官吏其職務ヲ行フニ付キ懲治刑ニ處ス可キ輕罪ヲ犯シタル

ノ申立ヲ受ケル時ハ第四百七十九條ニ記スル如ク其罪ヲ告訴シテ之ヲ裁判ス可シ

第四百八十四條 若シ前條ニ記シタル官吏職務冒瀆ノ重罪又ハ更ニ

重キ罪ヲ犯シタルノ申立ヲ受ケル時ハ控訴院ノ上席人通常下吟味

掛リ裁判役ノ行フ職務ヲ行ヒ控訴院ノ檢察長通常檢察ノ行フ職務

ヲ行フ可シ但シ此等ノ官吏ハ別段己レニ代テ職ヲ行フ可キ官吏ヲ指

定ムルヲ得可シ

其上席人及ヒ檢察長ヨリ別段己レニ代ル可キ官吏ヲ指定シタル間罪

犯ニ管シタル物件アル時ハ總テノ司法警察官吏其物件ニ付テノ證

ヲ立ツルヲ得可シ但シ其他ノ吟味手續ハ治罪法ノ一般ノ規則ニ

循フ可シ

第四百八十五條 若シ商法裁判所或ハ輕罪裁判所ノ裁判役全員其職

務ヲ行フニ付キ職務冒瀆以上ノ重罪ヲ犯シタルノ申立ヲ受ケル時
又ハ控訴院ノ裁判役一員或ハ數員若クハ控訴院ノ檢事長或ハ其代
役其職務ヲ行フニ付キ職務冒瀆以上ノ重罪ヲ犯シタルノ申立ヲ受
ケル時ハ後ノ數條ニ記スル如ク處置ス可シ

第四百八十六條 前條ノ重罪犯ハ之ヲ裁判事務宰相ニ申立テ其宰相
被告人ニ重罪アリト思料スル時ハ覆審院ノ檢事長ニ其申立ニ從ヒ
重罪ヲ告訴ス可キコトヲ命ズ可シ
又全上ノ重罪犯ノ爲メ損害ヲ蒙リタルト述フル者ハ直チニ其重罪
犯ヲ覆審院ニ申立ルコトヲ得可シ但シ此事ヲ爲スニハ其申立人裁判
所ノ裁判役全員或ハ一員ヲ相手方ト爲シテ損害ノ償ヲ得ント訴フ
ル場合又ハ既ニ覆審院ニ上告シタル訴ニ附帶シテ其重罪ヲ申立ル
場合ニ限ル可シ

第四百八十七條 覆審院ノ檢事長裁判事務宰相ヨリ受取リタル書類
又ハ申立人ヨリ直チニ受取リタル書類ニ因リ事情ヲ明瞭ニ知得ス
ルコト能ハスト思フ時ハ其檢事長覆審院ノ上席人ニ之ヲ申立テ其上
席人裁判役一員ヲシテ覆審院所在ノ地ニ於テ證人ノ申述ヲ聽カシ
メ又ハ其他ノ吟味手續ヲ爲サシム可シ

第四百八十八條 若シ覆審院所在ノ地外ニ於テ証人ノ申述ヲ聽キ又
ハ其他ノ吟味手續ヲ爲ス可キ時ハ覆審院ノ上席人被告人タル裁判
役全員又ハ一員ノ在ル州又ハ郡外ノ下吟味掛リ裁判役ニ任シテ此
等ノ諸事ヲ爲サシム可シ

第四百八十九條 前條ニ記シタル下吟味掛リ裁判役ハ証人ノ申述ヲ
聽キ且其他己レノ任セラシタル吟味ノ手續ヲ爲シ終リタル後調書
及ヒ其他ノ書類ニ封印ヲ爲シテ覆審院ノ上席人ニ送ル可シ

第四百九十條 覆審院ノ上席人ハ裁判事務宰相ヨリ受取リタル書類
又ハ申立人ヨリ差出シタル書類又ハ其後得タル書類 下吟味ヲ爲サ
ラズ云々 檢視シタル上ニテ被告人ヲ禁錮ス可シト思フ時ハ禁錮狀ヲ
出ス可シ

其禁錮狀ニハ被告人ヲ入レ置ク可キ留置場ヲ記ス可シ

第四百九十一條 覆審院ノ上席人ハ直チニ其吟味ニ管スル書類ヲ檢
事長ニ送り檢事長五日內ニ覆審院中ノ裁判言渡取消局ニ被告人ノ
犯罪申立ヲ記スル求刑書ヲ出ス可シ

第四百九十二條 犯罪ノ申立書ヲ裁判言渡取消局ニ出ス前ニ被告人
ヲ禁錮シタルト否トヲ問ハズ其局ニテ他ノ事務ヲ暫ク差置キ其犯
罪ノ申立ヲ取上ク可キヤ否ヲ裁判ス可シ

其局ニテ犯罪申立ヲ棄却スル時ハ被告人ヲ赦宥ス可キヲ言渡ス

可シ

其局ニテ犯罪申立ヲ取上タル時ハ被告人タル裁判役全員又ハ一員
ノ吟味ヲ覆審院ノ民事局ニ移シ民事局ニテ其被告人重罪ヲ犯シタ
リト告ク可キヤ否ヲ裁判ス可シ

第四百九十三條 既ニ覆審院ニ訴ヘ出シタル事件ニ附帶シテ全上ノ
犯罪申立ヲ爲サントスル時ハ是迄ノ訴ヲ管轄スル局ニ其申立ヲ爲
ス可シ但シ其局刑事局又ハ裁判言渡取消局ナル時ハ其申立ヲ取上
ケタル上ニテ其吟味ヲ民事局ニ移シ又是迄ノ訴ヲ管轄スル局民事
局ナル時ハ其吟味ヲ裁判言渡取消局ニ移ス可シ

第四百九十四條 覆審院中ノ一局ニテ裁判役ニ對シ損失ノ償ヲ要ム
ル訴又ハ總テ其他ノ訴ヲ吟味スル時主タル申立ト附帶ノ申立トヲ
問ハズ裁判役ノ犯罪申立書ヲ差出ス者ナシト雖モ其局ニテ第四百

七十九條ニ記スル裁判役全員又ハ一員ニ罪犯アリト知得シタルニ於テハ其局ニテ前條ニ循ヒ其罪犯ノ吟味ヲ他局ニ移シ爲サシム可キトテ公務ヲ以テ言渡ス可シ

第四百九十五條 若シ覆審院ノ諸局合同シテ訴ヲ吟味スル時前條ニ記スル如シ裁判役ノ罪犯ヲ知リタルニ於テハ民事局ニ其吟味ヲ移シ爲サシム可シ

第四百九十六條 如何ナル場合ニ於テモ犯罪申立書ニ因ルト否トモ管セズ總テ全上ノ罪犯吟味ヲ爲ス可キ局ニ於テ被告人重罪ヲ犯シタリト告シ可キヤ否ヲ裁斷ス可シ

其局ノ上席人ハ通常下吟味掛リ裁判役ノ爲ス可キ職務ヲ行フ可シ
第四百九十七條 前條ニ記スル局ノ上席人ハ証人ノ申述ヲ聽ク事及ヒ被告人ヲ問ヒ事ヲ別段指定ノタル下吟味掛リ裁判役ニ任カス

イテ得可シ但シ其下吟味掛リ裁判役ハ被告人ノ在リシ州又ハ郡外ノ者タル可シ

第四百九十八條 上席人ヨリ渡ス所ノ收監狀ニハ被告人ヲ入ル可キ留置場ヲ指定シ可シ

第四百九十九條 前數條ニ記スル罪犯ノ吟味ヲ爲ス覆審院中ノ一局ハ被告人重罪ヲ犯シタリト告シ可キヤ否ヲ評議ス可シ但シ其評議ハ公クニ爲ス可カラズ又其裁判役ノ員數ハ偶數タル可カラズ
其裁判役中ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告シルヲ可トセサル者半ハ以上ナル時ハ犯罪申立ヲ棄却スル言渡ヲ爲シ檢事長被告人ヲ赦宥セシム可シ

第五百條 裁判役中ニテ被告人重罪ヲ犯シタリト告シルヲ可ナリトスル者半ハ以上ナル時ハ其旨ヲ言渡ス可シ但シ其言渡書ニハ被告

人召捕ノ言渡ヲ附記ス可シ

此場合ニ於テハ其言渡書ニ指定メタル重罪裁判所附ノ留置場ニ其被告人ヲ移ス可シ

第五百一條 前數條ニ記スル如ク覆審院コテ爲シタル下吟味ノ手續

ハ法式ニ背キタルニ付キ之ヲ取消サント訴フ可カラズ

其吟味ノ手續ハ被告人タル裁判役ト共ニ罪ヲ犯シタル者ニ通シ用

フ可シ但シ其者裁判所ノ官吏ニ非サル時ト雖モ亦同一ナリトス

第五百二條 其他治罪法中ニテ此章中ニ記スル規則ト抵觸セサル箇

條ハ裁判役罪犯ノ吟味ニ通シ用フ可シ

第五百三條 覆審院中ノ一局ヨリ被告人ヲ重罪裁判所ニ移シタル後

被告人重罪裁判所ノ裁判言渡ヲ取消サント覆審院ニ願出シタル時

覆審院中ノ刑事局ニ當テ其被告人重罪ヲ犯シタリト告シ可キ旨ヲ

述ヘシ裁判役アルニ於テハ其裁判役其取消願ヲ吟味スル席ニ參ス可カラズ 第二百五十七條見合

然レモ再度取消願ヲ爲シ覆審院ノ各局合同シテ其願ヲ吟味スル時

ハ如何ナル裁判役ト雖モ其吟味ノ席ニ參スルヲ得可シ

○第四章 官署ノ權ヲ慢侮スル罪

第五百四條 訟庭又ハ其他公ケニ吟味ノ手續ヲ爲ス場所ニ於テ來聽

スル者稱贊誹謗ノ聲ヲ發シ又ハ如何ナル方法ヲ問ハズ喧噪ヲ生ス

ルヲアル時ハ其裁判所ノ上席人又ハ裁判役其者ヲ逐出サシム可シ

若シ其者其命ニ抗スル時又ハ一度裁判所ヲ出テタル後再ヒ入り來

ル時ハ上席人又ハ裁判役之ヲ召捕ヘテ裁判所附ノ留置場ニ入ル可

キヲ言渡シ其言渡ヲ調書ニ記ス可シ但シ其留置場ノ監守人ハ其

調書ヲ見タル上ニテ其犯人ヲ受取り二十四時間留置場ニ入レ置ク

可シ

第五百五條 前條ニ記シタル喧噪ニ附加シテ懲治刑ノ輕罪又ハ警察違戻ノ刑ニ註誤ニ處ス可キ罪犯シタル時ハ裁判所ニテ其罪犯ヲ證シタル上直ニ其席ニテ刑ヲ言渡ス可シ但シ其言渡ヲ控訴シ得可キト否トハ左ノ如シ

如何ナル裁判所ヨリ言渡シタル時問ハス警察違戻ノ刑ノ言渡ハ之ヲ控訴ス可カラズ

又懲治刑ノ言渡ハ輕罪裁判所又ハ註誤裁判役ヨリ爲シタル時之ヲ控訴スルヲ得可シ

第五百六條 輕罪裁判所又ハ註誤裁判所ニ於テ重罪ヲ犯シタル者アル時ハ此等ノ裁判所ニテ其犯人ヲ召捕ヘシメ且其罪犯ノ調書ヲ記シタル後書類ト犯人トヲ重罪管轄ノ裁判所ニ送ル可シ

第五百七條 覆審院控訴院重罪裁判所ノ吟味ノ席ニテ現ニ重罪ヲ犯シタル時ハ此等ノ裁判所ニテ直ニ其裁判ヲ言渡ス可シ

此等ノ裁判所ニ於テハ證人ト犯人トヲ問糺シ及ヒ犯人ノ自カラ撰ミタル代理人或ハ上席人ヨリ犯人ノ爲メニ指定シタル代理人ノ申述ヲ聽キ公ケニ其罪犯ヲ証シ且檢事長又ハ其代役ノ申立ヲ聽キタル上ニテ其犯人ヲ刑ニ處スル言渡ヲ爲ス可シ但シ其言渡書ニハ其言渡ノ趣意ヲ附記ス可シ

第五百八條 前條ノ場合ニ於テ吟味ノ席ニアル裁判役五員又ハ六員

タル時ハ四員以上ノ投言アルニ非サレハ刑ヲ言渡ス可カラズ
又裁判役七員タル時ハ五員以上ノ投言アルニ非サレハ刑ヲ言渡ス可カラズ

又裁判役八員以上タル時ハ其全員中四分三以上ノ投言アルニ非サ

シハ刑ヲ言渡ス可カラズ若シ缺數アラハ罪ヲ赦宥スル投言中ニ加
フ可シ

第五百九條 州長郡長邑長邑長ノ輔佐行政警察官吏司法警察官吏其
公務ヲ行フニ當リ罪ヲ犯ス者アル時ハ第五百四條ニ記スル如ク警
察ノ職務ヲ行フ可シ但シ此等ノ官吏ハ犯人ヲ召捕ヘタル後罪犯ノ
調書ヲ記シ其調書ト犯人トヲ管轄ノ裁判所ニ送ル可シ

○第五章 重罪輕罪註誤ニ付キ皇族及ヒ高貴ナル官吏ノ述フル
證ヲ聽ク方法

第五百十條 皇族高貴ノ職位ニ在ル者裁判事務宰相ハ陪審ノ面前ニ
於テ辨論ヲ爲ス場合ト雖モ証人トシテ之ヲ裁判所ニ呼出ス可カラ
ズ但シ皇帝訴ニ管スル者ノ願ニ因リ又ハ裁判事務宰相ノ申立ニ因
リ別段命令拜下シテ此等ノ者前ニ記列シ裁判所ニ呼出シ証ヲ述

ヘシム可キコトヲ命シタル時ハ格別ナリトス

第五百十一條 皇帝ノ命令アル時ノ外前條ニ記セシ數人控訴院所在
ノ地ニ現ニ在ル時ハ其控訴院ノ上席人其人ノ述フル所ノ証ヲ聽取
テ之ヲ書面ニ記ス可シ又其人控訴院所在ノ地ニ在ラサル時ハ其現
ニ在ル所ノ郡ノ初告裁判所ノ上席人其証ヲ聽取テ之ヲ書面ニ記ス
可シ

犯罪人ヲ吟味スル裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ハ全上ノ上席人ヲ
シテ証ノ申述ヲ聽カシムル爲メ罪犯ノ事件並ニ問目ヲ記シタル箇
條書ヲ其上席人ニ送ル可シ
其上席人ハ証ノ申述ヲ聽ク爲メ第一項ニ記スル各人ノ住所ニ至ル
可シ

第五百十二條 上席人ノ記シタル証據聞取書ハ直チニ之ヲ其上席人

ノ在ル裁判所ノ書記局ニ出シ又ハ其証ヲ聽クヲ求メシ裁判所ノ
書記局或ハ其旨ヲ求メシ下吟味掛リ裁判役ノ在ル裁判所ノ書記局
ニ封印シテ之ヲ送リ此等ノ裁判所ノ書記局ヨリ遅延ナク其書ヲ檢
察官ニ送ル可シ
其証據聞取書ハ陪審ノ面前ニテ吟味ヲ爲ス時公ケニ陪審ニ讀聞カ
セ被告人及ヒ証人等ヲシテ之ヲ辨論セシム可シ若シ此規則ニ背ク
時ハ其聞取書ノ効ナカル可シ

第五百十三條 若シ皇帝ヨリ第五百十條ニ記スル各人ヲ陪審ノ面前
ニ呼出ス可キヲ命シタル時ハ其命令書ニ全上ノ各人証ヲ述フル
ニ付テノ法式ヲ定ム可シ
第五百十四條 裁判事務宰相ヲ除ク外總テノ宰相上等ノ官吏行政
ノ權ヲ任セラシマル參議官現ニ奉職スル將帥外國政府ニ派出シタ

ル第一等使節及ヒ其他ノ辨理公使ノ述フル証ヲ聽クニ付テハ左ノ
如シタル可シ
此等ノ官吏ノ現ニ住スル地又ハ其偶然居合セタル地ノ重罪裁判所
又ハ此等ノ地ノ下吟味掛リ裁判役ノ在ル裁判所ニ於テ其証ヲ聽ク
ニ必要ナル時ハ此等ノ官吏通常ノ式ニ循ヒ其証ヲ述フ可シ 裁判所
ニテ平常ノ証人ノ如ク
証ヲ述フ可キヲ云フ
又全上ノ地ヲ管轄セサル裁判所ニ於テ其証ヲ聽クニ必要ナル時陪
審ノ面前ニテ証ヲ述ヘシムルニ及ハサル場合ニ於テハ其裁判所ノ
上席人又ハ下吟味掛リ裁判役ヨリ全上ノ官吏ノ在ル地ヲ管轄スル
裁判所ノ上席人又ハ下吟味掛リ裁判役ニ証ヲ聽取ル可キ罪犯ノ事
件並ニ同日ヲ記シタル箇條書ヲ送リテ其証ヲ聽カシム可シ
若シ外國政府ニ派出シタル辨理公使ノ証ヲ聽ク可キ時ハ前項ニ記

スル箇條書ヲ裁判事務宰相ニ差出シ其宰相ヨリ辨理公使所在ノ地ニ其箇條書ヲ送り且其証ヲ聽ク可キ人ヲ指定ム可シ

第五百十五條 前條ニ記シタル箇條書ヲ受取リタル上席人又ハ下吟味掛リ裁判役ハ全上ノ官吏ヲ己レノ面前ニ來ラシメ其述フル所ノ証ヲ書面ニ記ス可シ

第五百十六條 其書面ハ之ニ封印ヲ爲シテ其証ヲ要スル裁判所ノ書記局ニ送ル可キト並ニ之ヲ檢察官ニ送りタル後ニ讀上ク可キト第五百十二條ニ記スル如クナル可シ若シ此規則ニ背ク時ハ其書面ノ効ナカル可シ

第五百十七條 第五百十四條ニ記スル官吏其住スル所ノ地又ハ其偶然居合セタル地ヲ管轄サセル裁判所ノ陪審ノ面前ニテ證ヲ述フル爲メ其裁判所ニ呼出テ受シル時ハ皇帝ヨリ此等ノ官吏其裁判所ニ

出ルヲ免ルヌ可キノ令ヲ下スヲ得可シ

此場合ニ於テハ全上ノ官吏ノ述フル証ヲ書面ニ記ス可シ且第五百十四條第五百十五條第五百十六條ノ規則ヲ通シ用フ可シ

第六章 刑ヲ言渡サレシ後逃亡シテ召捕ヘラレシ者ノ人違ヒ

ニ非サルヲ認ムル事

第五百十八條 刑ヲ言渡サレシ後逃亡シテ召捕ヘラレタル者ノ人違ヒ

ヒニ非サルヲ認ムルコトハ其刑ヲ言渡セシ裁判所ニテ之ヲ爲ス可シ又流刑或ハ追放ノ刑ニ處セラレシ者其在ル可キ地外ニ出テ召捕ヘラレタル時モ亦前項ニ等シク其刑ヲ言渡セシ裁判所ニテ其人違ヒニ非サルヲ認メ且其罪外ニ出ル罪ニ相當ナル刑ヲ言渡ス可シ

第十七條第三十三條見合

第五百十九條 裁判所ニテハ檢事長ノ求メニテ呼出シタル証人ト召

捕テレタル者ノ求メヨテ呼出シタル証人トテ問訊シタル上陪審ノ
立會ナリシテ前條ノ言渡人違ヒニ非サルヲ爲ス可シ
其言渡ヲ爲スニハ公ク吟味ヲ爲シ召捕ラレタル者其席ニ出ツ可
シ若シ此規則ニ背ク時ハ其言渡ノ効ナカル可シ

第五百二十條 檢事長及ヒ召捕ヘラレタル者ハ人違ヒニ非サルヲ
認ムルニ付テ言渡ヲ取消サント覆審院ニ求ムルヲ得可シ但シ
其取消ヲ求ムルニ付テハ治罪法ニ記スル一般ノ法式ト定期ト口循
フ可シ

○第七章 裁判所ノ書類又ハ裁判言渡書ヲ失ヒシ時其處置ヲ爲
ス方法

第五百二十一條 火災洪水又ハ其他非常ノ事ニ因リ未ダ現ニ執行ハ
サル重罪又ハ輕罪ノ裁判言渡書ノ正本ヲ失フタル時又ハ未決ノ吟

味手續ノ書類ノ正本ヲ失フタル時之ヲ取戻スヲ能ハサルニ於テハ
後ノ數條ニ記スル如ク所置ス可シ

第五百二十二條 裁判言渡書ノ公正ナル副本アル時ハ之ヲ正本ト看
做シ總テノ裁判言渡書ヲ預カル場所 裁判所ノ書ニ其副本ヲ納ム可
シ

之ヲ爲メ總テ其公正ナル副本ヲ預カル官吏又ハ其他ノ者其言渡ヲ
爲セシ裁判所ノ上席人ノ命令書ニ循ヒ其副本ヲ其裁判所ノ書記局
ニ出ス可シ若シ之ヲ出サ、ル時ハ召捕ヘラル可シ

其公正ノ副本ヲ預カル者其上席人ノ命令書ヲ示ス時ハ其副本ニ管
係アル者ニ對シ既ニ之ヲ裁判所ノ書記局ニ差出シタルノ証トス可
シ
其副本ヲ預リ人ハ之ヲ書記局ニ出シタル上無税ニテ其寫ヲ受取ル

一ヲ得可シ

第五百二十三條 若シ重罪ノ裁判言渡書ノ正本ヲ失ヒ且其公正ノ副本アリタル時陪審ノ決斷書ノ正本又ハ公正ノ副本アルコト於テハ其決斷書ニ據リ更ニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第五百二十四條 若シ前條ノ場合ニ於テ陪審ノ決斷書ヲ失フタル時又ハ陪審ノ立會ナクシテ裁判言渡ヲ爲シタル時輕罪ニ管其吟味手續ノ書面ヲモ亦失フタルニ於テハ正本ヲモ公正ノ副本ヲモ失フタル書面ヲ記セシヨリ以後ノ吟味ノ手續ヲ更ニ爲ス可シ

○第五卷 二箇ノ裁判所ノ管轄相觸ル、時其中ノ一箇ニ定ム可キ訴及ヒ此裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟味ヲ移ス訴(千八百八年十二

月十四日決定同月二十日布告)

○第一章 二箇ノ裁判所ノ管轄相觸ル、時其中ノ一箇ニ定ム可

キ訴

第五百二十五條 二箇ノ裁判所ノ管轄相觸ル、時其中ノ一箇ニ定ム

可キ訴ハ願書ヲ差出シタル上ニテ急速吟味ノ法式ヲ以テ之ヲ吟味シ且之ヲ裁判ス可シ(訴訟法第三百六

第五百二十六條 二箇ノ控訴院重罪裁判所輕罪裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役二員同時ニ一箇ノ輕重罪又ハ相附帶シタル輕重罪又ハ一箇ノ註誤ノ吟味ヲ爲シ始メタル時此等ノ裁判所又ハ裁判役互ニ管轄ヲ受ケサル者タルニ於テハ覆審院ニテ其中ノ一ニ定ム可シ

第五百二十七條 又海陸軍ノ裁判所陸軍警察官吏及ヒ其他總テ別段ノ裁判所ト控訴院重罪裁判所輕罪裁判所註誤裁判所下吟味掛リ裁

判役ト同時ニ一箇ノ輕重罪又ハ相附帶シタル輕重罪又ハ一箇ノ註
誤ヲ吟味シ始メタル時ハ亦覆審院ニテ其中ノ一ヲ定ム可シ

第五百二十八條 覆審院ノ刑事局ニテハ願書並ニ諸書類ヲ檢視シタ
ル上ニテ其願ノ旨ヲ相手方ニ告知ス可キヲ言渡シ又ハ直ニニ確
定ノ裁判言渡ヲ爲ス可シ但シ直ニニ確定ノ裁判言渡ヲ爲シタル時
ハ相手方其言渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ

第五百二十九條 被告人又ハ民事原告人ヨリ數箇ノ裁判所中其一ニ
定ム可キヲ願出シ覆審院ニテ其願ノ旨ヲ相手方ニ告知ス可キヲ
言渡シタル時ハ其言渡書ヲ以テ雙方ノ裁判所ノ檢察官ニ吟味ニ
管シタル書類ト管轄抵觸ノ事ニ付テノ其見込書トシ差出ス可キヲ
命ス可シ

第五百三十條 一方ノ裁判所ノ檢察官ヨリ二箇ノ裁判所中其一ニ定

ム可キヲ願出シ覆審院ニテ其願ノ旨ヲ相手方ニ告知ス可
キヲ言渡シタル時ハ其言渡書ヲ以テ他ノ一方ノ裁判所ノ檢察官

ニ諸書類ト其見込書トシ差出ス可キヲ命ス可シ

第五百三十一條 二箇ノ裁判所中一ニ定メントスル願ヲ相手方ニ告

知ヒシムル覆審院ノ言渡書ニハ管轄抵觸ノ生スル原由ヲ簡略ニ記
シ且路程ノ遠近ニ從ヒ諸書類ト見込書前二條トシ覆審院ノ書記

局ニ差出ス可キ期限ヲ定ム可シ

其言渡書ヲ相手方ニ送リタル時ハ雙方裁判所ノ裁判言渡ヲ當然止

ム可シ又重罪ノ訴ニ付テハ被告人重罪ヲ犯シタリト告ク可キノ言

渡ヲ爲スヲ止ム可シ若シ既ニ其言渡ヲ爲シタルニ於テハ重罪裁

判所ニテ陪審ヲ撰ムヲ止ム可シ然レモ原告及ヒ被告雙方ノ權利

ヲ保護スル處置並ニ下吟味ノ手續ハ之ヲ止ム可カラス

被告人又ハ民事原告人ハ此篇第三卷第二章 覆審院ニ裁判言渡ノ
記シタル如ク管轄抵觸ノ事ニ付テハ其辨論ノ憑據書ヲ差出スルヲ
得可シ

第五百三十二條 願書ヲ出シタル上覆審院ニテ直ニ其願ノ裁判言
渡ヲ爲シタル時ハ覆審院ノ檢事長ヨリ其言渡書ヲ裁判事務宰相ニ
出シ宰相ヨリ之ヲ管轄ヲ罷ラシメ裁判所ノ檢察官ニ送ル可シ
其言渡書ハ被告人又ハ民事ノ原告人ニモ亦送達ス可シ

第五百三十三條 被告人又ハ民事ノ原告人ハ其言渡書ノ送達ヲ得
ル時ヨリ三日内ニ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ但シ其故
障ヲ述フル法式ハ此篇第三卷第二章ニ記スル所ノ如クタル可シ
第五百三十四條 前條ニ記スル如ク故障ヲ述ヘタル時ハ第五百三十
一條ニ記スル如ク裁判所ノ裁判言渡ヲ當然止ム可シ

第五百三十五條 裁判所附ノ留置場ニ入ラサル被告人及ヒ民事ノ原
告人ハ管轄ノ相觸レシ雙方裁判所中ノ一方所在ノ地ニ預メ住所ヲ
擇ミ又ハ第五百三十三條ニ記スル期限内ニ住所ヲ擇マサルハ故障
ヲ述フルヲ許サズ

若シ此ノ如ク別段其住所ヲ擇マサルニ於テハ願人ヨリ其願ノ旨ヲ
相手方ニ告知セスト雖モ相手方之ヲ以テ口實ト爲シ其願ヲ取消サ
ント述フルヲ得ズ

第五百三十六條 覆審院ニテハ管轄抵觸ノ事ヲ裁判セシ上管轄ヲ罷
ラシメタル裁判所ニ於テ是迄爲シタル吟味手續ノ法式ニ協フタルヤ
否ヲ裁判ス可シ

第五百三十七條 覆審院ニテ二箇ノ裁判所中ノ一ニ定メントスル願
ヲ受ケタル上其願ノ旨ヲ相手方ニ告知ス可キヲ言渡シ其言渡書

キ法式ニ循ヒ相手方ニ送達シタル時ハ管轄抵觸ノ裁判言渡ニ付キ相手方ヨリ故障ヲ述フルコト得ヌ

第五百三十八條 二箇ノ裁判所中ノ一ニ定メントスル願ノ旨ヲ相手

方ニ告知ス可キコトヲ言渡シタル上ト相手方ヨリ故障ヲ申述ヘタル

上 第五百三十 三條ノ場合トテ問ハス覆審院ニテ爲シタル裁判言渡書ハ以前ノ

言渡書願ノ旨ヲ告知ス可キ言渡書又ハ故障申ト同一ノ法式ヲ以テ

同一ノ人々ニ送達ス可シ

第五百三十九條 若シ被告人又ハ檢察官又ハ民事ノ原告人ヨリ輕罪

裁判所或ハ下吟味掛リ裁判役ノ管轄異ナリタルコト因リ其吟味ヲ受

ケサル旨ヲ述フルコトアリト雖モ其中述ノ取上ヲ得タルト棄却セラ

レタルトテ問ハス二箇ノ裁判所ノ管轄相觸ルコトヲ以テ其中ノ一ニ

定ム可キ旨ヲ覆審院ニ訴出ス可カラズ但シ此場合ニ於テハ輕罪裁

判所ノ裁判言渡又ハ下吟味掛リ裁判役ノ言渡ヲ控訴院ニ控訴シ及

ヒ控訴院ニ控訴シタル上受ケタル言渡ヲ取消サント覆審院ニ訴出

スルヲ得可シ

第五百四十條 一箇ノ控訴院ノ管轄内ニアル下吟味掛リ裁判役二員

又ハ二箇ノ輕罪裁判所ニテ同時ニ一箇ノ輕重罪又ハ相附帶シタル

輕重罪ヲ吟味シ始メタル時ハ其控訴院ニテ此章ニ記スル法式ニ循

ヒ二箇ノ裁判所中其一ニ定ム可シ但シ其言渡ハ之ヲ取消サント覆

審院ニ訴出スルコトヲ得可シ

又一箇ノ輕罪裁判所ノ管轄内ニアル二箇ノ註誤裁判所ニテ同時ニ

一箇ノ註誤又ハ相附帶シタル註誤ノ吟味ヲ爲シ始メタル時ハ其輕

罪裁判所ニテ其二箇中ノ一ニ定ム可シ若シ又二箇ノ註誤裁判所一

箇ノ輕罪裁判所ノ管轄ニアラサル時ハ控訴院ニテ其中ノ一ニ定ム

可シ但シ此等ノ場合ニ於テハ其言渡ノ取消ヲ覆審院ニ訴出スルヲ得可シ

第五百四十一條 民事ノ原告人及ヒ被告人二箇ノ裁判所中ノ一ニ定メントスル訴ヲ爲シ負訴訟トナル時ハ三百フランクニ過キサル罰金ヲ言渡サル、コアル可シ但シ此罰金中其半ヲ相手方ニ渡ス可シ
訴訟法第三百六十七條見合

○第二章 此裁判所ヨリ彼ノ裁判所ニ吟味ヲ移ス訴

第五百四十二條 重罪、輕罪、註誤ヲ問ハス覆審院ニテ檢事長ノ申立ニ從ヒ公ケノ安寧ノ爲メ必要ナリト思フ時又ハ相當ノ疑アル時ハ此控訴院或ハ重罪裁判所ヨリ彼控訴院或ハ重罪裁判所ニ吟味ヲ移シ又ハ此輕罪裁判所或ハ註誤裁判所ヨリ彼輕罪裁判所或ハ註誤裁判所ニ吟味ヲ移シ又ハ此下吟味掛リ裁判役ヨリ彼下吟味掛リ裁判役

ニ吟味ヲ移スヲ得可シ

又被告人或ハ民事ノ原告人ヨリ同上ノ旨ヲ覆審院ニ願出ルヲ得可シ但シ其願ハ相當ノ疑アル場合ノミニ限ル可シ

第五百四十三條 被告人又ハ民事ノ原告人一旦裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ノ面前ニ出テタル上ハ其後ニ至リ相當ノ疑ヲ生ス可キ原由アリシ時ニ非サレハ此裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟味ヲ移サント願出ツ可カラズ

第五百四十四條 相當ノ疑ヲ生ス可キ原由アル時ハ檢察官其吟味ヲ移ス可キヲ直ニ覆審院ニ求ムルヲ得可シ然レモ檢察官公ケノ安寧ノ爲メ其事ヲ求メントスル時ハ先ツ其求需ノ書面及ヒ其旨趣書ト憑據ノ書類トヲ裁判事務宰相ニ差出シ宰相其理アリト思フ時ハ此等ノ書類ヲ覆審院ニ送ル可シ

第五百四十五條 覆審院ノ刑事局ニ於テハ願書ト諸書類トヲ檢視シタル上ニテ直チニ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其願ノ旨ヲ相手方ニ告知ス可キコトヲ言渡ス可シ但シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ相手方ヨリ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルコトヲ得可シ

第五百四十六條 若シ被告人又ハ民事ノ原告人此裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟味ヲ移ス可キコトヲ願出シタル時覆審院ニテ即時ニ其願ヲ棄却シ又ハ取上ケルノ言渡ヲ爲スコト適宜ナラスト思フニ於テハ其言渡書ヲ以テ是迄吟味ヲ爲ス裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ノ檢察官ニ其願ノ旨ヲ告知ス可キコトヲ命シ且諸書類ト見込書トヲ差出ス可キ旨ヲ其檢察官ニ命ス可シ又別段ノ道理アル時ハ相手方ニモ亦其願出ノ旨ヲ告知ス可キコトヲ命ス可シ

第五百四十七條 又檢察官此裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟味ヲ移ス可キ

コトヲ求メタル時覆審院ニテ即時ニ其確定ノ裁判言渡ヲ爲スコト適宜ナラスト思フニ於テハ覆審院ヨリ其求メノ旨ヲ相手方ニ告知ス可キコトヲ言渡シ又ハ其他必要ト思料スル預審ノ言渡ヲ爲スヲ得可シ

第五百四十八條 覆審院ニテ願書ト其他ノ書類トヲ檢視シタル上即時ニ其確定ノ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ其言渡書ヲ檢事長ヨリ裁判事務宰相ニ差出シ其宰相ヨリ之ヲ管轄ヲ罷メラシメタル裁判所又ハ下吟味掛リ裁判役ノ檢察官ト被告人及ヒ民事ノ原告人又ハ其擇ニタル住所トニ送ル可シ

第五百四十九條 其言渡ニ付キ故障ヲ述ヘントスル時ハ此卷ノ第一章ニ記スル規則ト定期トニ循フ可シ

第五百五十條 故障ノ申述ヲ取上ケタル時ハ訴訟ノ裁判言渡ヲ當然止ム可キコト第五百三十一條ニ記スル如シタル可シ

第五百五十一條 第五百二十五條 第五百三十條 第五百三十一條 第五百三十四條 第五百三十五條 第五百三十六條 第五百三十七條 第五百三十八條 第五百四十一條ノ規則ハ此裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟味ヲ移ス訴モ亦通シテ用フ可シ

第五百五十二條 此裁判所ヨリ彼裁判所ニ吟味ヲ移ス訴ヲ爲シ一度其訴ヲ棄却セラレタル時ト雖モ其後生シタル事件ニ付キ更ニ同上ノ訴ヲ爲スヲ得可シ

○第六卷 別段裁判所ノ事 第五百五十三條ヨリ第五百九十九條ニ至ル (千八百三十年ノ國法第五十四條ニ因リ廢ス)

○第七卷 人民ノ權利及ヒ公ケノ安寧ニ管スル諸件(千八百八年十月十六日決定同月廿六日布告)

○第一章 裁判言渡書ヲ書留ムル事

第六百條 重罪裁判所又ハ輕罪裁判所ノ書記官ハ懲治罪ノ爲メノ禁錮ノ刑又ハ更ニ重キ刑ヲ言渡サレシ各人ノ姓名、職業、年齡、住所ヲ「ア」ニ「セ」ノ順序ニ從ヒ別段設ケタル簿冊ニ書留ム可シ又其簿冊ニハ各犯罪事件ト刑ノ言渡トヲ簡略ニ書留ム可シ若シ書記官此等ノ書留ヲ爲サ、ルニ於テハ其度毎ニ五十「フラン」ノ罰金ヲ言渡サル可シ第六百一條 書記官ハ三月毎ニ其簿冊ノ寫ヲ裁判事務宰相ト警察事務宰相トニ送呈ス可シ若シ此規則ニ背シ時ハ百「フラン」ノ罰金ヲ言渡サル可シ

第六百二條 裁判事務宰相並ニ警察事務宰相ハ前ニ記シタル所ニ等シキ大簿冊ヲ設ケ置キ裁判所ノ書記官ヨリ送呈シタル簿冊ノ寫ヲ書留メシム可シ

○第二章 獄舎、輕罪裁判所附留置場、重罪裁判所附留置場ノ事

第六百三條 犯人ヲ刑ニ處スル爲メノ獄舎ノ外各部ノ輕罪裁判所毎ニ被告人ヲ入レ置ク可キ留置場ヲ設ケ又重罪裁判所毎ニ被告人ヲ入レ置ク可キ留置場ヲ設ク可シ

第六百四條 裁判所附ノ留置場ハ犯罪人ヲ刑ニ處スル爲メノ獄舎ト全ク相異ナリタルモノトス

第六百五條 州長ハ裁判所附留置場ノ堅牢ナル可キ事ト並ニ清潔ニシテ囚人ノ健康ヲ害セサル可キ事トニ注意ス可シ

第六百六條 裁判所附留置場ノ監守人ハ州長ヨリ之ヲ任ス可シ

第六百七條 獄舎及ヒ裁判所附留置場ノ監守人ハ簿冊ヲ設ケ置ク可シ

其簿冊ハ輕罪裁判所附ノ留置場ニ付テハ下吟味掛リ裁判役毎葉姓名ヲ手署シテ且横線ヲ畫シ又重罪裁判所附ノ留置場ニ付テハ重罪裁判所ノ上席人又其上席人ノアラサル時ハ輕罪裁判所ノ上席人毎葉姓名ヲ手署シテ且横線ヲ畫シ又獄舎ニ付テハ州長毎葉姓名ヲ手署シテ且横線ヲ畫ス可シ

第六百八條 收監狀召捕ノ言渡書犯人ヲ刑ニ處スル言渡書ヲ執行ス可キ者ハ被告人又ハ犯人ヲ監守人ニ引渡ス前ニ其監守人ヲシテ其收監狀又ハ言渡書ヲ簿冊ニ登記セシム可シ但シ其受取ノ證書ハ其收監狀又ハ言渡書ヲ持來リシ者ノ面前ニテ之ヲ記ス可シ
其受取證書ハ監守人ト引渡人ト之ニ姓名ヲ手署ス可シ

又監守人ハ其受取証書ノ寫ヲ引渡人ニ渡ス可シ

第六百九條 如何ナル監守人ト雖モ法式ニ協フタル禁錮狀或ハ收監狀又ハ被告人ヲ重罪裁判所ニ移ス言渡書又ハ施體或ハ禁錮ノ刑ニ處スル言渡書ニ據リ且之ヲ簿冊ニ登記シタルニ非サレハ人ヲ獄舎ニ繋ギ又ハ留置場ニ入ルヲ爲メ受取ル可ラス若シ此規則ニ背ク時ハ人ヲ枉ニ禁錮スルノ罪アリトシテ訴ヲ受ケ相當ノ刑ニ處セラル可シ

第六百十條 其簿冊ニハ受取ノ証ヲ記シタル端ニ囚人ヲ赦宥シタル日附並ニ之ヲ赦宥スル言渡書ヲ附記ス可シ

第六百十一條 下吟味掛リ裁判役ハ其一州内ノ輕罪裁判所附留置場ノ囚人ヲ少クトモ毎月一度見分ス可シ
重罪裁判所ノ上席人ハ重罪裁判所附留置場ノ囚人ヲ重罪裁判所ノ

會議ヲ開ク毎ニ少クトモ一度見分ス可シ
州長ハ其州内ノ重罪裁判所附留置場及ヒ獄舎ヲ少クトモ毎年一度見分ス可シ

第六百十二條 前條ニ記シタル見分ノ外重罪裁判所附留置場又ハ輕罪裁判所附留置場又ハ獄舎所在ノ邑長又邑長數員アル時ハ警察總督又ハ巡卒總長ハ少クモ毎月一度此等ノ留置場又ハ獄舎ヲ見分ス可シ

第六百十三條 (千八百六十五年七月十四日左ノ如ク改ム) 巴勒ノ警察總督又州長警察總督ノ職ヲ兼テ行フ都府ニ於テハ州長及ヒ其他ノ地ニ於テハ邑長囚人ノ飲食料十分ニシテ且健康ノ害ヲラサルコトニ注意ス可シ但シ此等ノ官吏ハ留置場ノ警察ヲ掌ル可シ
又下吟味掛リ裁判役及ヒ重罪裁判所ノ上席人ハ下吟味ノ爲メ又ハ

裁判言渡ノ爲メ裁判所附留置場ニ於テ執行ヲ可キ總テノ命令ヲ下
スヲ得可シ

若シ下吟味掛リ裁判役囚人ノ他人ト接スルヲ禁スルヲ必要ナリト
思フ時ハ別段ノ言渡書ヲ以テ之ヲ禁スルヲ得可シ但シ其言渡書
ハ留置場ノ簿冊ニ登記ス可シ○其禁ハ十日以上之ヲ爲スヲ得可カ
ラスト雖モ其期限ノ終リニ至リ更ニ改メテ之ヲ言渡スヲ得可シ

○下吟味掛リ裁判役ハ其禁ヲ言渡シタル旨ヲ檢事長ニ告知ス可シ
第六百十四條 若シ囚人留置場又ハ獄舎ノ監守人或ハ其下役ニ對シ
又ハ他ノ囚人ニ對シ暴行脇迫ヲ爲ス時ハ掛リ官吏ノ命ニテ更ニ嚴
重ニ之ヲ禁錮シ又ハ別ニ一人ノミヲ禁錮シ又烈シク暴動スル時ハ
手械足械ヲ加フ可シ但シ其囚人ハ暴行脇迫ノ爲メ別段犯罪ノ訴ヲ
受ク可シ

○第三章 枉ニ人ヲ禁錮スルヲ制シテ自由ノ權ヲ保護スル方

法

第六百十五條 佛蘭西共和政治立國第八年「リ」月二十二日ノ
國法第七十七條第七十八條第七十九條第八十條第八十一條第八十
二條ニ循ヒ獄舎又ハ裁判所附留置場ニ非サル場所ニ禁錮セラレシ
者アルヲ知リタル人ハ其旨ヲ治安裁判役檢事又ハ其代役下吟味
掛リ裁判役控訴院ノ檢事長ニ告知ス可シ

第六百十六條 治安裁判役總テノ檢察官下吟味掛リ裁判役ハ自己ノ
職務ニ因リ又ハ人ヨリ告知ヲ受ケタルニ因リ即時ニ枉ニ禁錮ヲ受
ケシ者アル場所ニ至リ其者ヲ自由ニ爲ス可シ若シ之ヲ禁錮スルニ
付テノ正當ナル原由アリト述フル者アルニ於テハ直チニ其禁錮ヲ
受ケシ者ヲ相當ノ裁判役ノ面前ニ出タシム可シ若シ此等ノ官吏此

規則ニ背シ時ハ枉ニ禁錮ヲ爲シタル者ノ同罪人ナリトシテ訴ヲ受
シ可シ

此等ノ官吏ハ前項ニ記スル處置ヲ調書ニ記ス可シ

第六百十七條 前條ニ記スル官吏已ムテ得サル時ハ第九十五條ニ記

スル法式ニ循ヒ言渡書ヲ渡ス可シ 即チ禁錮狀引出狀

若シ其言渡ノ如ク執行フ時ニ當リ抗拒スル者アル時ハ已ムテ得ス

他人ノ力ヲ借ル可シ但シ其官吏ヨリ力ヲ貸ス可キノ求メテ受ケシ

者ハ其求メニ從フ可シ

第六百十八條 若シ裁判所附留置場ノ監守人又ハ獄舎ノ監守人其留

置場又ハ獄舎ノ警察ノ權アル官吏ノ命令書ヲ持來リシ者ノ求メニ

從ヒ其囚人ヲ示スコトヲ肯セヌ又ハ囚人ヲ他人ト接セシムルヲ禁ス

ル命令書 第六百十三條 示スコトヲ肯セヌ又ハ治安裁判役ニ其簿冊

ヲ示スコトヲ肯セヌ又ハ治安裁判役ヲシテ其必要ナリト思料スル簿

冊ノ一部ヲ寫シ取ラシムルコトヲ肯セサル時ハ枉ニ人ヲ禁錮スルノ

罪アリトシテ訴ヲ受ケ又ハ枉ニ人ヲ禁錮シタル者ノ同罪人ナリト

シテ訴ヲ受ク可シ

〇第四章 既ニ刑ヲ受ケシ者ノ復權ノ事

第六百十九條 (千八百五十二年七月三日左ノ如ク改ム) 施體又ハ加辱

ノ刑又ハ懲治ノ刑ヲ言渡サレシ者既ニ其刑期ノ終リシ後又ハ赦免

狀 皇帝ヨリ犯人ノ罪ヲ得タル後ハ復權ヲ願フコトヲ得可シ 後條

第六百二十條 施體又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレシ者ハ其赦宥ヲ得タル

日 即チ刑期ノヨリ五年ノ後ニ非サレハ復權ヲ願フ可カラヌ

然レモ民權剝奪ノ刑ヲ言渡サレシ者ニ付テハ其言渡ヲ取消ス可カ

ラサルニ至リシ日ヨリ其五年ノ期限ヲ算ヘ又其者禁錮ヲ言渡サレ

シ時ハ其禁錮ノ刑期ノ終リシ日ヨリ其期限ヲ算フ可シ
又政府ノ監察ヲ受シ可キ刑ヲ主タル刑トシテ言渡サレシ者ニ付テ
ハ其言渡ヲ取消ス可カラサルニ至リシ日ヨリ其五年ノ期限ヲ算フ
可シ

懲治刑ヲ言渡サレシ者ニ付テハ其五年ノ期限ヲ減シテ三年トス
第六百二十一條 施體又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレシ者ハ五年以來同一
ノ郡中ニ住シ且其中最終ノ二年以來全一ノ邑中ニ住スルニ非サレ
ハ復權ヲ願フ可カラス

懲治刑ヲ言渡サレシ者ハ三年以來全一ノ郡中ニ住シ且其中最終ノ
二年以來全一ノ邑中ニ住スルニ非サレハ復權ヲ願フ可カラス
第六百二十二條 既ニ刑期ノ終リシ犯人ハ復權ノ願書ヲ其郡ノ檢事
ニ差出シ且左件ヲ申出ツ可シ

第一 刑ヲ言渡サレシ日附

第二 刑期ノ終リシ後第六百二十條ニ記スル期限ヨリ更ニ永キ
期限ヲ經タル時ハ其刑期ノ終リシ以來住シタル地

第六百二十三條 又其願人ハ既ニ裁判所ノ費用並ニ其言渡サレシ罰
金及ヒ償額ヲ拂フタルノ證ヲ立テ又ハ其者此等ノ金高ヲ拂フ可キ
義務ノ釋放ヲ得タル証ヲ立ツ可シ

若シ其証ヲ立テサル時ハ法律上ニテ定ムル所ノ期限間禁錮ヲ受ケ
タルノ證ニ金高ヲ拂ハサルニ付テ立テ又ハ相手方其禁錮ヲ爲スノ權
ヲ拋棄シタル證ヲ立ツ可シ

又詐偽ノ倒産ニ付キ刑ニ處セラレシ者ハ借金ノ元利並ニ裁判所費
用ヲ拂フタルノ證ヲ立テ又ハ此等ノ金高ヲ拂フ可キ義務ノ釋放ヲ
得タル証ヲ立ツ可シ

第六百二十四條 檢事ハ郡長ヲシテ願人住所ノ邑會議員ニ左ノ諸件ヲ證明スル爲メノ會議ヲ爲ス可キヲ命セシム可シ

第一 願人邑内ニ住シタル期限但シ何月何日ニ其邑内ニ住スルヲ始メ何月何日ニ止メタルヤヲ詳明ナラシム可シ

第二 其邑内ニ住シタル時閉ノ行狀

第三 其時閉生計ヲ營ミシ方法

邑會ニテ此等ノ諸事ヲ證明スル書面ニハ復權願ノ法ニ適シタルヤ否ヲ知ル可キ爲メ特ニ之ヲ記シタル旨ヲ附記ス可シ

又檢事ハ願人ノ住シタル邑ノ長官及ヒ其縣ノ治安裁判役並ニ其郡ノ長官ノ説ヲ聽ク可シ

第六百二十五條 檢事ハ左ノ書類ヲ受取ル可シ

第一 刑ノ言渡書ノ寫

第二 願人ノ行狀如何ヲ證スル禁錮場ノ簿冊ノ寫

檢事ハ總テノ書類ヲ己レノ見込書ト共ニ檢事長ニ送ル可シ

第六百二十六條 復權ノ願ハ願人住居ノ地ヲ管轄スル控訴院重罪取調局ニテ之ヲ吟味ス可シ

檢事長ハ總テノ書類ヲ其控訴院ノ書記局ニ納ム可シ

第六百二十七條 其書類ヲ書記局ニ納メタルヨリ二月内ニ重罪取調

局ニテ其願ヲ吟味シ檢事長其申立書ヲ差出ス可シ

重罪取調局ニテハ檢事長ノ求メニ從ヒ又ハ其公務ヲ以テ更ニ改メ

テ其願ノ趣ヲ取調フ可キヲ言渡スヲ得可シ但シ是レガ爲メ六月

以上ノ遅延ヲ生ス可カラズ

第六百二十八條 重罪取調局ニテハ檢事長ノ申立ヲ聽キタル上ニテ

其見込書ヲ記ス可シ

第六百二十九條 若シ重罪取調局ノ見込書復權ノ願ヲ允許セサルノ
説タル時ハ更ニ二年ノ後ニ非サレハ再ヒ其願ヲ爲ス可カラズ

第六百三十條 重罪取調局ノ見込書復權ノ願ヲ允許ス可キノ説タル
時ハ檢事長其見込書ト諸書類トヲ遅延ナク裁判事務宰相ニ送呈ス

可シ但シ其宰相ハ當テ刑ヲ言渡セシ裁判所ニ相談スルヲ得可シ

第六百三十一條 皇帝ハ裁判事務宰相ノ申立ヲ聽タル上ニテ復權ノ
願ヲ允許シ又ハ棄却ス可シ

第六百三十二條 皇帝ヨリ復權ノ願ヲ允許シタル時ハ復權狀ヲ渡ス
可シ

第六百三十三條 其復權狀ハ當テ見込書ヲ差出セシ控訴院ニ送ル可
シ

又當テ刑ヲ言渡セシ裁判所ニモ亦復權狀ノ公正ナル寫ヲ送ル可シ

○其復權狀ノ寫ハ刑ノ言渡書ノ正本ノ端ニ記入ス可シ

第六百三十四條 復權ヲ得タル者ハ當テ刑ヲ言渡サレタルニ因リ失
フタル權利ヲ全シ復ス可シ

前數條ニ記スル規則ニ循ヒ復權ヲ得タルト雖モ商法第六百十二條
ニ記スル禁ヲ除去ス可カラズ

治罪法上ニテ復權ヲ得ルト雖モ商法
上ノ禁ヲ免ルス可カラサルヲ云フ

一度重罪ヲ犯シタルニ付キ刑ヲ言渡サレタル後更ニ重罪ヲ犯シ施
體又ハ加辱ノ刑ヲ言渡サレタル者ハ復權ヲ得可カラズ

復權ヲ得タル後更ニ刑ヲ言渡サレタル者ハ復權ノ益ヲ得可カラズ

○其五章 期滿免除ノ事

第六百三十五條 重罪ニ付テノ裁判言渡書ニ記スル刑ハ其言渡ノ日
ヨリ滿二十年ノ時間ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトス

然レモ犯人ハ其重罪ノ爲メ身體又ハ所有物ニ害ヲ受ケシ者又ハ其

者ノ宗系ノ遺物相続人ノ住スル州内ニ住ス可カラズ
又政府ヨリ犯人ノ住居ス可キ地ヲ別段指定ムルヲ得可シ

第六百三十六條 輕罪ニ付テノ裁判言渡書ニ記スル刑ハ其終審ノ言
渡ノ日ヨリ滿五年ノ時間ヲ以テ其期滿免除ノ期限ナリトス但シ輕
罪裁判所ヨリ言渡シタル刑ニ付テハ其言渡ヲ控訴スルヲ得可カ
ラサルニ至リシ日ヨリ滿五年ヲ以テ其期滿免除ノ期限ナリトス可
シ
第六百三十七條 死刑又ハ無期ノ施體ノ刑又ハ總テ施體或ハ加辱ノ
刑ヲ言渡ス可キ重罪ニ付テノ刑事ノ訴及ヒ民事ノ訴ハ其重罪ヲ犯
シタルヨリ滿十年ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトス但シ其期滿免除
ヲ得ルコトハ其十年ノ時間吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ヲ受ケサルコ
トニ必要ナリトス

若シ其十年ノ時間ニ吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ヲ受ケタル儘ニテ
其裁判言渡ヲ受ケサル時ハ最終ノ吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ノ日
ヨリ滿十年ヲ以テ刑事ノ訴及ヒ民事ノ訴ノ期滿免除ノ期限ナリト
ス但シ其吟味ノ手續又ハ告訴ノ手續ニ全ク管セサル者ニ付テモ亦
同一ナリトス

第六百三十八條 前條ニ記シタル二箇ノ場合ニ於テ懲治刑ニ處ス可
キ輕罪ニ管スル時ハ滿三年ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトス但シ此
期限ヲ算フルニ付テハ前條ノ差別ニ從フ可シ

第六百三十九條 註誤ニ付テノ裁判言渡書ニ記スル刑ハ滿二年ノ時
間ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトス但シ其二年ノ期限ハ終審ノ裁判
言渡書ニ記スル刑ニ付テハ其言渡ノ日ヨリ之ヲ算ヘ又終審ニ非サ
ル裁判言渡書ニ記スル刑ニ付テハ其言渡ヲ控訴スルヲ得サルニ至

リシ日ヨリ之ヲ算フ可シ
 第六百四十條 註誤ノ事ニ付キ爲ス可キ刑事ノ訴及ヒ民事ノ訴ハ其
 註誤ノ罪ヲ犯シタル日ヨリ滿一年ヲ以テ期滿免除ノ期限ナリトス
 但シ其一年ノ時間ニ註誤ニ付テノ調査ヲ記シ又ハ被告人ヲ召捕ヘ
 又ハ吟味或ハ訴訟ノ手續ヲ受ケタルヲ問フナク唯其時間ニ刑ノ
 言渡ヲ受ケサルコトヲ必要トス○若シ其一年ノ時間ニ控訴スルヲ得
 可キ始審ノ刑ノ言渡アリシ時ハ控訴狀ノ送達ヲ受ケタル日ヨリ滿
 一年ヲ以テ刑事ノ訴及ヒ民事ノ訴ノ期滿免除ノ期限ナリトス
 第四百七十四條
 見合

第六百四十一條 輕重罪及ヒ註誤ニ付キ抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケシ
 者既ニ其刑ノ期滿免除ノ期限ニ至リシ後ハ其抗傳シテ言渡サレ
 ル刑ヲ免カレシカ爲メ裁判所ニ出ツ可カラス

第六百四十二條 重罪、輕罪、註誤ニ付キ爲シタル民事ノ言渡相手方ニ
キ爲ス可ハ之ヲ取消サント訴フルコトヲ得サルニ至リシ時民法ニ記
 スル規則ニ循ヒ其期滿免除ノ期限ヲ定ム可シ民法第二百二十六
 第六百四十三條 此章ニ記スル規則ハ別段ノ輕罪又ハ註誤ニ付テノ
 訴ノ期滿免除ノ期限ヲ定ムル格別ノ規則ノ差支トナルコトナカル可

辻 士草 校

佛蘭西刑法
法律書

權大内史箕作麟祥 譯

○前加規則千八百十年二月十二日決定同月二十二日布告

第一條 法律上ニテ警察違反ノ犯ヲ治スルノ刑ヲ用ヒ罰スル罪ヲ註

誤ト云フ

法律上ニテ懲治ノ刑ヲ用ヒ罰スル罪ヲ輕罪ト云フ

法律上ニテ施體又ハ加辱ノ刑ヲ用ヒ罰スル罪ヲ重罪ト云フ

第二條 重罪ヲ犯サント謀ル者己ノ意ニ管セサル景況ニ因テ其謀試

ヲ止メ又ハ其謀試ヲ仕損スルト雖モ其謀試ヲ以テ即チ重罪ナリト

看做ス可シ

第三條 輕罪ヲ犯サントスル謀試ハ法律上ニテ別段定メタル場合ノ

四九〇一

外之ヲ輕罪ナリト看做ス可カラヌ
 第四條 註誤輕罪重罪ヲ問ハス其犯前ニ法律上ニテ未ダ定メサル刑
 ヲ用ヒ罰ス可カラヌ
 第五條 此刑法規則ハ兵事ニ管係スル註誤及ヒ輕罪重罪ニ通シ用フ
 可カラヌ

〇第一篇 重罪輕罪ノ刑及ヒ其刑ノ効(千八百十年二月十二日ノ法律

ノ續)

第六條 重罪ノ刑ハ施體ト加辱トヲ兼ル刑又ハ加辱ノミノ刑ナリ
 第七條 施體ト加辱トヲ兼ル刑ハ左ノ如シ

五九〇一

- 第一 死刑
- 第二 無期ノ徒刑
- 第三 流刑
- 第四 有期ノ徒刑
- 第五 囚獄ノ刑
- 第六 徒刑場内ニ於テ使役スルノ刑
- 第八條 加辱ノミノ刑ハ左ノ如シ
- 第一 追放ノ刑

第二 公權剝奪ノ刑

第九條 懲治ノ刑ハ左ノ如シ

第一 懲治場へ期限ヲ定メ禁錮スル刑

第二 定期間公權民權族權ヲ行フヲ禁スル刑

第三 罰金

第十條 法律上ニ定メタル刑ヲ言渡スト雖モ民事ノ原告人品物ヲ取還シ且損害ノ償ヲ得ルノ差支トナルトナカル可シ

第十一條 政府ヨリ別段犯人ノ監察ヲ爲ス事罰金ヲ言渡ス事犯罪ニ管シタル犯人ノ所有物又ハ犯罪ニ因リ得タル物件又ハ犯罪ニ用ヒ或ハ用ヒントモシ物件ヲ別段沒收スル事ハ重罪又ハ輕罪ノ別ナリ通シ用フ可キ刑ナリ

第一章 重罪ノ刑

第十二條 死刑ノ言渡ヲ受シ者ハ之ヲ刎首ス可シ

第十三條 尊屬ノ親ヲ殺セシニ因リ死刑ノ言渡ヲ受ケシ者ハ褌袴ノ

マ、跳足ニチシテ頭ニ帛被ヲ蒙ラシメ刑場ニ連シ行フ可シ

此犯人ハ裁判所使吏ノ罪案ヲ衆庶ニ讀ミ聞スル時間刑壇ノ上ニ肆

シ置キ罪案ヲ讀ミ終リシ後直ニ之ヲ刑ニ處ス可シ

第十四條 若シ死刑ヲ受ケシ者ノ親族ヨリ其屍ヲ受取ラント願ヒ出

ル時ハ禮式ヲ用ヒス葬ル可キノ約定ヲ以テ之ヲ引渡ス可シ

第十五條 千八百五十四年五月三十日如左改ム徒刑ノ言渡ヲ受ケシ

者ハ至難ノ役ニ使用セラル可シ但シ使役ノ種類ニ因リ犯人ノ兩脚

ニ彈丸ヲ繫ケ又ハ兩人毎ニ鎖ヲ用ヒテ聯接ス可シ

第十六條 千八百五十四年五月三十日如左改ム徒刑ノ言渡ヲ受ケシ

婦女ハ徒刑場内ノニ於テ之ヲ使役ス可シ

第十七條 (千八百三十五年九月九日如左改ム)流刑トハ法律上ニ定メ
 ヲル歐洲大陸ノ佛蘭西領地外ノ場所ニ犯人ヲ遷徙シテ定期ナク居
 住セシムル刑ヲ云フ
 流刑ニ處セラレシ者若シ歐洲大陸ノ佛蘭西領地内ニ歸リ來ル時ハ
 其者ニ相違ナキノ證ヲ得タルノミニテ無期ノ徒刑ヲ言渡ス可シ
 流刑ニ處セラレシ者歐洲大陸ノ佛蘭西領地内ニ歸リ來ルニ非スト
 雖ハ佛蘭西兵ノ攻取シタル國ニ於テ逮捕ヲ受ケシ時ハ其流所ニ送
 還セラル可シ
 (千八百五十年六月八日左ノ如ク改ム)流刑ノ場所未ダ定ラサル時間
 ハ流刑ノ言渡ヲ受ケシ者歐洲大陸ノ佛蘭西領地内ニアル獄舎又ハ
 歐洲大陸ノ佛蘭西領地外ニアル藩屬地ノ獄舎ニ定期ナク繋囚スル
 ノ刑ヲ受ク可シ但シ其繋囚ノ場所ハ法律上ニ定メタルモノタル可

ク且裁判役ノ處刑言渡書ニ別段之ヲ指定ム可シ
 若シ本國ト繋囚ノ場所トノ往來梗塞シタル時ハ假シ本國ニ於テ繋
 囚シ置ク可シ
 第十八條 (千八百五十四年五月三十一日廢ス)無期ノ徒刑及ヒ流刑ノ
 言渡ヲ受ケシ者ハ准死ヲ受ク可シ
 然レハ政府ハ流刑ノ言渡ヲ受ケシ者ニ民權ノ全部又ハ一部ヲ行フ
 ノ許ヲ爲スコトヲ得可シ
 第十九條 有期ノ徒刑ノ言渡ハ五年ヨリ少カラヌ二十年ヨリ多カラ
 サル時間ヲ以テ其期限ト定ム
 第二十條 囚獄ノ刑ノ言渡ヲ受ケシ犯人ハ歐洲大陸ノ佛蘭西領地内
 ニアル城寨中ニ之ヲ繋囚ス可シ但シ其城寨ハ行政規則ノ體裁ニテ
 記シタル皇帝ノ勅書ヲ以テ之ヲ定ム可シ

其犯人ハ皇帝ノ勅書ニテ定メタル取締ノ規則ニ循ヒ囚獄場ノ内外
ニアル人ト通問スルヲ得可シ

囚獄ノ刑ハ第三十三條ニ定メタル場合ノ外五年ヨリ少カラス二十
年ヨリ多カラサル時間ヲ以テ其期限トス

第二十一條 徒刑場内ニ於テ使役スル刑ノ言渡ヲ受ケシ者ハ男女ヲ
論ゼテ徒刑場内ニ入レ置キ使役ヲ受ケシム可シ但シ其使役ニ因テ
造リ出シタル物ハ政府ヨリ定メタル規則ニ循ヒ其一部ヲ犯人ノ所
得ト爲サシムルヲ得可シ

此刑ノ定期ハ五年ヨリ少カラス十年ヨリ多カラサル可シ
第二十二條 無期ノ徒刑有期ノ徒刑徒刑場内ニ於テ使役スル刑ノ言
渡ヲ受ケシ者ハ其刑ヲ受ケル前ニ一時間街衢ニ公ケテ懸シ置ク可
シ但シ其頭上ニ姓名職業住所刑名犯罪ヲ大字ニ記シタル標榜ヲ建

ツ可シ
有期ノ徒刑又ハ徒刑場内ニ於テ使役スル刑ヲ言渡シタル時其犯人
再犯ノ罪ニ非ザレバ重罪裁判所ヨリ犯人ヲ公ケニ肆スナカル可
キ旨ヲ言渡スヲ得可シ

但シ十八歳以下七十歳以上ノ者ニハ之ヲ公ケニ肆ス旨ヲ決シテ言
渡ス可カラズ(千八百四十八年四月十二日廢ス)

第二十三條 有期ノ刑ノ期限ハ其刑ノ言渡ノ確定トナリシ日ヨリ之
ヲ算フ可シ

第二十四條 禁囚ノ刑ニ處セラシ者更ニ禁錮ノ刑ヲ言渡サレタル
時其犯人ヨリ其言渡ヲ控訴セサルニ於テハ其言渡ノ日ヨリ其刑期
ヲ算フ可シ但シ檢察官ヨリ控訴シタルニ管スルヲナシ又ハ其控訴
ノ結局如何ヲ問フナシ

又犯人ヨリ控訴ヲ爲シ其刑期ヲ減スル言渡ヲ得タル時ハ亦前文ニ記スル所ト同一ナリトス

第二十五條 國祭又ハ教祭ノ日及ヒ日曜日ニハ刑ヲ行フ可カラス

第二十六條 刑ヲ行フハ言渡書ニ記シタル地ノ街衢ニ於テ之ヲ爲ス可シ

第二十七條 死刑ノ言渡ヲ受ケシ女若シ懐胎ナリト言ヒ其證據明白ナル時ハ出產ノ後ニ至テ其刑ヲ受ケシム可シ

第二十八條 有期ノ徒刑囚獄ノ刑徒刑場内ニ於テ使役スル刑追放ノ刑ノ言渡ヲ受ケシ者ハ公權ノ剝奪ヲ受ク可シ但シ公權ノ剝奪ハ刑

ノ言渡ノ確定セヨリ之ヲ受ク可ク又抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケタル時ハ罪案ノ摘報書ヲ街衢ニ榜示シタル日ヨリ之ヲ受ク可シ

第二十九條 有期ノ徒刑囚獄ノ刑徒刑場内ニ於テ使役スル刑ノ言渡

ヲ受ケシ者ハ其刑期ノ時間法律上ニテ民權ヲ行フノ禁ヲ受ケタル者ト爲ス可シ但シ治産ノ禁ヲ受ケシ者ノ爲メ後見人及ヒ後見人ノ監察者ヲ任スルニ付キ定メタル規則ニ循ヒ其犯人ノ財産ヲ支配セシムル爲メ其後見人及ヒ後見人ノ監察者ヲ任ス可シ

第三十條 刑ヲ受ケタル者ノ財産ハ其刑期ノ終リシ後之ヲ其本人ニ還與シ後見人ヨリ其支配中ノ算計ヲ爲ス可シ

第三十一條 刑期ノ時間ハ金額及ヒ犯人所有物ノ入額ヲ犯人ニ渡ス可カラズ(千八百五十四年五月三十日及ヒ千八百五十年六月八日改ム)

第三十二條 追放ノ刑ノ言渡ヲ受ケシ者ハ政府ノ命ヲ以テ歐洲大陸ノ佛蘭西領地外ニ遷徙ス可シ
追放ノ期限ハ五年ヨリ少ナク十年ヨリ多カラサル可シ

第三十三條 追放ノ刑ニ處セラレシ者其刑期ノ未タ終ラサル中ニ若シ歐洲大陸ノ佛蘭西領地内ニ歸リ來ルコアル時ハ其者ニ相違ナキ
 ノ證ヲ得ルノミヨ於テ定リタル期限間囚獄ノ刑ヲ受ク可シ但シ其
 期限ハ犯人歸來ノ日ヨリ追放期滿ノ日ニ至ル迄ノ時間ヨリ少ナキ
 百ナシ亦其二倍ヨリ多キコトナカル可シ

第三十四條 公權剝奪トハ左ノ數件ニアリトス

- 第一 總テ公然ノ官職ヲ剝奪シ且其官職ニ補任スルヲ禁スル事
- 第二 投票ヲ爲スノ權議員ヲ撰舉スルノ權議員ニ選舉ヲ得ルノ
 權及ヒ其他總テ公權政權表勳ノ裝飾ヲ用フルノ權ヲ剝奪スル

第三 陪審又ハ鑑定人トナル事證書類ノ證人トナル事裁判所ニ
 於テ事柄ヲ陳述スルノ外證據ヲ申述フルコトヲ禁スル事

第四 親族會議ノ列コ入ル可カラサル事及ヒ己レノ子ノ爲メト
 雖モ親族ノ許諾ヲ得ルコト非サレハ其後見人又ハ後見人ノ監察
 者トナリ或ハ管財人及ヒ裁判所ヨリ任スル輔佐人トナル可カ
 ル事

第五 兵器ヲ所有スルノ權佛蘭西ノ兵籍ニ入
 ルノ權學校ヲ開クノ權教師校監ノ名義ヲ以テ學校ニ於テ教授
 ヲ爲シ或ハ任用ヲ得ルノ權ヲ剝奪スル事

第三十五條 公權剝奪ノ刑ヲ主タル刑トシテ言渡ス時ハ其犯人コ禁
 錮ノ刑ヲ附加ノ刑トシテ言渡スコトヲ得可シ但シ其禁錮ノ期限ハ刑
 ノ言渡書ニ定ムルモノニシテ其時間ハ五年ニ過キサル可シ
 若シ其犯人外國人又ハ籍ヲ失ヒシ佛蘭西人ナル時ハ必ズ禁錮ノ刑
 ヲ言渡サ、ル可カラズ

第三十六條 死刑無期ノ徒刑有期ノ徒刑流刑囚獄ノ刑徒刑場内ニ於

テ使役スル刑公權ヲ剝奪スル刑追放ノ刑ノ言渡書ハ其文ヲ摘撮シ

テ印刷ス可シ

其言渡書ノ摘撮書ハ其州ノ首府言渡ヲ爲シタル府犯罪ノ邑刑ヲ行

ハシ邑犯人住所ノ邑ニ之ヲ貼示ス可シ

第三十七條 (千八百十四年廢ス)

第三十八條 (同上)

第三十九條 (同上)

第二章 懲治ノ刑

第四十條 禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケシ者ハ懲治場内ニ禁錮シ懲治場ニ

於テ定メタル數種ノ使役中犯人ノ所好ニ從テ之ヲ使役ス可シ

其刑ノ期限ハ六日ヨリ少カラズ五年ヨリ多カラサル可シ但シ再犯

ノ場合又ハ其他法律上ニ別段期限ヲ定メタル場合ハ格別ナリトス

一日禁錮スルノ刑ハ二十四時間トス

一月禁錮スルノ刑ハ三十日トス

第四十一條 輕罪ノ爲メ禁錮ヲ受ケシ者ノ使役ヨリ生シタル物ハ一

部ヲ懲治場ノ費用ニ供シ一部ヲ犯人ヲ慰安セシムルノ適宜ナル

時其爲メノ用ニ充テ一部ヲ出獄ノ時犯人ニ與フル貯金ト爲ス可

シ但シ此等ノ事ハ行政規則ニ循テ之ヲ定ム

第四十二條 輕罪ヲ審判スル裁判所ニ於テハ別段定リシ場合ニ於テ

左ノ公權民權及ヒ族權ノ全部又ハ一部ヲ行フヲ禁スルヲ得可シ

第一 投票ヲ爲スノ權及ヒ議員ヲ選舉スルノ權

第二 議員ニ選舉ヲ得ルノ權

第三 陪審又ハ他ノ公ケノ職務ノ任ヲ受ケ及ヒ此等ノ職務ヲ行

フノ權

第四 兵器ヲ所有スルノ權

第五 親族會議ニ參シ發言スルノ權

第六 己レノ子ノ爲メト雖モ其親族ノ許諾ヲ得ルニ非レハ其後

見人又ハ管財人トナルノ權

第七 鑒定人トナリ及ヒ證書類ノ證人トナルノ權

第八 裁判所ニ於テ事柄ヲ陳述スルノ外證據ヲ申述スルノ權

第四十三條 法律ノ別段ナル規則ヲ以テ前條ノ權ヲ行フヲ禁スルコト

ヲ允許シ又ハ命シタル時ニ非サレハ裁判所ヨリ前條ノ權ヲ行フノ

禁ヲ言渡ス可カラズ

○第三章 重罪又ハ輕罪ニ付キ言渡ス可キ刑

第四十四條 (千八百五十一年十二月八日ノ勅書ノ第三項第四項第五

項第六項ヲ以テ如左改ム)

第三項 政府ヨリ犯人ノ監察ヲ爲スノ効ハ政府ヨテ向後犯人ノ

刑期ノ終リシ後其居住ス可キ地ヲ定ムルノ權ヲ生スルニアリ

トス○犯人ノ其居住ヲ爲ス可キ地ニ常ニ住スルコトヲ證スルニ

適當ナル法式ハ行政官之ヲ定ム可シ

第四項 政府ノ監察ヲ受ケル犯人ハ巴勒及ヒ其屬地内ニ居住ス

ルコトヲ禁ス

第五項 前項ニ記シタル犯人巴勒及ヒ其屬地内ニ居住スルノ允

許狀ヲ得タルニ非サレハ此勅書ヲ布告シタル時ヨリ十日間ニ

巴勒及ヒ其屬地ヲ退去ス可シ○其犯人ノ求メニ應ジ犯人ノ以

前ノ住所ノ地又ハ其他犯人ノ至ラント爲ス地ニ到ル迄其通行

ス可キ道路ヲ定ムル救濟ノ路券ヲ渡ス可シ

第六項 第四項及ヒ第五項ニ定メタル規則ニ違背スルコト於テハ

國ノ安寧ヲ爲メ其犯人ヲ「グイヤノス」南亞墨利加洲ニ「アル」又ハ「ルセリ」亞弗利加洲ニ「アル」佛蘭西ノ屬地ニ遷徙ス可シ

第四十五條 政府ノ監察ヲ受ケル犯人前條ノ規則ニ背ク時ハ輕罪裁判所ヨリ五年ニ過キカル期限間禁錮ノ刑ヲ言渡ス可シ

第四十六條 (千八百三十二年四月二十八日廢ス)

第四十七條 有期ノ徒刑囚獄ノ刑徒刑場内ニ於テ使役スル刑ノ言渡ヲ受ケシ者ハ其刑期ノ終リシ後畢生間政府ノ監察ヲ受ク可シ

第四十八條 追放ノ刑ヲ言渡ヲ受ケシ者ハ其刑期ノ終リシ後其刑期ノ期限ニ等シキ時間政府ノ監察ヲ受ク可シ

第四十九條 國ノ内外ノ安寧ヲ害スル重罪又ハ輕罪ヲ爲メ刑ヲ受ケシ者ハ亦前ニ記スル所ニ同シク政府ノ監察ヲ受ク可シ

第五十條 前數條ニ定メタル場合ノ外ハ犯人ヲシテ政府ノ監察ヲ受ケシム可カラズ但シ法律ノ別段ナル規則ニテ之ヲ允許シタル時ハ

格別ナリトス

第五十一條 犯人ヨリ民事ノ原告人ニ品物ヲ還ス可キ時若シ其原告人其品物取還ノ外ニ損害ノ償ヲ求ムル時ハ裁判所ヨリ犯人ニ其償

ノ旨ヲ言渡ス可シ但シ其償ノ高ハ別段法律上ニ定メサル場合ニ於テハ裁判所ヨリ之ヲ定ム可シ又裁判所ニ於テハ縱令民事原告人ノ

承諾アリト雖モ其償額ヲ他事ニ移シ用フルコトヲ言渡ス可カラズ

第五十二條 若シ犯人罰金ヲ出シ又ハ品物ヲ還シ又ハ損害ヲ償ヒ又ハ裁判所費用ヲ償フ可キノ言渡ヲ受ケタル時其言渡ニ循ハサルニ

於テハ其犯人ヲ禁錮ノ刑トハ異ナシ

第五十三條 政府ノ爲メ犯人ニ罰金及ヒ裁判所費用ヲ出ス可キ言渡
 ヲ爲シタル時若シ其犯人施體又ハ加辱ノ刑期ノ終リシ後其罰金及
 ヒ裁判所費用ヲ出サハルニ因リ滿一年以上禁錮ヲ受ケタルニ於テ
 ハ其金高ヲ償フコト能ハサルノ確證ヲ法律ニ循ヒ得タル上ニテ假リ
 ニ其禁錮ヲ赦宥スルコトヲ得可シ
 又輕罪ニ管シタル時ハ其禁錮ノ期限ヲ六月ニ減ス可シ然レ犯人其
 金高ヲ償フ可キ資産ヲ得タル時ハ更ニ之ヲ禁錮ス可シ
 第五十四條 官ニ罰金ヲ納ムルト原告人ニ品物ヲ還シ及ヒ損害ノ償
 ヲ爲スト相觸レテ犯人ノ財産其罰金ト其返還及ヒ償額トニ充ツル
 ニ足ラサル時ハ原告人ヘノ返還及ヒ損害ノ償ヲ罰金ヨリ前ニ出サ
 シム可シ
 第五十五條 同一ノ重罪又ハ輕罪ニ因リ刑ヲ受ケシ各人ハ罰金返還

損害ノ償裁判所費用ヲ互ニ連帶シテ擔當ス可シ

○第四章 重罪及ヒ輕罪ヲ再犯シタル刑

第五十六條 施體又ハ加辱ノ刑ノ言渡ヲ受ケシ後更ニ主タル刑トシ
 テ公權剝奪ノ刑ヲ言渡ス可キ重罪ヲ犯シタル者ハ追放ノ刑ノ言渡
 ヲ受ツ可シ
 更ニ追放ノ刑ニ處ス可キ重罪ヲ犯セシ者ハ囚獄ノ刑ニ處ス可シ
 更ニ徒刑場内ニ於テ使役スル刑ニ處ス可キ重罪ヲ犯セシ者ハ有期
 ノ徒刑ニ處ス可シ
 更ニ囚獄ノ刑ニ處ス可キ重罪ヲ犯セシ者ハ至重ナル囚獄ノ刑ニ二
 倍ヨリ多カラサル期限間囚獄ノ刑ニ處ス可シ
 更ニ有期ノ徒刑ニ處ス可キ重罪ヲ犯セシ者ハ至重ナル有期ノ徒刑
 ノ二倍ヨリ多カラサル期限間有期ノ徒刑ニ處ス可シ

更ニ流罪ニ處ス可キ重罪ヲ犯セシ者ハ無期ノ徒刑ニ處ス可シ
 一旦無期ノ徒刑ヲ言渡サレシ者更ニ無期ノ徒刑ニ處ス可キ重罪ヲ
 犯セシ者ハ死刑ニ處ス可シ
 海陸軍裁判所ニ於テ刑ヲ受ケシ者其後更ニ輕重罪ヲ犯スニ因リ再
 犯ノ刑ニ處ス可キハ當テ海陸軍ノ裁判所ニ於テ其刑法ヲ用ヒス通
 常ノ刑法ニ從テ刑ヲ言渡シタル輕重罪ノ場合ノミニ限ル可シ
 第五十七條 (千八百六十三年五月十三日如左改ム)重罪ノ爲メ一年間
 以上ノ禁錮ノ刑ヲ言渡サレシ後更ニ懲治ノ刑ニ處ス可キ輕罪又ハ
 重罪ヲ犯セシ者ハ法律上ニ定メタル至重ノ懲治刑ニ處セラレ可シ
 但シ其期限ハ通常ノ期限ノ二倍ニ至ル迄之ヲ増スコトヲ得可シ
 此刑ノ言渡ヲ受ケシ者ハ五年ヨリ少カラズ十年ヨリ多カラサル時
 間政府ノ監察ヲ受ク可シ

第五十八條 (千八百六十三年五月十三日如左改ム)輕罪ノ爲メ一年以
 上禁錮ノ刑ノ言渡ヲ受ケシ者其後更ニ懲治ノ刑ニ處ス可キ輕罪又
 ハ重罪ヲ犯セシ時ハ法律上ニ定メタル至重ノ懲治刑ニ處セラレ可
 シ但シ其期限ハ通常ノ期限ノ二倍ニ至ル迄之ヲ増スコトヲ得可シ又
 其再犯人ハ五年ヨリ少カラズ十年ヨリ多カラサル時間政府ノ監察
 ヲ受ク可シ

輕罪又ハ重罪ヲ行フヲ知リ故ラニ其輕重ノ罪犯ヲ爲ス可キ設備ヲ爲シ又ハ其罪犯ヲ容易ナラシメ又ハ輕重罪ヲ成就スルノ助ヲ爲シ其首謀ニ助力スル者ハ其輕罪又ハ重罪ノ附從ト爲シテ罰ス可シ但シ此條ニ記スル所ト國ノ内外ノ安寧ヲ害ス可キ陰謀暴動ヲ爲ス者其目的タル重罪ヲ行フヲ能ハサル時ト雖モ之ヲ罰スルカ爲メ此刑法中ニ別段定メタル刑ト相觸ル、コトナカル可シ

第六十一條 國ノ安寧公ケノ靜謐又ハ身體及ヒ財產ニ對シ妨害強奪ヲ爲ス者ノ兇行ヲ知リ故ラニ家屋及ヒ隱匿ノ地又ハ聚會所ヲ常ニ貸與シル者ハ其附從ト爲シテ罰ス可シ

第六十二條 重罪及ヒ輕罪ヲ犯シテ盜奪竊取シタル品物ノ全部又ハ一部ヲ故ラニ隱匿シタル者ハ其重罪及ヒ輕罪ノ附從トシテ罰ス可シ

第六十三條 然レ重罪ノ首謀ヲ死刑ニ處ス可キ時ハ其贓物ヲ隱匿セシ者ヲ無期ノ徒刑ニ處ス可シ

何レノ場合ニ於テモ贓物ヲ隱匿セシ者其事ヲ爲セシ時ニ當リ犯罪ノ首謀ノ死刑又ハ無期ノ徒刑又ハ流刑ニ處セラル可キ模樣アルヲ知リタル證據ノ分明ナル時ニ非サレハ其隱匿者ヲ無期ノ徒刑又ハ流刑ニ處ス可カラズ若シ然ラサレハ之ヲ有期ノ徒刑ニ處ス可シ

第六十四條 重罪又ハ輕罪ニ當ル可キ所行ヲ爲シタル者當時或ハ狂頓ニ罹リ或ハ抗拒ス可カラサル威迫ニ因テ其事ヲ爲シタルニ於テハ之ヲ重罪トモ輕罪トモ爲ス可カラズ

第六十五條 法律上ニ於テ重罪又ハ輕罪ノ犯ヲ宥恕ス可シト定メ又ハ其刑ヲ輕減ス可シト定メタル場合ト模樣トニ非サレハ其重罪又ハ輕罪ヲ宥恕シ又ハ輕減ス可カラズ

第六十六條 若シ犯人ノ十六歳以下ニシテ其重罪犯ノ無意ニ出ルト云フ決定アル時ハ其罪ヲ宥恕ス可シ然レ犯罪ノ模様ニ因リ犯人ヲ其親族ニ預ケ又ハ懲治場ニ入レ裁判言渡書ヲ以テ定ム可キ年數間禁錮シテ養ヒ置ク可シ但シ其年數ハ犯人ノ齡二十歳ニ滿ル期限ニ過ク可カラズ

第六十七條 若シ其犯人故意ヲ以テ其重罪ヲ犯セシト云フ決定アル時ハ左ノ如ク其刑ヲ言渡ス可シ
若シ其重罪ノ死刑無期ノ徒刑又ハ流刑ニ處ス可キ者タル時ハ犯人ヲ懲治場ニ入レ十年ヨリ少カラズ二十年ヨリ多カラサル時間禁錮シ刑ヲ言渡ス可シ
若シ其重罪ノ有期ノ徒刑囚獄ノ刑又ハ徒刑場内ニ於テ使役スル刑ニ處ス可キ者タル時ハ其刑中ニ於テ犯人ヲ處ス可キ刑ノ期限ノ三分ノ一ヨリ少カラズ其半ヨリ多カラサル時間懲治場ニ禁錮スルノ刑ヲ言渡ス可シ

何レノ場合ニ於テモ裁判所ノ言渡ニ因リ五年ヨリ少カラズ十年ヨリ多カラサル時間政府ヨリ其犯人ヲ監察スルコトヲ得可シ
若シ其犯人ノ罪公權剝奪ノ刑又ハ追放ノ刑ニ處ス可キ者タル時ハ一年ヨリ少カラズ五年ヨリ多カラサル時間懲治場ニ禁錮スルノ刑ヲ言渡ス可シ
第六十八條 十六歳以下ノ者其附從ニ現ニ召捕ヘラレタル十六歳以上ノ者ナクシテ死刑無期ノ徒刑流刑又ハ囚獄ノ刑ニ處ス可キモノニ非サル重罪ヲ犯シタル時ハ輕罪裁判所ニテ前二條ニ循ヒ之ヲ裁判ス可シ
第六十九條 若シ十六歳以下ノ幼者輕罪ヲ犯シタル時之ヲ處ス可キ

刑ハ其犯人十六歳以上ノ時ニ於テ處セラレ可キ刑ノ半ハ以上ニ及
フ可カラズ

第七十條 裁判官渡ノ時ニ於テ滿七十歳以上ノ犯人ハ無期ノ徒刑流
刑又ハ有期ノ徒刑ニ處ス可カラズ

第七十一條 其七十歳以上ノ者ニ付テハ其刑ヲ左ノ如ク換フ可ク
流刑ハ無期ノ囚獄刑ニ換ヘ無期ノ徒刑ハ定期ナク徒刑場内ニ於テ

使役スル刑ニ換ヘ有期ノ徒刑ハ之ノト同一ノ期間徒刑場内ニ於テ
使役スル刑ニ換フ可シ

第七十二條 若シ無期ノ徒刑又ハ有期ノ徒刑ニ處セラレシ者其刑期
中ニ滿七十歳ノ齡ニ至ル時ハ其時ヨリ後其刑ノ期限間徒刑場内ニ

禁錮スルノ刑ニ換ヘ初メヨリ徒刑場内ニ於テ使役スル刑ニ處セラ
ルヲ同視ス可シ(千八百五十四年五月三十日廢ス)

第七十三條 旅店ニ滞留ノ時間重罪又ハ輕罪ヲ犯セシ者ヲ二十四時

間以上泊宿セシメタルノ證アル旅店ノ主人若シ旅人ノ名簿中ニ其

犯人ノ姓名職業住所ヲ記スルコトヲ怠リシ時ハ其重罪又ハ輕罪ノ爲

メ損害ヲ受ケタル者ニ物ヲ還シ償ヲ爲シ裁判費用ヲ拂フ可キコト

民法ノ規則ニ循ヒ擔當ス可シ但シ此條ト民法第千九百五十二條及

ヒ第千九百五十三條ニ記シタル場合ニ於テ其店主ノ擔當ス可キ事

ト相觸ル、コトナカル可シ

第七十四條 其他重罪輕罪註誤ニ付キ民法ノ規則ニ循ヒ他人ノ犯罪

ヲ擔當ス可キ場合ニ於テハ其犯罪ヲ審判スル裁判所ニ於テ民法第

三篇第四卷第二章ノ規則ニ循フ可シ

此規則ニ依テ可シ

第七十七條 國敵ノ佛蘭西領地及ヒ屬地ニ進入スルヲ容易ナラシメ又ハ國敵ニ佛蘭西ニ屬スル都府、城塞、陣營、港口、倉庫、武庫、船舶ヲ渡シ又ハ敵國ニ兵卒、人數、金銀、食料、兵器、彈藥ノ資助ヲ給與シ又ハ士官、兵卒、水夫及ヒ其他ノ者ノ皇帝及ヒ國ニ對スル忠誠ノ心ヲ誘惑シ或ハ其他ノ方法ヲ以テ佛蘭西海陸ノ所領又ハ佛蘭西ノ海陸軍ニ向ヒ敵兵ノ進撃ヲ助ク可キ爲メ國敵ト共ニ陰謀ヲ企テ又ハ通問シタル者ハ死刑ニ處テ可シ

第七十八條 二國敵ノ臣民ト通問スルニ付キ前條ニ記シタル重罪中ノ一箇ヲ目的ト爲メトナシト雖モ佛蘭西又ハ佛蘭西ノ與國ノ兵事及ヒ政事ノ模様ニ付キ害トナル可キ報知ヲ敵國ニ爲シタル事ノ生スルニ至ル時其通問ヲ爲シタル者ヲ囚獄ノ刑ニ處ス可シ但シ此規

則ト間諜ノ所爲ヲ以テ通問ヲ爲シ敵ニ其報知ヲ爲シタル時更ニ重キ刑ニ處ス可キ規則ト相觸ルコトナカル可シ

第七十九條 第七十六條及ヒ第七十七條ニ記シタル姦謀及ヒ通問ハ佛蘭西ニ對シテ行ヒシ時ト雖モ又ハ佛蘭西ノ敵ト兵ヲ構スル佛蘭西ノ與國ニ對シテ行ヒシ時ト雖モ共ニ此二條ニ記シタル刑ヲ以テ罰ス可シ

第八十條 佛蘭西ノ官吏又ハ其他ノ者其職掌又ハ其身分ニ因リ商議或ハ出兵ノ密事又委託ヲ受テ又ハ其密事ヲ知ルコトヲ得タル時若シ其密事ヲ外國又ハ敵國ノ官吏ニ洩漏シタルニ於テハ第七十六條ニ記シタル刑ニ處セラル可シ

第八十一條 佛蘭西ノ官吏及ヒ政府ヨリ委任ヲ受ケタル者其職掌ニ因テ城塞、武庫、港口ノ圖面ヲ預カリ其圖面ヲ敵國又ハ敵國ノ官吏ニ

渡セシ時ハ死刑ニ處セラル可シ
若シ其圖面ヲ中立國又ハ與國ヲ問ハス外國ノ官吏ニ渡シタル時ハ
囚獄ノ刑ニ處セラル可シ

第八十二條 前條ニ記スルヨリ以外ノ者賄賂詐偽暴行ニ因リ其圖面
ヲ得テ之ヲ敵國又ハ外國ノ官吏ニ渡シタル時ハ前條ニ記スル者ト
同一ノ刑ニ處セラル可シ但シ其圖面ヲ敵國ニ渡セシ者ト外國ニ渡
セシ者トノ刑ノ差別ハ前條ニ同シ

其圖面ヲ敵國又ハ外國ニ渡セシ者不正ノ方法ヲ用ヒスシテ之ヲ得
タル時ハ前條ノ首項ニ記シタル場合ニ於テハ流刑ニ處セラル可シ
又前條ノ次項ニ記シタル場合ニ於テハ二年ヨリ少カラス五年ヨリ
多カラサル時閉禁錮ノ刑ニ處セラル可シ
第八十三條 敵國ノ間諜又ハ探索ニ來リシ兵卒ナルコトヲ知テ之ヲ匿

シ置キ又ハ匿シ置カシメタル者ハ死刑ニ處セラル可シ

第八十四條 外國ニ對シ政府ヨリ許サレテ敵對ノ所行ヲ爲スニ因リ
外國ニ對シ我國ニ對シ排兵ノコトヲ公告スルニ至ラシムル者ハ追放
ノ刑ニ處セラル可シ若シ其事ニ因テ現ニ戰爭ニ至ル時ハ流刑ニ處
セラル可シ

第八十五條 外國ニ對シ政府ヨリ許サレテ所行ヲ爲スニ因リ外國ニ
對シ佛蘭西人ニ對シ其報復ヲ行フニ至ラシムル者ハ追放ノ刑ニ處
セラル可シ

○第二款 國ノ内部ノ安寧ヲ害スル重罪

○第一節 皇帝及ヒ皇族ニ對シタル暴行及ヒ陰謀

第八十六條 一千八百五十三年六月十日如左改メ皇帝ノ生命及ヒ身體
ニ對シタル暴行ハ尊屬ノ親ヲ弑スル者ノ刑ヲ以テ罰ス可シ

皇族ノ生命及ヒ身體ニ對シタル暴行ハ死刑ヲ以テ罰ス可シ

皇族ノ身體ニ對シタル暴行ハ城寨中ニ謫スル流刑ヲ以テ罰ス可シ

皇帝ニ對シ公ケニ行ヒタル諸般ノ害科ハ六月ヨリ少カラス五年ヨ

リ多カラサル時間禁錮ノ刑ト五百フランクヨリ少カラス一萬フラン

クヨリ多カラサル罰金トヲ以テ罰ス可シ

又其犯人ニ其禁錮ノ期限ニ等シキ時間第四十二條ニ記シタル權利

ノ全部又ハ一部ヲ行フ可カラサルノ禁ヲ受ケシムルコトヲ得可シ但

シ其時間ハ刑期ノ終リシ日ヨリ之ヲ算フ可シ

皇族ニ對シ公ケニ行ヒタル諸般ノ害科ハ一月ヨリ少カラス三年ヨ

リ多カラサル時間禁錮ノ刑ト百フランクヨリ少カラス五千フラン

クヨリ多カラサル罰金トヲ以テ罰ス可シ

第八十七條 (千八百五十三年六月十日如左改ム) 政府ヲ覆ヘシ又ハ皇

嗣ノ順序ヲ紊リ又ハ臣民ヲシテ帝權ヲ拒ミ兵器ヲ弄セシメトス

ルコトヲ以テ目的ト爲ス暴行ハ城寨中ニ謫スル流刑ヲ以テ罰ス可シ

第八十八條 其暴行ヲ既ニ行ヒ又ハ之ヲ行ントスル謀試ヲ爲シタル

コト非サレハ暴行ノ罪アリトセス

第八十九條 第八十六條及ヒ第八十七條ニ記シタル重罪ヲ目的ト爲

シタル陰謀ヲ醸シ之ヲ行ハントスル豫備ヲナスノ所爲ヲ既ニ行ヒ

又ハ行ヒ掛ケタル時ハ流刑ヲ以テ罰ス可シ

若シ其陰謀ヲ行ハントスル豫備ヲナスノ所爲ヲ既ニ行ヒ又ハ行ヒ

掛ケタルコトナキ時ハ囚獄ノ刑ヲ以テ罰ス可シ

二人以上ニテ事ヲ行ハント商議シ且決定シタル時ハ陰謀ノ罪アリ

トス

第八十六條及ヒ第八十七條ニ記シタル重罪犯ヲ爲スル陰謀ヲ

爲スル者ハ

醜大可キ發言ヲナス者アリト雖モ互ニ協議セサル時ハ其發言者ヲ
一年ヨリ少カラス五年ヨリ多カサル時閉禁錮ノ刑ニ處シ且其犯
人ニ第四十二條ニ記シタル權利ノ全部又ハ一部ヲ行フノ禁ヲ受ケ
シムルコト得可シ

第九十條 一人ニテ第八十六條ニ記シタル重罪犯ヲ行ハント決定シ
且之ヲ行ハントスル豫備ヲナスノ所爲ヲ他人ノ助ナク一人ニテ行
ヒ又ハ行ヒ掛ケタル時ハ囚獄ノ刑ニ處ス可シ

○第二節 内亂又ハ法ニ背キテ兵ヲ動カシ又ハ公ケテ亂妨
掠奪ヲ爲スニ因リ國ヲ騷ス重罪

第九十一條 國民ヲシテ互ニ兵器ヲ弄セシメ或ハ兵器ヲ弄セシメン
トシテ内亂ヲ起サント爲シ又ハ一邑或ハ數邑ニ於テ亂妨虐殺掠奪
ヲ爲スヲ目的ト爲シタル暴行ハ死刑ヲ以テ罰ス可シ

此重罪中ノ一ヲ目的ト爲シタル陰謀及ヒ其陰謀ヲ醸サントスル發
言ハ第八十九條ニ記シタル刑ヲ以テ罰ス可シ但シ此等ノ罪犯ノ刑
ノ差別モ亦同條ニ循フ可シ

第九十二條 正當ノ威權アル者ノ命令又ハ其允許ナクシテ兵器ヲ携
ヘタル羣衆ヲ募聚シ或ハ募聚セシメ又ハ兵卒ヲ雇ヒ或ハ雇ハシメ
又ハ兵卒ヲ募聚シ或ハ募聚セシメ又ハ其羣衆或ハ兵卒ニ兵器或ハ
彈藥ヲ給與シタル者ハ死刑ニ處セラル可シ

第九十三條 正當ノ權利ナク又ハ正當ノ道理ナクシテ一軍一隊一大
船隊一小船隊兵船城寨陣營港口都府ヲ指揮スル職ヲ執リシ者
政府ノ命ニ背キ兵ニ管係シタル指揮ノ職ヲ保持スル者
軍隊ヲ解散シ又ハ離分ス可キノ命ヲ受ケシ後猶其軍隊ヲ屯聚シ置
キタル指揮官

此等ノ者ハ死刑ニ處セラル可シ

第九十四條 兵權ヲ握リタル者法律上ニ定メタル兵卒召募ヲ妨ケン
カ爲メ己ノ指揮スル兵ヲ使用スルヲ求メ或ハ之ヲ命令シ又ハ其求
需或ハ命令ヲ爲サシメタル時ハ流刑ニ處セラル可シ

若シ其求需或ハ命令ニ因リ現ニ兵卒ノ召募ヲ妨ケタル時ハ其犯人
ヲ死刑ニ處ス可シ

第九十五條 地雷火ヲ破裂セシメ官ニ屬スル建造物倉庫武庫船舶及
ヒ其他ノ財産ヲ焚毀シ又ハ毀壞セシ者ハ死刑ニ處セラル可シ

第九十六條 官ニ屬スル土地財産金額城寨都府陣營倉庫武庫港口船
舶ヲ強奪セント爲シ又ハ公ケノ財産又ハ人民一般ノ財産ヲ掠奪シ
或ハ分配セント爲シ又ハ此重罪ヲ行フ者ヲ取押フル官ノ兵力ヲ襲
撃シ或ハ抗拒ス可キ爲メ兵器ヲ携ヘタル羣衆ノ首トナリ又ハ其羣

衆中ニ於テ職務ヲ行ヒ或ハ指揮役トナリタル者ハ死刑ニ處セラル
可シ

此羣衆ヲ募聚スル指揮ヲ爲シ又ハ其羣衆ヲ募聚シ或ハ募聚セシメ
又ハ其羣衆ヲ編成シ又ハ故ヲ其羣衆ニ兵器彈藥其他兇行ヲ爲ス
可キ器具ヲ與ヘ又ハ食料ヲ給シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ其羣衆ヲ指
揮スル者ト通問シタル者ハ死刑ニ處セラル可シ

第九十七條 群衆ヲ爲シタル者第八十六條第八十七條第九十一條ニ
記シタル重罪犯ノ一箇又ハ數箇ヲ行ヒ又ハ行ヒ掛ケタル時其群衆
中ノ官命ニ抗シ集會セシ場所ニ於テ逮捕ヲ受ケシ者ハ其等級ノ區
別ヲ論セテ死刑ニ處セラル可シ
其集會ノ場所ニ於テ逮捕ヲ受ケシニ非スト雖モ官命ニ抗スル群衆
ヲ統轄シ或ハ其群衆中ニ於テ指揮役或ハ職務ヲ行ヒシ者ハ死刑ニ

處セラル可シ

第九十八條 官命ニ抗シテ會衆ヲ爲スト雖モ第八十六條第八十七條
第九十一條ニ記シタル重罪犯ノ一箇又ハ數箇ヲ以テ目的ト爲シ又
ハ之ヲ行フタルニ非サル時ハ前數條ニ記シタル群衆中ノ者其集會
ノ場所ニ於テ逮捕ヲ受クルト雖モ其指揮役或ハ職務ヲ行ハサル時
ハ流刑ニ處セラル可シ

第九十九條 前數條ニ記シタル群衆ノ目的及ヒ情態ヲ知り脅迫ニ因
ラズシテ其群衆ニ家屋又ハ隱匿ノ場所又ハ集會所ヲ貸與ヘタル者
ハ有期ノ徒刑ニ處セラル可シ

第一百條 其群集中ニ於テ指揮役又ハ職務ヲ行フコトナク文武官吏ノ
叱責ニ因リ直チニ其黨ヲ離脱スル者又ハ文武官吏ノ叱責ノ後ト雖
モ政府ノ命ニ抗シ集會ヲ爲シタル場所外ニ於テ抗拒ヲ爲スコトナク

且兵器ヲ携フルコトナクシテ逮捕ヲ受ケシ者ハ政府ノ命ニ抗スル所
行ノ爲メ刑ヲ受クルコトナカル可シ

此場合ニ於テハ犯入其自カラ行フタル重罪ノミニ付キ罰ヲ受ク可
シ但シ其犯人ニ五年ヨリ少カラズ十年ヨリ多カラサル時間政府ノ
監察ヲ受ケシムルコトヲ得可シ

第一百一條 兵器トハ斫拗毆ヲ爲ス諸器具ヲ云フ

懷中小刀、剪刀及ヒ尋常ノ杖ハ人ヲ殺シ又ハ毆傷ヲ爲ス可キ爲メ用
ヒタル時ノ外之ヲ兵器ト看做ス可カラズ

此款ノ前二節ニ通シ用フ可キ規則

第二百二條 (千八百十九年五月十七日廢ス)

○第三款 國ノ内部又ハ外部ノ安寧ヲ害スル重罪ヲ上告スル
事及ヒ上告セサル事

第三百三條 (廢ス)

第三百四條 (同上)

第三百五條 (同上)

第三百六條 (同上)

第三百七條 (同上)

第三百八條 國ノ内部又ハ外部ノ安寧ヲ害スル陰謀或ハ重罪ノ犯人其陰謀或ハ重罪犯ヲ行ヒ又ハ試ミ爲ントスル前未ク逮捕ノ初マラサル中ニ政府又ハ行政官吏又ハ司法警察官吏ニ其陰謀或ハ重罪ト其首從トキ上告シタル者又ハ既ニ逮捕ノ初マリシ後ト雖モ其從首ヲ捕獲スルヲ助ケシ者ハ其陰謀或ハ重罪犯ヲ爲シタル者ノ刑ヲ宥恕セラル可シ

然レモ其事ヲ上告シ又ハ捕獲ヲ助ケシ犯人ニ其畢生閉又ハ定期間

政府ノ監察ヲ受ケシムルヲ得可シ

○第二章 憲法ヲ害スル重罪及ヒ輕罪

○第一款 公權ヲ行フニ管シタル重罪及ヒ輕罪

第九條 噪聚暴行脅迫ヲ爲シ一人又ハ數人ノ公權ヲ行フヲ妨ケタル時ハ其各犯人六月ヨリ少カラズ二年ヨリ多カラサル時閉禁錮ノ刑ヲ受ケ且五年ヨリ少カラズ十年ヨリ多カラサル時閉議員選舉ノ投票ヲ爲スノ權及ヒ議員ニ選舉ヲ得ルノ權ヲ行フノ禁ヲ受ク可シ

第十條 若シ此重罪犯ヲ全國又ハ一州數州又ハ一郡數郡ニ於テ行ハントスル計謀ヲ以テ爲シタル時ハ其各犯人ヲ追放ノ刑ニ處ス可シ

第十一條 議員選舉ノ投票ノ時其投票ノ數ヲ算計スルノ任ヲ受ケシ者其票ヲ偽造シ又ハ其票ヲ増減シ又ハ文字ヲ書クヲ知ラサル

ルヲ肯セズ又ハ之ヲ忘リタルニ於テハ追放ノ刑ニ處セラル可シ
第百十六條 憲法ニ反シタル所爲ヲ命シ又ハ許シタルノ罪ヲ犯セシ
ト告ラレタル宰相其書上ノ調印他人ノ詭僞ニ出ルト述フル時ハ其
所爲ヲ止メシメ且其詭僞ヲ爲シタル者ノ罪ヲ訴フ可シ若シ然ラサ
レハ其宰相自カラ犯罪ノ訴訟ヲ受ク可シ

第百十七條 第百十四條ニ記シタル暴行ニ付キ言渡ス可キ損害ノ償
ハ刑事ノ訴又ハ民事ノ訴ヲ以テ之ヲ得ント求メ其損害ヲ受ケタル
人ノ身分ト其時ノ景況及ヒ損害ノ多寡トニ准シテ之ヲ定ム可シ但
シ其償額ハ損害ヲ受ケタル人ノ身分ヲ問ハス何レノ場合ニ於テモ
枉ニ禁錮ヲ受ケシ日毎ニ二十五フランノ少キトナカル可シ
第百十八條 宰相及ヒ其他ノ官吏ノ姓名ヲ僞署シテ憲法ニ反シタル
所行ヲ爲セシ時ハ其僞署シタル者及ヒ其僞署タルヲ知テ其書ヲ用

ヒタル者至重ノ有期ノ徒刑ニ處セラル可シ

第百十九條 行政又ハ司法警察ノ任ヲ受ケシ官吏犯人ヲ禁錮スル廠
舎又ハ其他ノ場所ニ於テ法律ニ背キ枉ニ人ヲ禁錮セシトテ證スル
告訴ヲ受ケ其告訴ニ從テ處置スルト肯セズ又ハ之ヲ忘リ且其告
訴ノ旨ヲ其長官ニ報告シタルノ證ナキ時ハ公權剝奪ノ刑ニ處セラ
レ且第百十七條ニ記シタル所ノ償額ヲ言渡サル可シ

第百二十條 獄舎及ヒ留置場ノ監守人及ヒ其門監禁錮狀收監狀又ハ
裁判言渡書又ハ政府ノ假ノ命令書ナクシテ囚人ヲ收受シタル時又
ハ檢事或ハ裁判役ノ禁制アルトテ證セズシテ囚人ヲ警察官吏或ハ
其官吏ノ命令書ヲ携ヘ來リシ者ニ示ストテ承諾セサル時又ハ獄舎
或ハ留置場中ニアル犯人ノ姓名簿ヲ警察官吏ニ示ス事ヲ肯セサル
時ハ人ヲ枉ニ禁錮セシ罪アル者ト爲シ六月ヨリ少カラズ二年ヨリ

多カラサル時閉禁錮ノ刑ニ處セラル且十六フランクヨリ少カラス
二百フランクヨリ多カラサル罰金ノ言渡ヲ受ク可シ

第二百一十一條 司法警察ノ官吏又ハ檢事長檢事及ヒ其代役或ハ裁判
役法律上ニ定メタル允許ナクシテ宰相或ハ上下議院或ハ參議院ノ
官員ノ罪ヲ告訴セントスル言渡書命令書禁錮狀收監狀ヲ記シ或ハ
之ヲ渡シ或ハ之ニ姓名ヲ手署シタル時又ハ現行ノ罪犯或ハ衆人呼
喚ノ場合ノ外法律上ニ定メタル允許ナクシテ宰相或ハ上下議院及
ヒ參議院ノ官員ノ一人又ハ數人ヲ逮捕ス可キ命令書或ハ禁錮狀收
監狀ヲ渡シ或ハ其書ニ姓名ヲ手署シタル時ハ職務冒濫ノ罪アリト
爲シ公權剝奪ノ刑ニ處セラル可シ

第二百一十二條 檢事長檢事及ヒ其代役或ハ裁判役及ヒ其他ノ官吏政
府又ハ行政官署ニテ定メタル場所ノ外ニ於テ人ヲ禁錮シ或ハ禁錮

セシメタル時又ハ重罪取調局ニテ重罪ヲ告訴スルコトヲ言渡スコトナ
ク直チニ犯人ヲ重罪裁判所ニ呼出セシ時ハ亦公權剝奪ノ刑ニ處セ
ラル可シ

○第三款 官吏ノ通謀

第二百一十三條 公權ヲ任セラルル數人又ハ數局ノ者互ニ會議ヲ爲
シ或ハ其名代人ヲ遣リ又ハ文書ヲ送リテ法律ニ背キ通謀シタル時
ハ其各犯人二月ヨリ少カラズ六月ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ヲ
受ク可ク又其刑ノ外十年ヨリ多カラサル時間公權及ヒ公務ヲ行フ
ノ禁ヲ受ケシムルコトヲ得可シ

第二百一十四條 若シ前條ニ記シタル方法中ノ一ニ因リ法律ヲ施行ス
ルコトヲ妨グ又ハ政府ノ命令ニ抗スル通謀ヲ爲シタル時ハ追放ノ刑
ニ處セラル可シ

若シ文官ト兵隊又ハ其指揮官ト其通謀ヲ爲シタル時ハ其首謀ノ者
ハ流刑ニ處セラレシ其他ノ犯人ハ追放ノ刑ニ處セラル可シ

第二百二十五條 若シ其通謀國ノ内部ノ安寧ヲ害セント爲スヲ以テ其

目的ト爲シ又ハ其安寧ヲ害スルニ至リシ時ハ其犯人ヲ死刑ニ處ス

可シ

第二百二十六條 官吏故ラニ退職シテ裁判ノ執行又ハ公務ノ成就ヲ妨

テ或ハ阻止セシト欲シ又ハ之ヲ妨テ或ハ阻止シタル時ハ職務冒瀆

ノ罪アリト爲シ公權剝奪ノ刑ニ處セラル可シ

○第四款 行法權及ヒ司法權ヲ侵ス罪

第二百二十七條

第一 裁判役檢事長檢事或ハ其代役或ハ警察官吏立法ノ規則ヲ
制定シ又ハ法律ノ施行ヲ妨テ或ハ阻止シ又ハ其法律ヲ公告シ

或ハ之ヲ施行スルノ可否ヲ論シテ立法權ヲ行フニ干渉シタル

時

第二 裁判役檢事長檢事或ハ其代役或ハ警察官吏行法ノ事務ニ

干渉スル規則ヲ立テ又ハ行法官ノ命令ヲ施行スルヲ禁シ行法

ノ權ニ干渉シテ自己ノ權限ニ過キタル所行ヲ爲シタル時又ハ

行法官吏ヲ其職務上ノ事ニ付キ裁判所ニ呼出ス可キトテ原告

人ニ許シ或ハ之ヲ言渡シタル後其言渡ヲ取消ス可キノ命ヲ受

ケ或ハ其訴ヲ管スルノ權ヲ命セラルト雖モ猶其言渡

ト如ク執行ハシテ固執スル時

此等ノ場合ニ於テハ職務冒瀆ノ罪アリト爲シ公權剝奪ノ刑ニ處セ

ラル可シ

第二百二十八條 裁判役其裁判所ニ告訴セシ事件行法官ノ管轄タル可

キ公ケノ掛合ヲ受ケ上班ノ官吏ノ決定ヲ待テシテ其訴ノ裁判ヲ爲
シタル時ハ其各裁判役十六フランクヨリ少カラス百五十フランク
ヨリ多カラサル罰金ノ言渡ヲ受ク可シ
其裁判ヲ求メタル檢察官吏ハ亦同一ノ刑ニ處セラル可シ

第二百二十九條 裁判役管係本人或ハ行法官吏ヨリ正當ノ掛合ヲ得
ル後政府ノ允許ナクシテ職務ヲ行フニ付キ罪ヲ犯セシ官吏又ハ政
府ヨリ委任ヲ受ケシ者ヲ罰ス可キ言渡ヲ爲シ或ハ裁判所ヘノ呼出
狀ヲ渡シタル時ハ百フランクヨリ少カラス五百フランクヨリ多カ
ラサル罰金ノ言渡ヲ受ク可シ
其言渡ヲ爲シ又ハ呼出狀ヲ渡ストテ求メタル檢察官及ヒ警察官吏
ハ亦同一ノ刑ニ處セラル可シ

第二百三十條 第二百二十七條ノ第一ニ記シタル如ク立法權ヲ行フニ干

渉シ又ハ裁判所ニ命令或ハ禁止ヲ告知スル一般ノ決定ヲ爲スニ干
渉シタル州長郡長邑長及ヒ其他ノ行政官吏ハ公權剝奪ノ刑ニ處セ
ラル可シ

第二百三十一條 前條ニ記スル所ノ官吏裁判所ノ統轄タル私ノ權利ヲ
裁判スルコトニ干涉シテ司法ノ職務ヲ行ハント爲シ且原告及ヒ被告
ノ雙方又ハ一方ヨリ其裁判ヲ受ケサル旨ヲ申立ルト雖モ上班ノ吏
ノ言渡ヲ待タズシテ其裁判ヲ行ヒシ時ハ十六フランクヨリ少カラ
ズ百五十フランクヨリ多カラサル罰金ノ言渡ヲ受ク可シ
第三章 公ケノ靜謐ニ對シタル重罪及ヒ輕罪

○第一款 賈造

○第一節 賈金

第二百三十二條 (千八百六十三年五月十三日如左改ム)佛蘭西國ニ於テ

當然通用ノ金銀貨幣ヲ贋造或ハ變造セシ者又ハ其贋造或ハ變造ノ
 貨幣ヲ發行シ或ハ公ケニ展示スル事ニ加リタル者又ハ其貨幣ヲ佛
 蘭西領地内ニ携へ來ル事ニ加リタル者ハ無期ノ徒刑ニ處セラル可
 シ

佛蘭西國ニ於テ當然通用ノ銅貨幣ヲ贋造或ハ變造セシ者又ハ其贋
 造或ハ變造ノ貨幣ヲ發行シ又ハ公ケニ展示スル事ニ加リタル者又
 ハ其銅貨幣ヲ佛蘭西國領地内ニ携へ來ル事ニ加リタル者ハ有期ノ
 徒刑ニ處セラル可シ

第三百三十三條 千八百六十三年五月十三日如左改ム外國ノ貨幣ヲ佛
 蘭西ニ於テ贋造或ハ變造セシ者又ハ贋造或ハ變造ノ外國貨幣ヲ佛
 蘭西國內ニ於テ發行シ或ハ公ケニ展示シ或ハ携へ來ル事ニ加リタ
 ル者ハ有期ノ徒刑ニ處セラル可シ

第三百三十四條 千八百六十三年五月十三日如左改ム佛蘭西國ニ於テ
 當然通用ノ貨幣或ハ外國ノ貨幣ニ綠色ヲ加ヘ其金質ヲ僞ラント爲
 ス者又ハ其綠色ヲ加ヘタル貨幣ヲ佛蘭西國內ニ於テ發行シ或ハ携
 へ來ル者ハ六月ヨリ少カラヌ三年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑
 ニ處セラル可シ

此綠色ヲ加ヘタル貨幣ヲ發行シ又ハ携へ來ルコトニ加リタル者ハ亦
 同上ノ刑ニ處セラル可シ

第三百三十五條 千八百六十三年五月十三日如左改ム前三條ニ記スル
 罪犯ニ加リタル刑ハ贋造變造或ハ綠色ヲ爲シタル貨幣ヲ好質ノ
 貨幣ト思ヒ之ヲ受取リテ用ヒシ者ニ通シ用フ可カラヌ

然シ其貨幣ノ惡質ナルコトヲ證シ又ハ證セシメシ後ニ之ヲ用ヒタ
 ル者ハ其用ヒタル金高ノ三倍ヨリ少カラヌ六倍ヨリ多カラサル罰

金ノ言渡ヲ受リ可シ但シ如何ナル場合ニ於テモ其罰金ハ十六ノ倍
 ノクモリ少キコナカル可シ

第三百三十六條 (千八百三十二年四月二十八日廢ス)

第三百三十七條 (千八百三十二年四月二十八日廢ス)

第三百三十八條 (千八百六十三年五月十三日如左改ム) 第三百三十二條ニ
 記シタル重罪ヲ犯セシ者其重罪犯ヲ成就スル前未タ犯罪ノ訴ヲ受
 ケサル中ニ其重罪犯ノ旨ト其首謀者トヲ相當ノ官吏ニ告知シタル
 時又ハ犯罪ノ訴ヲ受ケタル後ト雖モ他ノ犯人ヲ逮捕スルヲ助ケシ
 時ハ其刑ヲ宥恕ス可シ

然レモ同上ノ者ニ畢生間又ハ定期ノ時間政府ノ監察ヲ受ケシムル
 事ヲ得可シ

○第二節 國貨銀行ノ手形國貨證券金銀ノ鑿記證券印紙記

號ノ贋造

第三百二十九條 國貨ヲ贋造シ又ハ贋造ノ國貨ヲ用ヒタル者
 官ノ會計局ヨリ發行セシ記號アル國債ノ證券又ハ法律ヲ以テ允許
 セシ銀行ノ手形ヲ贋造變造シタル者又ハ其贋造變造ノ證券或ハ手
 形ヲ用ヒタル者又ハ其證券或ハ手形ヲ佛蘭西領地内ニ携ヘ來リシ
 者

此等ノ犯人ハ無期ノ徒刑ニ處セラル可シ

第三百四十條 證券印紙又ハ伐出サント爲ス樹木ニ印スル官ノ鑿記又
 ハ金銀ノ質ヲ極ル爲メノ鑿記ヲ贋造變造セシ者又ハ贋造變造ノ印
 紙或ハ鑿記ヲ用ヒタル者ハ至重ノ有期ノ徒刑ニ處セラル可シ

第三百四十一條 前條ニ記セシ所ノ用ニ充ツ可キ真正ノ印紙又ハ鑿記
 ナ不當ニ所得ト爲シ官ノ權利ノ害トナル可キ方法ニ之ヲ用ヒタル

者ハ徒刑場内ニ於テ使役スル刑ニ處セラル可シ
 第四百十二條 (千八百六十三年五月十三日如左改ム)政府ノ名義ヲ以
 テ各種ノ物品商品ニ附シ可キ記號ヲ贋造シ或ハ其贋造ノ記號ヲ用
 ヒタル者又ハ官署ノ印及ヒ記號ヲ贋造シ或ハ其贋造ノ印及ヒ記號
 ヲ用ヒタル者又ハ郵便切手ヲ贋造シ或ハ其贋造シタル郵便切手ヲ
 故テニ用ヒタル者ハ二年ヨリ少カラズ五年ヨリ多カラサル時間禁
 錮ノ刑ニ處セラル可シ
 又此等ノ犯人ノ其刑ヲ受ケシ日ヨリ五年ヨリ少カラズ十年ヨリ多
 カラサル時間第四十二條ニ記シタル權利ヲ剝奪スルヲ得可シ
 又此等ノ犯人ニ裁判所ノ言渡ヲ以テ五年ヨリ少カラズ十年ヨリ多
 カラサル時間政府ノ監察ヲ受ケシムルヲ得可シ
 又此罪ヲ犯サント謀試セシ者モ亦同上ノ刑ニ處セラル可シ

第四百十三條 (千八百六十三年五月十三日如左改ム)第四百十二條ニ
 記セシ所ノ用ニ充ツ可キ真正ノ印及ヒ記號ヲ不當ニ所得ト爲シ政
 府又ハ官署ノ權利ノ害トナル可キ方法ニ用ヒ又ハ用ヒント試ニ爲
 シタル者ハ六月ヨリ少カラズ三年ヨリ多カラサル時間禁錮ノ刑ニ
 處セラル可シ
 又此犯人ノ其刑ニ處セラレシ日ヨリ五年ヨリ少カラズ十年ヨリ多
 カラサル時間第四十二條ニ記シタル權利ヲ剝奪スルヲ得可シ
 又其犯人ニ裁判所ノ言渡ヲ以テ五年ヨリ少カラズ十年ヨリ多カラ
 サル時間政府ノ監察ヲ受ケシムルヲ得可シ
 第四百十四條 第三百三十八條ノ規則ハ第三百三十九條ニ記シタル重罪
 ニ通シ用フ可シ

○第三節 公ケノ書類公正ノ書類又ハ商業或ハ銀行ノ書類